

の果報を受ける。

一次 田畠は雑草によつて害（ソコナ）われ、この世の人々は、執着、怒り、誤った見解（迷妄）、疑惑、慢心によつて、害（ソコナ）われる。

（口メノム）

G215 節 汚れ G183 詩で兎返りを求める施し（供養）は禁止されましたが、全ての詩の後半部分は削除します。

詩 O356 の中の「愛欲」は妄執と置き換えることにします。やがて O359 の欲求は執着ですから、執着に集約します。さらに無明を除く六汚れ：怒り、悪見、疑惑、慢心を足します。

書き出す順番は、妄執、怒り、悪見、疑惑、慢心とします。

詰浦叩 G206 (F207, C, O349, OS24) 、G207 (F208, B, O350, OS24) [[@ GS 16 執着と欲望]]

G206' [R詰] あれ、われ考えて心が乱れ、愛欲がはげしくやがてに、愛欲を淨らかだと見なす人には、愛執がますます増大する。」の人は実に束縛の糸を堅固たらしめる。

一次 あれこれ考えて心が乱れ、汚れにより心がはげしくやがてに、心の汚れ（不淨）を淨らかだと見なす人には、執着がますます増大する。」の人は実に束縛の糸を堅固たらしめる。

G207 あれ、これの考えをしずめるのを楽しみ、常に心身の汚れ（不淨）を觀察して心を整える人は、実に惡魔の束縛の糸を取り除き、断ち切るであろう。

元詰 あれこれの考えをしずめるのを楽しみ、つねに心にかけて、（身体などを）不淨であると觀じて修する人は、実に惡魔の束縛の糸を取り除き、断ち切るであろう。

一次 あれこれの考えをしずめるのを楽しみ、常に心身の汚れ（不淨）を觀察して心を治める人は、実に惡魔の束縛の糸を取り除き、断ち切るであろう。

（口メノム）

G206 : 愛欲は愛執よりもやがてに上流の心の汚れであることがわかります。

G207 : 不淨という言葉は、よく使うのですが、このテキストで出てくる汚れと同じだと思います。「修する」、「觀ひて」に関しては、わかりやすいようつに現代語に意訳しました。

詰浦叩 G208 (F209, B, O355, OS24) [[@ GS 16 執着と欲望]]

ち切れ。

（口メノム）

G199 : はがいのやさしいものは快樂を求める執着とします。また、執着を潤すものは心の汚れの中でも「愛欲と愛執」とします。

G200 : 欲の流れでも良いのですが、未熟な心が欲する欲である情欲の流れと捉えました。ところが、付録5で記した通り、欲も執着も一概に全て悪いものだという議論は暴論だと思うからです。

「知慧によつて」とは、真人に近いくらいの靈格の高い人たちに対する詩なのでしょう。

詰浦叩 G201 (F202, B, O342+O343, OS24) [[@ GS 16 執着と欲望]]

G201 愛欲と愛執に駆り立てられた人々は、わなにかかるた兔のように、ばたばたする。妄執になぞみ、情欲の激流に束縛され、永い間繰り返し執着しては得られない苦惱を受ける。それ故に、愚かな自己の愛欲と愛執を除き去れ。

元詰 O342 : 愛欲に駆り立てられた人々は、わなにかかるた兔のように、ばたばたする。束縛の糸にしばられ愛著になぞみ、永いあいだくろかえし苦惱を受ける。

O343 : 愛欲に駆り立てられた人々は、わなにかかるた兔のように、ばたばたする。それ故に修行僧は、自己の愛欲を除き去れ。

一次 欲望への執着に駆り立てられた人々は、わなにかかるた兔のように、ばたばたする。欲望になぞみ、欲望の激流に束縛され、永い間繰り返し執着しては得られない苦惱を受ける。それ故に修行僧は、自己の執着を除き去れ。

（口メノム）

二つの詩を一つに合体します。

言葉を定義したものに置き換えます。大量の置き直しがありましたので下記に列挙します。

愛欲→欲望への執着→愛欲、
愛著になぞみ→欲望になぞみ→妄執になぞみ

束縛の糸にしばられ→欲望の激流に束縛され→情欲の激流に束縛され
自己の愛欲→愚かな自己の執着→愚かな自己の愛欲と愛執

詰浦叩 G202 (F203, B, O344, OS24) [[@ GS 16 執着と欲望]]

G202 欲の林から出でてながら、また欲の林に身をゆだね、欲の林から免れていながら、また欲の林に向かつて走る。その人を見よ！ 束縛から脱しているのに、また束縛に向かつて走る。その人には、まだ愛欲が残っている。

元詩 愛欲の林から出ていながら、また愛欲の林に身をゆだね、愛欲の林から免れていながら、また愛欲の林に向つて走る。その人を見よ！ 束縛から脱してい違ひに、また束縛に向つて走る。

一次 欲望の林から出ていながら、また欲望の林に身をゆだね、欲望の林から免れていながら、また欲望の林に向つて走る。その人を見よ！ 束縛から脱してい違ひに、また束縛に向かつて走る。

(口メンソール)

愛欲→欲望→欲に置き換えます。様々な要因で一時的に妄執がなくせても、愛欲と愛執をなくさなければ、また妄執が湧いてくるという意味だと思います。

詩番句 G203 (F204, C, O345+O346, OS24) [[@ GS 16 執着と欲望]]

G203 鉄や木材や麻紐でつくられた枷を、ブツダや真人は堅固な縛とは呼ばない。

財や宝石や耳環・腕輪をやたらに欲しがること、なりふりかまわず家族に惹かれる」と、

一 それが堅固な縛である、と彼らは呼ぶ。

それは低く垂れ、緩く見えるけれども、脱れ難い。

賢い人々は、これらへの執着を統べなくてはならない。

元詩 鉄や木材や麻紐でつくられた枷を、思慮ある人々は堅固な縛とは呼ばない。

宝石や耳環・腕輪をやたらに欲しがること、妻や子にひかれる」と、

一 それが堅固な縛である、と思慮ある人々は呼ぶ。

それは低く垂れ、緩く見えるけれども、脱れ難い。

かれらはこれをさえも断ち切つて、顧みること無く、欲樂をして、遍歴修行する。

一次 鉄や木材や麻紐でつくられた枷を、ブツダや真人は堅固な縛とは呼ばない。

財や宝石や耳環・腕輪をやたらに欲しがること、むやみに家族に惹かれる」と、

一 それが堅固な縛である、と彼らは呼ぶ。

それは低く垂れ、緩く見えるけれども、脱れ難い。

賢い人々は、これらへの執着を離れなくてはならない。

(口メンソール)
家族の構成員は、それぞれ、自分の家庭を維持し守るための勤めは遂行しなくてはなりません。しかし、対外的な場合、むやみやたら

に家族を中心と考えると、正しい判断ができず、悪魔に魅入られることを注意をしていると、考えました。
もちろん家族は大切にしなくてはなりませんし、装飾品も人の心を豊かに明るくしてくれる物でもあります。でも、社会的に責任のある人は、バランスをとつて身を処し、むやみやたらな執着を持たないようにという意味をこめて「統べる」を使用しました。

詩番句 G204 (F205, B, O347, OS24) [[@ GS 16 執着と欲望]]

G204 愛欲、愛執にならんじる人々は、自らの妄執により激流に押し流される。一蜘蛛がみずから作った網にしたがつて行くようなものである。思慮ある人々は、これを断ち切つて、顧みるゝとなくすべての執着を離れ制して歩んで行く。

元詩 愛欲にならずでいる人々は、激流に押し流される、一蜘蛛がみずから作った網にしたがつて行くようなものである。思慮ある人々は、これをも断ち切つて、顧みるゝとなく、すべての苦惱をして、歩んで行く。

一次 欲望にならずでいる人々は、自らの執着により、激流に押し流される。一蜘蛛がみずから作った網にしたがつて行くようなものである。思慮ある人々は、これを断ち切つて、顧みるゝとなく、すべての執着を捨てて、歩んで行く。

(口メンソール)

「愛欲」→「欲望」→「愛欲、愛執」
「すべての苦惱をすして」→「執着を捨てて」→「執着を離れ制して」

と変えます。

詩番句 G205 (F206, C, O356~O359, OS24) [[@ GS 16 執着と欲望]]

G205 田畠は雑草によつて害(ソロナ)われ、この世の人々は、妄執、怒り、誤った見解(迷妄)、疑惑、慢心によつて、害(ソロナ)われる。

元詩 O356.. 田畠は雑草によつて害われ、この世は人々は愛欲によつて害われる。それ故に愛欲を離れた人々に供養して与えるならば、大いなる果報を受ける。

O357.. 田畠は雑草によつて害われ、この世は人々は怒りによつて害われる。これ故に怒りを離れた人々に供養して与えるならば、大いなる果報を受ける。

O358.. 田畠は雑草によつて害われ、この世は人々は迷妄によつて害われる。それ故に迷妄を離れた人々に供養して与えるならば、大いなる果報を受ける。

O359.. 田畠は雑草によつて害われ、この世は人々は欲求によつて害われる。それ故に欲求を離れた人々に供養して与えるならば、大いなる

詰浦叩 G214 (F215, A, O312, OS22) ‘ **G215** (F216, A, O314, OS22) [[@ GS 17 悪いこと]]

G214 やの行ないがだらしなく、慎みが乱れ、清らかな行ないなるものもあやしげであるならば、大きな果報はやつて来ない。

片語 もの行ないがだらしなく、身のいましめが乱れ、清らかな行ないなるものもあやしげであるならば、大きな果報はやつて来ない。

G215 悪いことをするよりは、何もしない方が良い。悪いことをすれば、後で悔いがない。

片語 悪いことをするよりは、何もしないほうがよい。悪いことをすれば、後で悔いがない。

やぶ。なしおわへじ、後で悔いがない。

をする方が良い。なし終わつて後で悔いがない。

（口メハム）

G214：「身のふまこぬ」を、「慎み」へ書き換えます。

G215：「ふまがなが多く、読みにくごのや、漢字に変換します。

詰浦叩 G216 (F217, A, O315, OS22) [[@ GS 17 悪いこと]]

G216 辺境にある、城壁に囲まれた都市が内も外も守られていないから、そのよつに口を守れ。瞬時も空しく過ぐすな。時を空

じく過した人々は悪いといろに墜ちて、苦しみ悩む。

元語 辺境にある、城壁に囲まれた都市が内も外も守られていないから、そのよつに口を守れ。瞬時も空しく過ぐすな。時を空じく過した人々は地獄に墜ちて、苦しみ悩む。

一次 辺境にある、城壁に囲まれた都市が内も外も守られていないから、そのよつに口を守れ。瞬時も空しく過ぐすな。時を空じく過した人々は悪といろに墜ちて、苦しみ悩む。

（口メハム）

地獄 → 悪いこと、口 → 口 にこねむ。

詰浦叩 G217 (F218, A, O316, OS22) ‘ **G218** (F219, A, O317, OS22) ‘ **G219** (F220, A, O318, OS22) ‘ **G220** (F221, A,

OS19, OS22) [[@ GS 17 悪いこと]]

G217 聴こねハムを聴こ、恥ずくかいのを恥じなゝ人々は、邪な見解をいたして、悪いことにおもむく。

G208 激流の中で、涅槃（悟りによる解脱）を求める賢い人は享楽に害（ソコナ）われる」とがない。愚かな人は享楽のために害（ソコナ）われるが、享楽を妄執するがゆえに、愚かな人は他人を害（ソコナ）う。元語 彼岸にわたる」とを求める人々は享楽に害われる事がない。愚人は享楽のために害られるが、享楽を妄執するがゆえに、愚者は他人を害うように自分も害う。

一次 流の中で、解脱（彼岸、ニルヴァーナ）を求める賢い人は享楽に害（ソコナ）われる」とがない。愚かな人は享楽のために害（ソコナ）われるが、享楽を執着するがゆえに、愚かな人は他人を害（ソコナ）う。

（口メハム）

人々→賢い人

妄執→執着→妄執

愚者、愚人→愚かな人

彼岸に関しては、意味を付け加え、涅槃（悟りによる解脱）として書き換えました。

そいつなってはならないのは正しく「己」で、これが心の拠り所です。

詰浦叩 G209 (F210, A, O218, OS16) [[@ GS 16 執着と欲望]]

G209 **口語** で説き得ないものの涅槃（悟りによる解脱）に達しようとする志を起し、意（オモイ）は満たされ、欲の激流に心の礙（サマタ）げられないのない人は、（流れを上る者）と呼ばれる。

片語 いふばで説き得ないもの（ニルヴァーナ）に達しようとする志を起し、意（オモイ）はみたされ、諸の愛欲に心の礙（サマタ）げられないのない人は、（流れを上る者）と呼ばれる。

一次 言葉で説き得ないもの（ニルヴァーナ）に達しようとする志を起し、意（オモイ）は満たされ、欲の激流に心の碍（サマタ）げられるいのない人は、（流れを上る者）と呼ばれる。

（口メハム）

OS16 節 愛するもの から移動。
「諸の愛欲に」を「欲の激流に」と書き換えました。

詰浦叩

G210 (F211, A, O354, OS24) [[@ GS 16 執着と欲望]]

G210' JR詩 教えを説いて与えねいんばすべての贈与にまわり、教えの妙味はすべての味にまわり、教えを受ける楽しみはすべての楽しみにまわる。愛執を滅ぼすことはすべての苦しみにうち勝つ。

一次 教えを説いて与えねいんばすべての贈与にまわり、教えの妙味はすべての味にまわり、教えを受ける楽しみはすべての楽しみにまわる。執着を滅ぼすことは全ての苦しみにうち勝つ。

(口メノム)

「元詩に戻しました。「妾執を滅ぼす」ためには、愛執がなくなり、愛欲もなくならないとこけないんじついんじゃ。

GS 17 節 惡ふといへ

「地獄」とこの言葉を使う」とを、「[神]示により禁じられていましたので、「地獄」は、「惡ふといへ」と書き換えます。したがって、この章のタイトルは、「地獄」から「惡ふといへ」になり、文中もこの原則に従います。

O311 詩 (→ GS19 節 G260 詩) , O313 詩 (→ GS19 節 G261 詩) は、本節から外しました。移動した詩は、移動先の GS19 節 修行僧で再考を行います。本節は、O306, 309, 310, 312, 314～319 詩、最後に OS9 節 惡から移動した G221 (O126) 詩を編入し、1

詩の構成となりました。

地獄というと、どうしても死後の世界だと認識してしまうがちですが、そうではなく、現世から良ふといへから惡ふといへにかけて分別するふるいは存在すると思うのです。

そう感じた理由は、私が仕事をしている時、職務上、不正や不適切なことを行っている人たちと自分は全く別世界の人間だなと思っていたからです。これは、同じ職場においても、存在する場所が違うと感じ取った時なのでしょう。

私が見ていた、不正に手を出している彼らはいつも苦しそうです。もつと言つてしまえば、窒息しているような感じです。しかし、本人たちは、精一杯やっている自分に自己陶酔していて、素晴らしいなんて感じているようにも見えます。

逆に、行きの正しい人たちや性質の良い人たちは、苦しい状況でもなぜか悲壮感が少ないなど感じるのです。このふるいによる分別が貧富の差や社会的ステータスと、相関があるかと言われたら、もちろん答えは「Yes」です。この世の中は極めて正確な行いによる分別があることに驚いています。ただ、例外といふものが必ずあって、例外（悪魔に魅入られた人たち）が目立ってしまう、この分別がうまく働いていないように感じてしまつとも多々あります。おおむね、若い頃は例外が多いと感じています。

靈界（あの世）では、靈格が別の人たちとの交流はほとんどないようですが、この3次元は、一緒にいながら違うと言ふつても、やはり靈界に比べたらはるかに交流がありますので、その分、各自にストレスがかかりますが、他の靈格の存在との交流こそが、実は三次元に生まれてきて行う修行の主目的なのだと思います。

詩番印 G211 (F212, A, O306, OS22) [[@ GS 17 惡ふといへ]]

G211 偽りを語る人、あるいは自分でしておきながら「私はしませんでした。」ふくらへ人、この両者は死後には等しくなる——来世では行ないの下劣な業を持った人々なのであるから。

JR詠 このわりを語る人、あるいは自分でしておきながら「わたしはしませんでした。」ふくらへ人、この両者は死後にはひとしくなる——来世では行ないの下劣な業をもつた人々なのであるから。

(口メノム)

わらがなが多く、読みにくいやで、漢字に変換します。

詩番印 G212 (F213, A, O309, OS22) , G213 (F214, A, O310, OS22) [[@ GS 17 惡ふといへ]]

G212 放逸で他人の妻になれ近づく者は、四つの事がらに遭遇する。——すなわち、禍をまねき、臥して樂しからず、第三に非難を受け、第四に悪ふといへに墜ちる。

元詠 放逸で他人の妻になれ近づく者は、四つの事がらに遭遇する。——すなわち、禍をまねき、臥して樂しからず、第三に非難に地獄に墜ちる。

G213 禍をまねき、悪ふといへに墜ち、相ともにおびえた男女の愉楽は少なく、王は重罰を課する。それ故に人は他人の妻になれ近づくな。

元詠 禍をまねき、悪ふといへ (地獄) に墜ち、相ともにおびえた男女の愉楽はすくなく、王は重罰を課する。それ故にひとは他人の妻になれ近づくな。

(口メノム)

G212: 地獄→惡ふといへ ふくらへす。

G213: (地獄) を削除。「やくなく」を「少なく」と漢字表記します。

一次 他を罵らず、害わざ、慎んで自己を守り、食事に關して（適當な）量を知り、適時禪定（念定）を行ない、心に關する」とに努め励む。——これがもろもろのみ仏の教えである。

一次 他を罵らず、害わざ、慎んでおのれを守り、食事に關して（適當な）量を知り、適時念定（禪定）を行ない、心に關する」とに努め励む。——これがもろもろのブッダの教えである。

（口メノム）

G222：「もうわらの」と云ふ複数表現から、み仏はお釈迦様だけではなく、たくさんいひつやうとを表しています。」いでは、仏道の趣し捉えます。

G223：法（眞理）を順守する」ことを最優先にするのが、仏道です。当然、法を遵守すれば、戒律は必要なくなりますので、戒律という語は用いません。

「淋じるといひむことひ臥し、坐し」は、必要な時もそうでない時もあるので、削除しました。

詰浦叩 G224 (F310, C, O360, OS25) , **G225** (F311, C, O361, OS25) [[@ GS 18 仏弟子]]

G224 田にひこて、耳にひこて、鼻にひこて、舌にひこて、身にひこて、意にひこて、言葉にひこて慎しむべ。

元詩 眼にひこて慎しむのは善い。耳にひこて慎しむは善い。鼻にひこて慎しむのは善い。舌にひこて慎しむのは善い。

一次 修行僧は、眼にひこて、耳にひこて、鼻にひこて、舌にひこて、身にひこて、言葉にひこて、心にひこて慎しもう。

G225 あらゆるいんについて慎しめば、すべての苦しみを超える。

元詩 身について慎むのは善い。」とばにひこて慎しむのは善い。心について慎しむのは善い。あらゆるいんについて慎しむのは善い」とある。修行僧はあらゆるいんがふにひこて慎しみ、すべての苦しみから脱れる。

一次 修行僧は、あらゆるいんについて慎しめば、すべての苦しみから脱れる。

（口メノム）

いの2つの詩は、六根と言われるものに帰着されるようです。六根とは、目、耳、鼻、舌、体、意（心）で、私たちが知覚する機關です。これを慎もう」との2詩は教えています。その結果、この世に存在する六境（形、音、匂い、味、触覚、意の知覚対象に執着する）とがなくなるというのが、パーリ經典による六六経教えだそうです。一般に「形」は「色」とも言われますが、当方は「色」は気の流れと捉えますので、本書では「形≠色」と考えます。詳細は付録7—(3) 参照。

また、付録1で述べたように、「心」には、顯在意識（意）と潜在意識がありますが、能動的に慎む（制御する）」ことができるのは顯在

元詩 恐れなくてよい」とを恥じ、恥ずべき」とを恥じない人々は、邪な見解をいたいで、悪いといひ（＝地獄）におもむく。

G218 恐れなくてよいに恐れをいたぎ、恐れねばならぬことに恐れをいたかない人々は、邪な見解をいたいで、悪いといひへにねもむく。

元詩 恐れなくてよい」とに恐れをいたぎ、恐れねばならぬ」とに恐れをいたかない人々は、邪な見解をいたいで、悪いといひ（＝地獄）におもむく。

G219 避けねばならぬ」とを避けなくてよいしと思ひ、避けてはならぬ（＝必ず為さねばならぬ）」を避けてもよしと考える人々は、邪な見解をいたいで、悪いといひ（＝地獄）におもむく。

元詩 避けねばならぬ」とを避けなくてよいと思ひ、避けてはならぬ（＝必ず為さねばならぬ）」を避けてもよしと考える人々は、邪な見解をいたいで、悪いといひ（＝地獄）におもむく。

G220 遠ざけるべき」と（＝罪）を遠ざけるべきであると知り、遠ざけてはならぬ（＝必ず為さねばならぬ）」を遠ざけてはならぬ」と考える人々は、正しい見解をいたいで、善いといひにおもむく。

元詩 遠ざけるべき」と（＝罪）を遠ざけるべきであると知り、遠ざけてはならぬ（＝必ず為さねばならぬ）」を遠ざけてはならぬ」と考える人々は、正しい見解をいたいで、善いといひ（＝天上）におもむく。

（口メノム）

G217～G219：地獄を削除

G220：天上を削除

詰浦叩 G221 (F222, C, O126, OS9) [[@ GS 17 聰ふといひ]]

G221 汚れの無い人々は全き安らぎに入り輪廻を離れ、それ以外の人々は輪廻に入りまり、行いにより死後に赴く所が決まる。

片詰 或る人々は「人の胎に宿り、惡をなした者どもは地獄に墜ち、行ないの良い人々は天におもむく、汚れの無い人々は全き安らぎに入る。（口メノム）

お釈迦様も、地獄という言葉をお使いになつたとは、考えにくくと私は思つてゐます。一一三神示が示すように、それぞれの魂の格によつて、同種・同レベルが集まる場所が死後の世界であるならば、居心地が良いはずで、その魂は地獄とは感じないとなると、地獄といつて定義する成り立たなくなつてしまふのです。なんだか天オバカボンのパパのようですが、正しきとは感じおす（証明なんてできませんが）。

」の書き換え作業では、地獄という言葉を定義しない、あの世はどの魂にとつても天国という立場です。

第3章 サモヤチナ人

この節は、まず「付録4 人間の分類」を参照して読んでください。

GS 1~8 節 仏弟子においては、御仏を奉じる者たちへの教えがまとめてあります。

GS 1~9 節 修行僧では、出家者という立場を有する人たちの守るべきルールや生活の送り方なども書かれています。詩の内容は、出家者への批判もあり、厳しい内容もあります。これらを守れるのであれば、出家をした方がブッダへの到達は早いでしょうが、在家である経験も多種多様ですから若い人々は生活を営むためにも在宅で努力することをお釈迦様は推奨なさったと思われます。また、在宅であっても、真人・ブッダへ進む最終段階では、同じ状況に身を置くことが余儀無くされると感じています。この章の詩は、主に出家の修行僧への詩ですが、決して在宅の人の参考にならないといふではありません。ただし、真理の探究を直接目指すことが目的の修行僧の節は結果的に難解な詩が多くなりました。

GS 2~0 節 愚かな人々 GS 2~3 節 賢い人では、仏道の観点から、靈格・精神性による分類「真人—賢い人—愚かな人」の各カテゴリーの性質や目標が説明されています。もちろん分類の対象者は、在宅か出家かのいかんを問わず生きとし生けるもの全体で、動物も入るでしょう。

さて、お釈迦様は、人類の構成者の圧倒的多数である在宅に對して正しく世の中に身を處す教えを最優先されたであることをあらうと感じます。

つまり、お釈迦様は在宅か出家か？ 信仰の種類を問う？ ことに疑問を抱き、これらのかんを問わない教えを説かれ、圧倒的多数の者たちから支持を得たのでしよう。そのため、本書では、今回からヒンズー教の聖職者名「バラモン」という言葉を用いず、必要に応じて GS 1~9 修行僧にその存在を繰り込むことにしました。したがって、本書では、特定の宗教を信望している出家者ではなく、どの教えであっても出家修行している方々を「修行僧」として表現しています。

第3節 さまやチナ人の章編成は下記の通りとなります。

(旧編成)

(新編成)

FS 1~8 愚かな人	GS 1~8 仏弟子 (17詩)
FS 1~9 賢い人	GS 1~9 修行僧 (32詩)
FS 2~0 真人	GS 2~0 道を実践する人 (9詩)
FS 2~1 道を実践する人	GS 2~1 愚かな人 (16詩)
FS 2~2 仏弟子	GS 2~2 賢い人 (14詩)
FS 2~3 修行僧	GS 2~3 真人 (20詩)
FS 2~4 バラモン	GS 2~4 ブッダ (20詩)
FS 2~5 ブッダ	— バラモンは無くし振り分ける。

また、前回は S バラモンの章にあった詩は、下記の通り割り振りました。

GS 1~8 仏弟子	F343.
GS 1~9 修行僧	F328, F330~F337, F342.
GS 2~3 真人	F309 (修行僧→バラモン) , F327, F329, F338~F341, F344~F346

GS 18 節 仏弟子

詠神吟 G222 (F291, A, O183, OS14) , G223 (F292, B, O185, OS14) [[@ GS 18 仏弟子]]

G222 すべて懸(けん)き(けん)をなやめ、善(ぜん)いことを行(おこな)ふ、心を淨(きよ)め(い)ふ。——これが諸のみ仏の教えである。

元詩 一次 すべて悪(あく)きいことをなやめ、善いことを行ない、自己の心を淨めるいふ。——これが諸の仏の教えである。

G223 他を罵(のの)め、害(がい)せず、自分は戒律を守り、食事に関する(適当な)量を知り、適時禪定(念定)を行ない、心に闇(くろ)みに努め励む。——これがもろもろのみ仏の教えである。

元詩 罷(めら)ざ、害(がい)せず、自分は戒律を守り、食事に関する(適当な)量を知り、淋(れい)しいにひたり臥(ふ)し、坐(す)し、心に闇(くろ)みにひづめはげむ。——これがもろもろのブッダの教えである。

G233 みずから恥じて意を制し、良い馬が鞭に邪魔されないよう、世の非難に邪魔されない人が、この世に誰か居るだろうか？

鞭をあてられた良い馬のように勢いよく努め励めよ。信仰により、戒しめにより、はげみにより、精神統一により、真理を確かに知るといふにより、智慧と行ないを完成させよ。

尺詰 O143：みずから恥じて自己を制し、良い馬が鞭を気にかけないように、世の非難を気にかけない人が、この世に誰か居るだろうか？

O144：鞭をあてられた良い馬のように勢いよく努め励めよ。信仰により、戒しめにより、はげみにより、精神統一により、真理を確かに知るといふにより、智慧と行ないを完成した人々は、思念をいらし、この少なからぬ苦しみを除けよ。

一次 みずから恥じて自己を制し、良い馬が鞭を気にかけないよう、世の非難を気にかけない人が、この世に誰か居るだろうか？

賢い人よ、鞭をあてられた良い馬のように勢いよく努め励めよ。正しい信仰、慎み（戒しめ）、努め、禪定により思念をいらし、真理を確かに知り、この少なからぬ苦しみを除けよ。そして、智慧と行ないを完成させよ。

(口メヘム)

「自己を制し」は「守護神を制し」となるので、「意を制し」としました。

「世の避難」は、重要な情報であるといふも往々にしてあるので、「気にかけず」から「邪魔されない」に変更しました。

詔勅 G234 (F302, A, O075, OS6) [[@ GS 18 仏弟子]]

我の利得ばかりを求めるべく、心が退化する道を進む。この道は、あたり一面張り巡らされ選択しやすい。しかし、繁栄と心

の成長をもたらす涅槃への道もある。仏弟子はこのことわりを知つて、虚栄を求めず、涅槃への道を努め励み進む。

元詰 一つは利得に達する道であり、他の一つは安心きにいたる道である。ブッダの弟子である修行僧はこのことわざを知つて、荣誉を喜ぶな。孤独の境地に励め。

一次 利得に達する道もあり、安心きに達する道もある。ブッダの弟子はこのことわりを知つて、荣誉を求めず、努め励め。

(口メヘム)

利得だけを求める虚栄心が、自分の精神性の退化へと通じる道を選択し、この道が正しく自分の心を成長させる道よりも圧倒的に多い

意識（意）ですでの、「心」ではなく「意」を使います。ただし、この2詩では、身、言葉が抜けてるのでも、これらを補います。
六根という言葉を使わずに、原文のように具体的な記述を残します。

詔勅 G226 (F207, C, O188, OS14), **G227** (F298, C, O189, OS14), **G228** (F299, C, O190+O191, OS14), **G229** (F300, C, O192, OS14) [[@ GS 28 仏弟子]]

G226 人々は恐怖にかられて、山々、林、園、樹木、靈樹など多くのものにたよへん。

尺詰 書かねえなし

G227 こがしこれは安らかなよりいひではない。これは最上のよりいひではない。それらのよりいひによつてはあらゆる苦悩から免（まのが）れるいとはできない。

尺詰 書かねえなし

G228 法（真理）とみ仏と真人（聖者）の集いを愛し敬い、四つの尊い真理を見る事によつて、あらゆる苦悩から免（まのが）れるいとはできぬ。

尺詰 さとれる者（=仏）と真理のことわり（=法）と聖者の集い（=僧）とに帰依する人は、正しい智慧をもつて、四つの尊い真理を見る。――

すなわち（1）苦しみと、（2）苦しみの成り立ちと、（3）苦しみの超克（チヨウコク）と、（4）苦しみの終滅（オワリ）におもむく八つの尊い道（八聖道）とを（見る）。

一次 四つの尊い真理の四諦が、安らかなよりいひであり、最上のよりいひであり、あらゆる苦悩から免れるよりいひである。

G229 この四つの尊い真理とは、（1）苦しみと（2）苦しみの成り立ちと（3）苦しみの超克（チヨウコク）と（4）苦しみの終滅（オワリ）におもむく八つの尊い道（八聖道）である。

元詰 これは安らかなよりいひである。これは最上のよりいひである。このよりいひにたよつてあらゆる苦悩から免れる。

(口メヘム)

この4詩で一つと考えます。

み仏ですら法（真理）に従つてゐる存在であつて、「法（真理）」がまことにありきなので、トップバッターは「法（真理）」としました。したがつて、「仏法僧への帰依」は順番が間違つています。

また、僧に関しては付録4に順守し出家の立場を有する人たちであるといふだけなので、「聖者の集い」を「み仏と真人の集い」としました。

した。「聖者の集い」は精神性に軸がありますので、出家か在家かは問題になりません。仏弟子は、お釈迦様の説かれた四諦の真実と八正道の道を歩んで、個人の靈性の向上に努めなくてはならないといへ、シンプルな宣唱を行なう詩になりました。

詔勅 G230 (F306, C, O392, OS26) [[@ GS 18 仏弟子]]

G230 正しく覚つた人(=み仏)の説かれた教えを、はつきりと学び得たなら、教示した人が、いかなる人であろうとも、その人を恭しく敬礼せよ。あた、その師に頼るゝ)となく、常に自分で考え判断する自立した心を養え。

元誇 正しく覚つた人(=アッダ)の説かれた教えを、はつきりといかなる人から学び得たのであろうとも、その人を恭しく敬礼せよ、—バラモンが祭の火を恭しく尊ぶよべに

一次 正しく覚つた人(=アッダ)の説かれた教えを、はつきりと学び得たなら、教示した人が、いかなる人であろうとも、その人を恭しく敬礼せよ、その師に頼るゝ)となく、常に自分で考え判断する自立した心を養え。

(口メノム)

バラモンの章から移動しました。

人にも、世の中同様に諸行無常が適応される可能性を理解し、師匠ですら時間が経てば、人格すらも変わるかもしないのです。よつて、常に自分で考え方判断し行動することが人間としての義務でもあり責任であるということです。しかし、真理を教授してくださった師匠への敬愛の念を保つことの重要性を示しています。

詔勅 G231 (F296, A, O194, OS14) [[@ GS 18 仏弟子]]

G231 ものものみ仏の現わねだあひのは樂ひ。

正しい教えを説くのは樂しへ。

つどいが和合しているのは楽しい。

和合している人々がいそしむのは樂しへ。

口語 書き換えなし

詔勅 G232 (F301, C, O296~301, OS21) [[@ GS 18 仏弟子]]

G232 必要に応じ「法(真理)、み仏、心身」について禪定(念定)をすれば空を体現し、常に氣をつけてこれを繰り返せば、覺醒し涅槃(悟りによる解脱)の境地に入る。

元誥

O296 「一タマの弟子は、いつもよく覚醒していく、昼も夜も常に仏を念じてゐる。

O297 「一タマの弟子は、いつもよく覚醒していく、昼も夜も常に法を念じてゐる。

O298 「一タマの弟子は、いつもよく覚醒していく、昼も夜も常にサンガ(修行者のつどい)を念じてゐる。

O299 「一タマの弟子は、いつもよく覚醒していく、昼も夜も常に身体(の真相)を念じてゐる。

O300 「一タマの弟子は、いつもよく覚醒していく、その心は昼も夜も不傷害を楽しんでゐる。

O301 「一タマの弟子は、いつもよく覚醒していく、その心は昼も夜も瞑想を楽しんでゐる。

一次 「一タマの弟子が、昼も夜も起きている間は、常に「仏、法、心、体、善」について念い続ければ、覚醒し、その後も常に覚醒が持続す

る。そこで、彼のは、念定(禪定)を楽しむであらう。

(口メノム) 中村氏の訳出が「AだからBじゃ。」としたら、パーリ語では、「BだからAじゃ。」なのです。いれは、中村氏の訳出「スヤシヨハ。各誇の、パーリ語の直訳を[.]に記します。

O296 彼のじゆうじ昼も夜も常にアッダを念じてゐるなら常に「一タマの弟子はよく目覚めて、目覚める

(http://76263383.at.webyr.info/201212/article_26.html やんふ)

O297 彼のじゆうじ夜も夜も常に法に向こうと念つてゐるなら常に「一タマの弟子はよく目覚めて、目覚める」 (http://76263383.at.webyr.info/201212/article_1.html やんふ)

O298 彼のじゆうじ夜も夜も常に僧に向こうと念つてゐる常に「一タマの弟子はよく目覚めて、目覚める」 (http://76263383.at.webyr.info/201212/article_2.html やんふ)

O299 彼のじゆうじ昼も夜も常に身体(の真相)を念じてゐる常に「一タマの弟子はよく目覚めて、目覚める」 (http://76263383.at.webyr.info/201212/article_3.html やんふ)

O300 彼のじゆうじ昼も夜も常に不傷害を楽しんでゐる常に「一タマの弟子はよく目覚めて、目覚める」 (http://76263383.at.webyr.info/201212/article_4.html やんふ)

O301 彼のじゆうじ昼も夜も常に瞑想の心を楽しむのが常に「一タマの弟子はよく目覚めて、目覚める」 (http://76263383.at.webyr.info/201212/article_5.html やんふ)

「起きている間はずつと念定する」を「必要に応じて適切に禅定する」と捉え直しました。

「覚醒=涅槃(悟りによる解脱)に入る=常に空を認識(体現)する」という関係だと考えます。仏弟子が禅定し(念じ)なくではない対象を「法、み仏、(自分の)心身」と考えました。

(口メノヘ)

・元詩は、明らかな智慧を持っていなければ修行僧ではないという詩になっています。しかし、この世において明らかな智慧を有するのが、修行僧の最終目的の一つだと思います。したがって、「明らかな智慧のある」を「明らかな智慧を求める」とします。
・「戒」は「法」と「慎」と「教（え）」と「捷」などに置き換えると思いますが、「戒」は武器を持つて罰することを前提としたルール／【捷】は手の運び方を定めるルール／【慎】は心をうわつかせない」と／【法】は、この世の中に絶対不变に存在するもので、何人も侵すことができないもの
といふことで、他者に威圧的な意味を含む「戒」や対象領域が狭い「捷」を使うよりは、「戒」の字が出てきた時に「法」や「慎」や「教」の字に換えるよう検討しています。
・「満足し」は具体性がないので、「分限と足るを知り」と書き換えます。
・項目の並び順と日本語を整えます。

詠番叩 G241 (F314, C, O390, OS26) [[@ GS 19 修行僧]]

G241 愛好するものへの執着から意(オモイ)を遠ざけぬいとは、修行僧にとって少なからずすぐれたことである。この執着する意は心を害する執着となるからである。

い)の 妥執がやむにつれて、苦惱が静まる。

元詩 愛好するものから心を遠ざけるならば、いのいとはバラモンにとって少なからずすぐれたいとある。害する意(オモイ)がやむにつれて、苦惱が静まる。

一次 愛好するものから心を遠ざけぬいとは、修行僧にとって必要ないことである。

(口メノヘ)

バラモンの章から移動。

中村氏も、注釈で解釈に苦しんでいます。愛好するものは、家族ではないかと論じていますが、はつきりしません。言葉通り、趣味から家族まで、すべての愛するものくらいに考えるしかありません。

一次詩では後半を削除しましたが、本書では「害する意」には、対象として「心」を補足しました。いの「心」は付録1の心定義2に準書し、潜在部分の心と顯在部分の脳です。これにより、前半と後半の整合が取れました。つまり、やみくもに執着する意(妥執)が心を触み、これから離れたない苦惱が減るという詩になります。

詠番叩 G242 (F304, C, O142, OS10) [[@ GS 19 修行僧]]

いを表現しました。

詠番叩 G235 (F323, A, O364, OS25) [[@ GS 18 仏弟子]]

G235 真理を喜び、真理を楽しみ、真理をよく知り分けて、真理にしたがつている者たちは、正しいことわりから墜落することがない。

元詩 真理を喜び、真理を楽しみ、真理をよく知り分けて、真理にしたがつている修行僧は、正しいことわりから墜落することがない。

前回は元詩をそのまま使いましたが、今回は修行僧の節から仏弟子の節に移したので、詩中の「修行僧」を「者たち」と変更しました。

詠番叩 G236 (F204, A, O368+O381, OS25) [[@ GS 18 仏弟子]]

G236 仏の教えを喜び、慈しみに住し、怠らずに努め励めば、悪因の形成が止み、涅槃（悟りによる解脱）に到達する。

元詩 O368：仏の教えを喜び、慈しみに住する修行僧は、働く形成作用の静まつた、安樂な、静けさの境地に到達するであろう。

O381：喜びにみちて仏の教えを喜ぶ修行僧は、働く形成作用の静まつた、幸いな、やすらぎの境地に達するであろう。

一次 仏の教えを喜び、慈しみに住し、怠らずに励めば、悪因の形成が止み、安樂な、静けさの境地（ニルヴァーナ）に到達する。

(口メノヘ)

「働く形成作用の静まつた」を「悪因の形成が止み」と書き換えました。

ニルヴァーナ＝涅槃なので、変更しました。

O368 も同じ教えの詩なので、一つにまとめました。

詠番叩 G237 (F343, B, O384, OS26) [[@ GS 18 仏弟子]]

G237 禅定（止）と智慧を得る（観）が完成したならば、その人はよく知る人であるので、その人の束縛はすべて消え失せることである。

元詩 バラモンが二つのことがら（=止と観）について彼岸に達した（=完全になつた）ならば、かれはよく知る人であるので、かれの束縛はすべて消え失せるであら。

一次 バラモンが、瞑想と智慧を得ないとついて彼岸に達した（＝瞑想を完成する）ならば、その人はよく知る人があるので、そこの人の束縛はすべて消え失せるであろう。

（口メンソール）

延暦寺では、「止」とは禅定、「観」とは智慧と、教えられています。

悟りのよすが・八正道・五根で当てはめると、「止が定と念、観が慧」ということになります。

禅定により智慧を得れば、その人が知らなくてはならないこの世の中のことは何でも分かるようになると思います。

詩番印 G238 (F295, C, O187, OS14) || @ GS 18 仏弟子 ||

G238 天上の快樂はめでたいものだが、妄執の消滅はさらにめでたい。

元詩 天上の快樂にやえもゝる樂しまない。正しく覺った人（＝仏）の弟子は妄執の消滅を樂しむ。

一次 天上の快樂は楽しいものだが、仏弟子にとって、妄執の消滅はさらに楽しい。

（口メンソール）

天上とは、天国だと思っています。かなり、靈格の高い存在が集うあの世で、そこに存在するものすべてが一級品だと言われています。

しかし、三界からは出られない場所での、樂しみ（天人の音楽etc.）が天上の快樂なのでしょう。これらを楽しめる心境は正常だと言えますので、これを否定しないように、詩文を比較の表現に変えました。

「妄執」＝「道理を踏み外した執着」

GS 19 節 修行僧

修行僧は、社会的立場の出家ー在家庭類における、出家側の方々です。古くは「比丘（ビク）」と書かれていたようです。前回の再考「真理のことば」ver. 1では、出家側で、地位が高いものをバラモンとしていましたが、ヒンズー（バラモン）教における役職名ですので、本書では使用しません。「バラモン」に対応する言葉として、必要に応じて「眞の修行僧」（真人になつた修行僧）を当てはめました。在家であつても、真人やこれに近くなれば出家と変わらない生活様式に自然と移行していくと感じていますので、修行僧以外の方々にも有益であると思います。

本節は32詩から成ります。

詩番印 G239 (F342, B, O388, OS26) || @ GS 19 修行僧 ||

G239 禅定と慎みが完成し、惡を鎮めたので、眞の修行僧と呼ばれ、正しい教えのもとで出家し努め励むので、修行僧と呼ばれる。

元詩 惡を取り除いたので【バラモン】（婆羅門）と呼ばれ、行ないが静かにやまつていふので【遁の人】（沙門）と呼ばれる。おのれの汚れを除いたので、そのゆえに【出家者】と呼ばれる。

一次 惡を静め、瞑想と慎みが完成したのでバラモンと呼ばれ、正しい教えのもとで出家し努め励むので、修行僧と呼ばれる。

（口メンソール）

眞の修行僧と修行僧の定義を表した詩として、付録4に合うように、全面的に書き換えました。

詩番印 G240 (F305, C, O375, OS25) || @ GS 19 修行僧 ||

G240 この世において明らかな知慧を求める修行僧のはじめのつとめは、

感官に氣をくばる

分限と足るを知る

慎みを守る

淨らかに生きる善い友と付き合ひ

」）である。

元詩 これは、この世において明らかな知慧のある修行僧の初めのつとめである。—感官に氣をくばり、満足し、戒律をつつしみ行ない、怠ら

ないで、淨らかに生きる善い友とつき合え。

一次 この世において明らかな知慧を求める修行僧の初めのつとめは、

怠らないで、

感官に氣をくばり、

分限と足るを知り、

戒め（慎み）を守り、

淨らかに生きる善い友とつき合へ、

ことである。

極的に行なつた者は「一部ではないか」と思つています。しかし、お釈迦様がバラモンという血筋による優遇制度とそれにあぐらをかくバラモンを強く非難して「ふい」とを表現するように詩文を全面的に書き換えました。

詰浦叩 G252 (F284, B, O264, OS19) [[@ GS 19 修行僧]]

G252 頭を剃つたからとて、教えをおもひや、偽りを語る人は、出家した修行僧ではない。欲望と貪りにみちている人が、どうして出家者であろうか？

元詰 頭を剃つたからとて、まほしめをまわらば、偽りを語る人は、【道の人】ではない。欲望と貪りにみちている人が、どうして【道の人】であろうか？

一次 頭を剃つたからとて、戒めをまもひや、偽りを語る人は、出家者ではない。欲望と貪りにみちている人が、どうして出家者であろうか？

詰浦叩 G253 (F303, A, O141, OS10) [[@ GS 19 修行僧]]

G253 裸の行も、髪に結うのも、身が泥にまみれるのも、断食も、露地に臥すのも、塵や泥を身に塗るのも、蹲つて動かないのや、一真理とみ仏への疑いを離れていない人を淨めるとはできません。

元詰 一次 裸の行も、髪に結うのも、身が泥にまみれるのも、断食も、露地に臥すのも、塵や泥を身に塗るのも、蹲つて動かないのも、一疑いを離れていない人を淨めるとはできない。

(口メヘント)

疑いの対象を「真理とみ仏」として、詩文に書き込みました。

この詩が、暴力の章にあるのは不自然です。

ジャイナ教の修行者が行つていた苦行に関する記述だそうです。お釈迦様は、従来の信仰（ヒンズー教やジャイナ教）の行つていた苦行は全面的に否定なさいました。

詰浦叩 G254 (F312, B, O363, OS25) [[@ GS 19 修行僧]]

G254 修行僧が、意が浮わつくとなく、畠葉をへつしみ、思慮して語り、事実と真理とを明らかにするなれば、その人の説くよりはやさしく甘美になる。

元詰 □をつつしみ、思慮して語り、心が浮わつくとなく、事がらゝ真理とを明らかにする修行僧——かれの説くよりはやさしく甘美である。

G242 修行僧は、身の装いはどうあらうとも、心身を整え慎しみ深い行いを実行し、生きとし生けるものに対して（不当な）暴力を用いず、心が正しくおさまらないくなくてはならない。

元詰 身の装いはどうあらうとも、行ない静かに、心ねさまり、身をとのえて、慎みぶかく、行ない正しく、生きとし生けるものに対して暴力を用いない人こそ、【バラモン】とも、【道の人】とも、また【托鉢遍歴僧】ともいふべきである。

一次 修行僧は、身の装いはどうあらうとも、自己（魂）を整えて心を治めて、正しく、慎しみ深い行いを実行し、生きとし生けるものに対して（不当な）暴力を用いてはならない。

(口メヘント)

「」の詩が、暴力の章にあるのは、どう考へても不自然でした。

「【バラモン】とも、【道の人】とも、あた【托鉢遍歴僧】ともいふべきである」を【修行僧】に集約し、詩を全面的に書き換えました。

「行ない静か」と「慎みぶかく」はオーバーラップしますので、「慎みぶかく」の方を残し、「行ない静か」は消します。心について努力することが第一ではあるのですが、それと同時に心と不可分な身体についても気を配るとは大切なことで、「心を整え」ではなく、あえて「心身を整え」としました。

詰浦叩 G243 (F285, A, O266, OS19) , G244 (F286, A, O267, OS19) [[@ GS 19 修行僧]]

G243 他人に食を乞ふからといふと、それだけでは托鉢僧なのではなく。汚らわしい行ないをしてくるならば、それは托鉢僧ではない。

元詰 他人に食を乞ふからといふと、それだけでは【托鉢僧】なのではない。汚らわしい行ないをしてくるならば、それでは【托鉢僧】ではない。

G244 「」の世の福樂も罪惡も見極め、執着を離れ統べ、清らかな行ないを修め、よく思慮して世に処していくならば、その人こそ托鉢僧である。

元詰 「」の世の福樂も罪惡も捨て去つて、清らかな行ないを修め、よく思慮して世に処しているならば、かれこそ【托鉢僧】と呼ばれる。

一次 「」の世の福樂も罪惡も見極め、執着せず、清らかな行ないを修め、よく思慮して世に処しているならば、その人こそ托鉢僧である。

(口メヘント)

常に托鉢を受けるに値するか否かを修行僧が自問自答しましまうところ 托鉢をする修行僧への教えです。「執着せず」→「執着を離れ統べ」としました。

G245 血分の得たものを軽んじてはならない。他人の得たものを羨むな。他人を羨む修行僧は心の安定を得ぬいができない。

元詩 (托鉢によつて) 自分の得たものを軽んじてはならない。他人の得たものを羨むな。他人を羨む修行僧は心の安定を得る)ことができない。

G246 修行僧は、怠るゝとなへ清く生き、自分の得たものをが少なくとも、それを軽んじない。

元詩 たとい得たものは少なくとも、修行僧が自分の得たものを軽んずる)ことが無いならば、怠るゝとなく清く生きるその人を、神々も称讃する。

(口メノム)

「」(口メノム) ひつじ地鉢によつて得たものと限定しつゝもへいとは、わつたいないです。」の詩で人が得るものとは、学びによる知識、禅定による氣づきまでです。

また、両詩とも、修行僧への教えとして位置付けました。

G247 出姓と生れによつてバラモンになら。

氏姓と生れによつて修行僧となるのではない。真理と理法とをあまり涅槃(悟りによる解脱)に入りし修行僧が、眞の修行僧でありバラモンとは言わない。

元詩 蠟髪を結んでいるからバラモンなのではない。氏姓によつてバラモンなのである。をまもる人は、安樂である。かれこそ(眞の)バラモンなのである。

一次 身なりによつてバラモンなのではない。氏姓によつてバラモンなのでもない。生れによつてバラモンなのでもない。真理と理法とをまわる人は、安樂である。その人こそ(眞の)バラモンなのである。

G248 製袋を頭から纏つていても、性質(タチ)が悪く、つつしみのないバラモンが多い。かれら悪人は、悪いふるまいによつて、悪いといふるまいによつて、悪いといふるまいに(地獄)に生まれる。

元詩 製袋を頭から纏つていても、性質(タチ)が悪く、つつしみのない者が多い。かれら悪人は、悪いふるまいによつて、悪いといふるまいによつて、悪いといふるまいに生まれる。

一次 製袋を頭から纏つていても、性質(タチ)が悪く、つつしみのない者が多い。かれら悪人は、悪いふるまいによつて、悪いといふるまいによつて、悪いといふるまいに生まれる。

」(口メノム)

G249 愚かなバラモンよ。身なりだけ整えて、何になるのだ。汝は内に密林(=汚れ)を藏して、外側だけを飾る。

元詩 愚者よ。螺髪を結うて何になるのだ。かもしかの皮をまんつて何になるのだ。汝は内に密林(=汚れ)を藏して、外側だけを飾る。

一次 愚者よ。バラモンの身なりだけ整えて、何になるのだ。汝は内に密林(=汚れ)を藏して、外側だけを飾る。

G250 あたバラモンは粗末な身なりで瘦せて血管があらわれていようとも寂しい場所で一人で瞑想に專念するとも言われてしゆ。

元詩 糞掃衣をまとい、瘦せて、血管があらわれ、ひとり林の中にあつて瞑想する人、一かれをわれはバラモンと呼ぶ。

一次 粗末な身なりで、瘦せて、血管があらわれていようとも、寂しい場所で一人で瞑想に專念する人、一その人を我はバラモンと呼ぶ。

G251 しかし、(バラモン女の)胎から生れ(バラモンの)母から生れた人をバラモンと呼ぶのである。」の人が「[君よ]といつて呼びかける者」でも、「妄執にどらわれてゐる者」でもバラモンである。

執着を離れ制す修行僧、一その人を吾は眞の修行僧と呼び、バラモンとは呼ばない。

元詩 われは、(バラモン女の)胎から生れた人をバラモンと呼ぶのではない。かれは「[きみよ]といつて呼びかける者」といわれる。かれは何か所有物の思いにどらわれている。無一物であつて執著のない人、——かれをわれは「[バラモン]」と呼ぶ。

一次 われは、(バラモン女の)胎から生れ(バラモンの)母から生れた人をバラモンと呼ぶのではない。」の人は「[君よ]といつて呼びかける者」といわれる。かれは何か所有物の思いにどらわれている。無一物であつても執着のない人、一その人を我はバラモンと呼ぶ。

(口メノム)

バラモンは、厳然と親の身分が反映されるのは周知の事実ですか、ヒンズー(バラモン)教における身分と役職です。「氏姓と生れによつてバラモンとなる。」という事実を受け入れて、詩を書き換えました。

G247 OS22 地獄 から移動。

元詩 「あみよと言つて呼びかけるもの」とは、本来なら尊敬しなくてはならない人に「君よ」と呼びかけてしまう愚かな人がする行為を表しています。すなわち、この世(三次元)における身分の上下しか理解できず、靈格の区別が分からず、威張ったバラモンが多くたたつでしょう。ただし、彼ら自身は、善良を心掛けていた者も多かつたでしょう。この根本的な間違えに気づかず、主体的な嫌がらせを積

難い詩ですから、「瞑想」を「禅定」と替へて、あとはそのままにします。

G258～G261：OS22 地獄から移動。

G261：ひらがなを漢字に書き換えました。

詠番町 G263 (F332, A, O389, OS26) [[@ GS 19 修行僧]]

G263 修行僧を打つな。修行僧は打つ人に対して怒りを放つな。修行僧を打つものには禍がある。しかしただ怒るだけの修行僧にはさうに禍がある。

元詩 バラモンを打つな。バラモンはかれ（＝打つ人）にたいして怒りを放つな。バラモンを打つものには禍がある。しかし（打たれて）怒る者にはさうに禍がある。

一次 バラモンを打つな。バラモンは打つ人に対して怒りだけを放つな。バラモンを打つものには禍がある。しかしただ怒るだけのバラモンにねらに禍がある。

(口メノム)

落ち着いている心（もしくは理性）でも込み上げてくる怒りに関しては、上手に伝えることが必要ですが、修行僧たるもの安易に「売り言葉に買い言葉」的な慎みのない行為は禁じられています。修行僧といふ言葉を使っていますが、リーダーになる人たち全てへの教えとも言えます。

詩番町 G264 (F321, B, O373+374, OS25) [[@ GS 19 修行僧]]

G264 修行僧が念と定の修行のために、人のいない場所で心を静め真理を正しく観ずるならば、人間を超えた楽しみがおこる。この修行により、個人存在を構成している諸要素の生起と消滅とを、徐々に正しく理解する。それにつれ、個人存在の不死の」とわりを知り、それによる喜びを、彼は体得する。

元詩 O373：修行僧が人のいない空家に入つて心を静め真理を正しく観ずるならば、人間を超えた楽しみがおこる。O374：個人存在を構成している諸要素の生起と消滅とを正しく理解するに従つて、その不死のことわりを知り得た人々にとって喜びと悦楽なるものを、かれは体得する。

一次 修行僧が念と定の修行のために、人のいない空家に入つて心を静め真理を正しく観ずるならば、人間を超えた楽しみがおこる。この修行により、個人存在を構成している諸要素の生起と消滅とを、徐々に正しく理解する。それにつれ、個人存在の不死の」とわりを知り、それによる喜びを、彼は体得する。

一次 修行僧が、心が浮わつくるとなく、言葉をつつしみ、思慮して語り、事実と真理とを明らかにするならば、その人の説くといふはやわらか甘美になる。

(口メノム)

詩中の言葉を使って文章を整理しました。

詩番町 G255 (F313, B, O379, OS25) [[@ GS 19 修行僧]]

G255 心を励まし、行いを反省せよ。修行僧よ。心を整え、正しい念いをたもてば、汝は安樂に住するであろう。

元詩 みずから自分を励ませ。みずから自分を反省せよ。修行僧よ。自己を護り、正しい念いをたもてば、汝は安樂に住するであろう。

一次 みずから自分を励ませ。みずから自分を反省せよ。修行僧よ。心を整え、正しい念いをたもてば、汝は安樂に住するであろう。

(口メノム)

「みずから自分」を「心」、「行い」と書き換えました。これに続く、「正しい念い」を保つために必要と思われる最小限の変更を行いました。既に述べていますが、当方は、心を整えるように慎みある行いと反省をした場合、正守護神様や本守護神様（自己）が心を治め守つて正しい今的心（念）が保たれるという立場です。

詩番町 G256 (F315, B, O369+377, OS25) [[@ GS 19 修行僧]]

G256 修行僧よ。」の舟から水を汲み出せ。汝が水を汲み出したならば、舟は軽やかにやすやすと進むであろう。貪りと憎悪を断ち、ジャスマンの花が花びらを捨て落とすように、貪りと憎悪を捨て去れば、汝は安らぎにおもむくであろう。

元詩 O369：修行僧よ。この舟から水を汲み出せ。汝が水を汲み出したならば、舟は軽やかにやすやすと進むであろう。貪りと怒りとを断つたならば、汝はニルヴァーナにおもむくであろう。O377：修行僧らよ。ジャスマンの花が花びらを捨て落とすように、貪りと怒りとを捨て去れよ

一次 修行僧よ。」の舟から水を汲み出せ。汝が水を汲み出したならば、舟は軽やかにやすやすと進むであろう。貪りと怒りを断ち、ジャスマンの花が花びらを捨て落とすように、貪りと怒りを捨て去れば、汝は安らぎにおもむくであろう。

(口メノム)

O369：中村氏の注釈によると、

舟：個人存在

水：誤った思考

（す「異論ありません。」）

「貪りと怒り」といつても、怒りの中には取めてはいけない怒りもあるので、最終的に「憎悪」としました。

詰番印 G257(F316, B, O370, OS25) [[@ GS 19 修行僧]]

G257 五下分結の五上分結の順に理解して、「これらの執着を離れ統べよ。

やむに、信、精進、念、定、慧による五つ（のはたらき）を修めよ。

やべすれば、修行僧は、五つの汚れ（貪り、憎悪、迷惑、高慢、疑惑）を超え、激流を渡つた者とよばれる。

元詩 五つの束縛を断て。五つの束縛を捨てよ。やうに五つ（のはたらき）を修めよ。五つの執著を超えた修行僧は、「激流を渡つた者」とよばれる。

一次 まず、五下分結を断ち、次に、五上分結を捨てよ。

やらに、信、精進、念、定、慧による五つ（のはたらき）を修めよ。

そうすれば、修行僧は、五つの汚れ（貪り、怒り、迷惑、高慢、疑惑）を超えて、激流を渡つた者とよばれる。

（△メノム）

これは、五上分結と五下分結、五根、5つの執着を教えていました。それらを具体的に書き出して、文章を整えました。詳しくは「付録5 心の汚れ」(1)(7)、(4)を参照してください。本書の定義では「貪り」＝「愛欲」となります。

「五つの執著」は「五つの汚れ」（六汚れのうち無明を抜いたもの：付録5参照）と書き直します。

詰番印 G258 (F290, C, O271+272, OS19) [[@ GS 19 修行僧]]

G258 私は、解脱の楽しみを得た。それは凡夫の味わい得ないものである。それは、戒律や誓いだけによつても、また博学によつても、また瞑想を体現しても、またひとり離れて臥すことによつても、得られないものである。修行僧らよ、正しい禅定により法（真理）を得し汚れが消え失せない限りは、油断するな。

元詩 O271+O272：わたしは、出離の楽しみを得た。それは凡夫の味わい得ないものである。それは、戒律や誓いだけによつても、また博学によつても、また瞑想を体現しても、またひとり離れて臥すことによつても、得られないものである。修行僧よ。汚れが消え失せない限りは、油断するな。

一次 私は、解脱の楽しみを得た。それは凡夫の味わい得ないものである。それは、戒律や誓いだけによつても、また博学によつても、またひとり離れて臥すことによつても、得られないものである。道を実践する者達よ。汚れが消え失せない限りは、油断するな。

（△メノム）

「出離」は、「解脱」のことでしょう。解脱は、在家的な生活を送つていても、到達できると、私は感じています。

この詩は、【修行僧】以外にも【道を実践する人】や【賢い人】や【仏弟子】にも与えられた詩句と捉えた方が良いでしょう。

詰番印 G259 (F317, A, O371, OS25)、G260 (F318, A, O308, OS22)、G261 (F319, A, O311, OS22)、G262 (F320, A, O313, OS22) [[@ GS 19 修行僧]]

G259 修行僧よ。禪定せよ。なおやりになるな。汝の心を欲情の対象に向けるな。なおやりのゆえに鉄丸を呑むな。（灼熱した鉄丸）焼かれるとかに、「これは苦しい！」といつて泣き叫ぶな。

元詩 修行僧よ。瞑想せよ。なおざりになるな。汝の心を情欲の対象に向けるな。なおざりのゆえに鉄丸を呑むな。（灼熱した鉄丸で）焼かれるとかに、「これは苦しい！」といつて泣き叫ぶな。

G260 法（真理）を守らば、自ら慎む」とがないのに國の信徒の施しを受けるよりは、火炎のように熱した鉄丸を食らうぼうがあしだ。

元詩 戒律をまもらば、みずから慎むことがないのに國の信徒の施しを受けるよりは、火炎のように熱した鉄丸を食らうぼうがましだ。

一次 戒律を守らば、自ら慎む」とがないのに國の信徒の施しを受けるよりは、火炎のように熱した鉄丸を食らうぼうがましだ。

G261 茅草でも、といふ方を誤ると、手のひらを切るようにならぬと、地獄にひきずりおろす。

元詩 書換えなし

G262 もしも為すべきことあるならば、それを為すべきである。それを断乎として実行せよ。行ないの乱れた修行者はいつも多く塵をまき散らす。

元詩 書換えなし

（△メノム）

（△メノム）

G258：「欲情」→「情欲」としました（「付録5 (2) 欲と執着」参照）。在家人よりも出家側の方が、悪いことしく守られているのですから、それをわざわざ悪いことしに行くのならば、お仕置きだつて厳しくなります。修行僧にとっては、厳しい言葉で叱つてくださいね。

G271：「道を実践する人」と「賢い人」がどういう人なのかをうたっていますから、長くなりますが、2詩を一詩にします。「聰明な人」

を「賢い人」と書き変えました。

「義」という漢字は「正しいやり方」といへ、とても良い意味があります。ただし、成り立ちとしては「半の我」と記されていいるとかへ、「半の面を被った悪魔の自分（我）」もしくは「我よしの人間」という負のイメージを有します。「義」の一般的な意味には賛同するのですが、経典等の読み解きでは漢字の成り立ちの意味を重視しないとよくわからない部分が多いのです。同義であるならばその成り立ちも問題ないものに書き換えます。決して、通例の意味を表すその字を否定するものではありません。

詠诵印 G274 (F281, A, O260, OS19) , G275(F282, B, O261, OS19) [[@ GS 20 道を実践する人]]

G274 頭髪が白くなつたからとて【長老】なのではない。ただ年をとつただけならば「お」く老いぼれた人」と謂われる。

片詰 書か換えなし

275 誠あり徳あり慈しみがあつて他を害せず つつしみあり心身を整へ汚れを除くより氣をつけている人こそ「長老」と呼ばれる。

片詰 誠あり、徳あり、慈しみがあつて、傷わざ、つつしみあり、みずからといのえ、汚れを除き、氣をつけている人こそ「長老」と呼ばれる。

一次 誠あり、徳あり、慈しみがあつて、つつしみあり、みずからといのえ、汚れを除き、氣をつけている人こそ「長老」と呼ばれる。

（口メノム） G275：「傷わざ」の意味が曖昧なので「他を害せざ」へしました。人間は心身共に整えなければならないので、「心身を整える」としました。ただ、くれぐれも注意したのは、心の方に注意をたくさん向けないといけない点がいい点です。

詠诵印 G276 (F283, B, O262+O263, OS19) [[@ GS 20 道を実践する人]]

G276 嫉み、吝嗇(りんしょく=ケチ)、偽りを断ち、根絶やしにし、やらいに、憎しみをのぞき、聰明である人、かれこそ「端正な人」と呼ばれる。

片詰 O262：嫉みぶかく、吝嗇(りんしょく=ケチ)で、偽る人は、ただ口先だけでも、美しい容貌によつても、「端正な人」とはならない。

O263：これを断ち、根絶やしにし、憎しみをのぞき、聰明である人、かれこそ「端正な人」と呼ばれる。

（口メノム） 端正とは、「行儀や姿などが整つていて立派ないい」。乱れた所がなく見事ない」と辞書に書かれています。在家で生活する立派に見え

端正とは、「世間から離れた静けさの中や、念いを静め、禅定に専中している修行僧は、正しごやうりを開く。神々やさえもその人を羨む。

元詩 正しごやうりを開き、念いに耽り、瞑想に専中している心ある人々は世間から離れた静けさを楽しむ。神々やさえもかれを羨む。

G265 世間から離れた静けさの中や、念いを静め、禅定に専中している修行僧は、正しごやうりを開く。神々やさえもその人を羨む。

元詩 正しごやうりを開き、念いに耽り、瞑想に専中している心ある人々は世間から離れた静けさを楽しむ。神々やさえもかれを羨む。
くださつてているのでしょ。

「人のいない空家」→「人のいない場所」としました。

（口メノム）

1つの詩を一つにまとめます。

修行僧にとって念と定の修行（＝真理を正しく観ずる）を行へいといにより得られるメリットが示されてゐると思ふます。

いへいで喜びは、実際に体得しない、言葉では説明できなんとも思つてゐます。だから、「信じて修行を行つてください」と御教示してくださつてているのでしょ。

「人のいない空家」→「人のいない場所」としました。

詠诵印 G265 (F322, C, O181, OS14) [[@ GS 19 修行僧]]

G265 世間から離れた静けさの中や、念いを静め、禅定に専中している修行僧は、正しごやうりを開く。神々やさえもその人を羨む。

元詩 正しごやうりを開き、念いに耽り、瞑想に専中している心ある人々は世間から離れた静けさを楽しむ。神々やさえもかれを羨む。

詠诵印 G266 (F326, A, O382, OS25) [[@ GS 19 修行僧]]

G266 たゞ年の若い修行僧でも、仏の道にこそしむなれば、雲を離れた月のように、の世を照らす。

片詰 書換えなし

詠诵印 G267 (F328, B, O383, OS26) [[@ GS 19 修行僧]]

G267 修行僧よ。勇敢であれ。情欲の流れを断ち、諸の妄執を去れ。諸の現象の生成と消滅を知つて、作られやるもの一法（真理）を知る者であれ。

元詩 バラモンよ。流れを断て。勇敢であれ。諸の欲望を去れ。諸の現象の消滅を知つて、作られやるもの（ニルヴァーナ）を知る者であれ。

一次 バラモンよ。流れを断て。勇敢であれ。諸の欲望を去れ。諸の現象の生成と消滅を知つて、作られやるもの一法を知る者であれ。

（口メノム）

「諸の現象の生成と消滅」は、人の情欲によりて色により生成される事象が多いとを説かれてゐるのによつて（付録5 (2) 欲と執着参照）。やむに「色相を知りなれど」ことへりゆじ、同時に「空相」（真理）を知らねばならないという教えでしょ。したがつて、「作ら

れがねのもの（リハヴァーナ）」という解釈より「作られたものの一法」の方が正しいと考えられます。
「消滅」は「生成と消滅」へしました。

詰浦叩 G268 (F324, C, O378, OS25) [[@ GS 19 修行僧]]

G268 修行僧が、身も静か、語（いふば）も静か、心も静かで、よく精神統一をなし、世俗の享楽物を吐きすてたならば、真の修行僧とも真人とも呼ばれる。

元詩 修行僧は、身も静か、語（いふば）も静か、心も静かで、よく精神統一をなし、世俗の享楽物を吐きすてたならば、【やかまきに帰した人】と呼ばれる。

一次 修行僧が、身も静か、語（いふば）も静か、心も静かで、よく精神統一をなし、世俗の享楽物を吐きすてたならば、バラモンと呼ばれる。

（△メノム）

【やかまきに帰した人】は解脱者のことじしょ。そうなると、【真人】か【真の修行僧】の方が、正確です。

詰浦叩 G269 (F330, C, O415, OS26) , G270 (F331, C, O416, OS26) [[@ GS 19 修行僧]]

G269 出家して修行し、いの世の情欲の激流を超え、妄執の尽きた人、—その人を吾は【真の修行僧】と呼ぶ。

元詩 いの世の欲望を断ち切り、出家して遍歴し、欲望の生活の尽きた人、—かれをわれは【バラモン】と呼ぶ。

一次 出家して修行し、いの世の欲望の激流を超え、執着の尽きた人、—その人を我はバラモンと呼ぶ。

G270 出家して修行し、愛欲を断ち切り、愛欲の生存の尽きた人、その人を吾は【真の修行僧】と呼ぶ。

元詩 いの世の愛執を断ち切り、出家して遍歴し、愛執の生存の尽きた人、—かれをわれは【バラモン】と呼ぶ。

一次 出家して修行し、心をよく治めて、心の汚れの尽きた人、—その人を我はバラモンと呼ぶ。

（△メノム）

元詩が、「付録⁵ (2) 欲と執着」の定義とは合わないので、付録⁵で記したように、心の汚れの中に執着は入るのですが、いの世に設定されている欲望の激流に直接感応するのは、執着なので、分けて詩を書きました。

GS 20 節 道を実践する人

道を実践する人とは、「付録4 人間の分類」で紹介した真理の探究分類法です。本節は9詩から成ります。

詰浦叩 G271 (F278, B, O256+257, OS19) , G272 (F279, A, O258, OS19) , G273 (F280, A, O259, OS19) [[@ GS 20 道を実践する人]]

G271 あらあらしく軽率な裁断する人は道を実践する人ではない。法（真理）に照らして誠と誠でないものをはつきりと区別する人が法を守る道を実践する賢い人である。

元詩 O256：あらあらしく事がらを処理するからとて、公正な人ではない。賢明であつて、義と不義との両者を見きわめる人

O257：粗暴になることなく、きまりにしたがつて、公正なしかたで他人を導く人は、正義を守る人であり、道を実践する人であり、聰明な人であるといわれる。

一次 あらあらしく事がらを処理するからとて、公正な人ではない。義と不義との両者を見きわめる人、粗暴になることなく、あまりにしたがつて、公正なしかたで他人を導く人は、正義を守る人であり、道を実践する人であり、聰明な人であるといわれる。

G272 多く説くからとて、それゆえに賢明なのではない。心穏やかに、怨むことなく、恐れることのない人、その人こそ道を実践する賢い人である。

元詩 多く説くからとて、それゆえにかれが賢明なのではない。いいろおだやかに、怨むことなく、恐れることのない人、かれこそ【賢者】と呼ばれる。

一次 多く説くからとて、それゆえに賢明なのではない。心を落ち着けて、怨むことなく、恐れることのない人、その人こそ賢明であつて、道を実践する人である。

G273 多く説くからとて、それゆえに道を実践している人なのではない。たとい教えを聞くことが少なくとも、身をもつて真理を見る人、怠つて道からはずれることの無い人—その人こそ道を実践している人である。

元詩 多く説くからとて、それゆえにかれが道を実践している人なのではない。たとい教えを聞くことが少なくても、身をもつて真理を見る人、怠つて道からはずれることの無い人—かれこそ道を実践する人である。

（△メノム）

一一三「神示の日月の巻第03帖（176）にも、下記のように修行についての教えがあります。

此の神示声立てで読みて下されと申してあるがな。臣民ばかりに聞かすのでないぞ。守護神殿、神々様にも聞かすのぞ、声出して読みてさへおればよくなるのぞぞよ。じやと申して、仕事休むでないぞ。仕事は行であるから務め務めた上にも精出して呉れよ。それがまことの行であるぞ。滝に打たれ断食する様な行は幽界（がいじく）の行ぞ。神の國のお土踏み、神國の光いきして、神國から生れる食物（たぐもの）頂きて、神國のおん仕事してゐる臣民には行は要らぬのぞぞ。此の事よく心得よ。十月十九日。一一〇。
http://18.pro.tok2.com/~solht09200707/summon/summon_06_176.htm やんより）一 他利的でない苦行のい利益を旨目的に信じ、いだわていふ人々を見て、お糸迦様は愚かな者と断じていふしゃるのやしょく。どちらか、愚者が行う断食行のみならず全ての行には功德がなく、真理をわきあえた人の絶大な功德とは比べられないのです。

詔勅印 G292 (F235, A, O071, OS5) ' **G293** (F236, A, O072, OS5)' **G294** (F237, A, O074, OS5) ' **G295** (F238, A, O073, OS5) [[@ GS 21 愚かな人]]

G292 愚事をしても、その業は、しぼり立ての牛乳のようじ、すぐに固まるいふはない。（徐々に固まつて熟する）その業は、灰に覆われた火のように、（徐々に）燃えて悩ましながら、愚者につあおむか。

元詩 書換えなし

G293 愚かな者に念慮（オモイ）が生じても、ついにその人には不利ないふになつてしまふ。その念慮はその人の好運（シアワセ）を滅ぼし、その人の頭を打ち碎く。

元詩 愚かな者に念慮（オモイ）が生じても、ついにかれには不利なことになつてしまふ。その念慮は彼の好運（シアワセ）を打ち碎く。

G294 「い」れば、わたしのしたことである。在家の人々も出家の人々も、ともにいのいのことを知れよ。およそなすべきいととなすべからぬいふとについては、私の意に従え」—愚かな出家者（修行僧）はいのように思つ。いふして欲求と高慢（たかぶり）とがたかおむねり）とがたかま。

元詩、一次 「い」れば、わたしのしたことである。在家の人々も出家の人々も、ともにいのいのことを知れよ。およそなすべからぬいふとについては、私の意に従え」—愚かな者はいのように思つ。いふして欲求と高慢（たかぶり）とがたかおむねり）とがたかま。

G295 愚かなバラモンや修行僧は、実にそぐわぬ虚しい尊敬を得ようと願うであろう。修行僧らのあいだでは上位を得ようとし、僧房にあつては権勢を得ようとし、他人の家に行つては供養を得ようと願うであらう。

る人たちが、見た目だけ端正なのか？ 心も端正なのか？ を見極める必要があるといふのです。

詩番印 G277 (F287, C, O268+O269, OS19) ' **G278** (F288, C, O268+O269, OS19)' **G279** (F289, C, O270, OS19) [[@ GS 20 道を実践する人]]

G277 ただ沈黙していふからとて、道を実践する人と思つてはならない。そのよつた中には、愚かに迷い無智なる人がたくさんいる。

G278 秤を手にもつていふように、いみじきものを取り、もろもろの悪を除く賢者（そ道を実践する人なのである。い）の世にありて善惡の両者を（秤りにかけてはかるように）よく考える人こそ道を実践する人とよばれる。

元詩 O268+O269：ただ沈黙していふからとて、愚かに迷い無智なる人が【聖者】なのではない。秤を手にもつていふよつたに、いみじきものを取りもろもろの悪を除く賢者こそ【聖者】なのである。かれはそのゆえに聖者なのである。い）の世にありて善惡の両者を（秤りにかけてはかるように）よく考える人こそ【聖者】とよばれる。

G279 (黙だかといつて)他の生きものを害なうのは、聖者の道の実践ではない。生きとし生けるもの全てを害わないので聖者の道の実践という。

元詩 生きものを害うからとて【聖者】なのではない。生きとし生けるものどもを害わるのは、道を実践する人ではない。

第一次 道を実践する人と呼ばれる人は、生きとし生けるものを無益に害わるのは、道を実践する人ではない。

(口メノム)

G279：「聖者」を「道を実践する聖者」と捉えます。本書では、【聖者】はみ仏と真人を合わせた場合に使います。【聖者】と言われる人々の道の実践の仕方を説かれていふと受け止めました。前半は何か詩文が抜けていふようで、どうしても意味不明でした。相手が悪いから徹底的に排除するという行き過ぎた風潮に対して、お釈迦様が教えを述べられているのではないかと思い、そのような意味を足して書き換えました。

GS 21 節 愚かな人

本節は1-6詩から成ります。

詔神印 G280～G289 各詔とも元詩通り。 [[@ GS 21 愚かな人]]

G280 (F223, A, O060, OS5)

眠ねなぐ人には夜は長く、疲れた人には一里の道は遠い。正しい真理を知らない愚かな者むには、生死の道のりは長い。

G281 (F224, A, O061, OS5)

旅に出て、わしも自分よりもすぐれた者が、または自分にむとしい者に出会わなかつたら、おしゃきつぱりと独りで行け。愚かな者を道伴（づ）れにしてはならぬ。

G282 (F225, A, O062, OS5)

「わたしたちには子がある。わたしには財がある。」へ頃つて愚かな者は悩む。
しかしそうでに己が自分のものではない。
あしてどうして子が自分のものであらうか。むかしに財が自分のものであらうか。

G283 (F226, A, O063, OS5)

わしも愚者がみずから愚であると考へれば、すなわち賢者である。愚者でありながら、しかもみずから賢者だと思へ者いそ、「愚者」だと言われる。

G284 (F227, A, O064, OS5)

愚かな者は生涯賢者に仕えても、真理を知るゝことが無い。匙が汁の味を知るゝことができないよべに。

G285 (F228, A, O065, OS5)

聰明な人は瞬時（またたき）のあいだ賢者に仕えても、ただちに真理を知る。舌が汁の味をただちに知るよつに。

G286 (F229, A, O066, OS5)

あやはかな愚人べもば、口（おのれ）に対して仇敵（かたき）に対するようによるおへ。悪い行いをして、苦心果実（ゝ）のみ）をむかふ。

G287 (F230, A, O067, OS5)

わしも或の行為をした後に、それを後悔して、顔に涙を流して泣きながら、その報いを受けぬならば、その行為をしたゝとは善くなし。

G288 (F231, A, O068, OS5)

わしも或の行為をしたのに、それを後悔しないで、嬉しく喜んで、その報いを受けるならば、その行為をしたゝとは善い。

詔神印 G289 (F232, A, O069, OS5)

愚かな者は、悪い行なゝを行つても、その報いの現れないあいだは、それを蜜のよつに思ひなす。しかし、その罪の報いの現れたときには、苦惱を受けぬ。

(口メハル)

G282 と G286 の「口」は「皿口」からの置き換えていませ。

詔神印 G290 (F233, A, O136, OS10) [[@ GS 21 愚かな人]]

G290 愚かな者は、悪い行なゝをしておきながら、気がつかない。しかし浅はかな愚者は自分自身のしたいゝによつて悩まやれる。あたかも、火がこの愚者を焼きこがすよつに。

元詩 しかし愚かな者は、悪い行ないをしておきながら、気がつかない。浅はかな愚者は自分自身のしたいゝによつて悩まやれる。火に焼きこがされた人のようじ。

一次 しかし、愚かな者は、悪い行なゝをしておきながら、気がつかない。しかし浅はかな愚者は自分自身のしたいゝによつて悩まやれる。あたかも、火がこの愚者を焼きこがすよつに。

(口メハル)

OS10 暴力から移動。

比喩部分は意味が通じゆよへども。

詔神印 G291 (F234, B, O070, OS5) [[@ GS 21 愚かな人]]

G291 愚かなものは、真理をわきまえた人が得る功德と同じように、断食行により功德が得られると考える。しかし、愚者の行つて行に功德はなづ。

元詩 愚かなものは、たとい毎月（苦行者の風習にならつて一月に一度だけ）茅草の端につけて（極く少量の）食べ物を摂るようなことをして、（その功德は）真理をわきまえた人々の16分の1にも及ばない。

一次 愚かなものは、真理をわきまえた人が得る功德と同じように、断食行により功德が得られると考える。

(口メハル)

G303 一つの岩の塊りが風に揺るがないように、賢者は非難と賞賛により心が乱れぬ」とはない。

元詩、一次 一つの岩の塊りが風に揺るがないように、賢者は非難と賞賛とに動じない。

(口メンヘン) 賞賛は嬉しいし、非難は心が暗くなりますが、そこは素直に感じて良いと思います。そこから心を乱されるか、それとも心を整えて守つて正しく身が処せるかが大切だということです。

詩番叩 G304 (F2446, A, O376, OS25) [[@ GS 22 賢い人]]

G304 わの行ないが親切であれ。(何ものでも) わかち合え。善いことを実行せよ。そうすれば、喜びにみち、苦惱を減するであへ。

元詩 書き換えなし

詩番叩 G305 (F2447, C, O077, OS6) [[@ GS 22 賢い人]]

G305 聖者が道を説く時、その聖者は賢い人は愛し、愚かな人は疎む。

元詩 (他人を) 訓戒せよ、教えさせ。宜しくないことから (他人を) 遠ざけよ。そうすればその人は善人に愛せられ、悪人からは疎まれる。

一次 道を説く賢い人は善人に愛せられ、悪人からは疎まれる。

(口メンヘン)

道を説く人は、聖者(アッダと真人) くふのレベルでしそう。これを喜んで受け入れる人々が賢者であり、疎むものが愚者だとう判断をお示しになられていると思います。

詩の前半部分のように、積極的に他人に関わるというより、仏道は困っている人に道は説くものの、それを押し付けるのではなく、あくまでも、自分が愚だと気づくことから、心や意識に浮かんできたことを自分で実践することを大切にするのです。よつてこの部分は、仏道ではない別の教えが併設されていると考えられるので削除します。

詩番叩 G306 (F2448, A, O084, OS6) [[@ GS 22 賢い人]]

G306 自分のためにも、他人のためにも、子を望んではならぬ。財をも國をも望んではならぬ。

邪なしかたによつて自己の繁栄を願うてはならぬ。

元詩 書き換えなし

(口メンヘン)

G293 「かれ」を「その人」としました。

G295 愚かな出家者のことを表しています。明らかに愚かなバラモンの行儀の悪い部分を謳つた詩です。ですから、このことがはつきりわかるように主語を「バラモンや修行僧」と書き換えます。

光の守護下の人間であれば、カルマの清算は割合にすぐにやつてしまわ。そんなのいらないよと悪態をつきたくなるくらいです(笑)。しかし、悪魔の守護下になると、カルマの清算が来ないので。だから、悪人は交通違反しても捕まらないのです。しかし、溜まる一方のカルマで、自分が壊れていく危険をはらみます。

一二三神示では、この世の人々や様々な団体に溜まった悪いカルマを「借錢」と言い表してゐるようです。これが溜まつてしまつて「進も三進もいかないのが、現在のこの世の中なんだと思ひます。

GS 22 節 賢い人

この章は順番が大幅に乱されていると感じて、詩の並び順、構成も大幅に修正をしました。本書では F259 ～ F261 詩を、それぞれ G329、G335 詩と J2023 節 真人に編入しました。

神道や仏道について考えをふくらませた時、習得した後の世界は、雑音はきわめて低いのですが、揺らぎが存在しないほどの静まりが広がつているとは想像ができないのです。どうしても「静か」という表現で、この個人的な思いが引っかかってしまう部分については「穏(おだ) やか」という表現で代替えしました。

本節は 14 詩から成ります。

詩番叩 G296 (F203, C, O184, OS14) [[@ GS 22 賢い人]]

G296 忍耐・堪忍は最上の苦行である。涅槃(悟りによる解脱)は最高のものであゆど、もろもろのみ仏は説きたまう。他人を害する人、悩ます人は、賢い人ではない。

元詩 忍耐・堪忍は最上の苦行である。ニルヴァーナは最高のものである、ややもろのブッダは説きたまう。他人を害する人は出家者ではない。他人を悩ます人は「道の人」ではない。

一次 忍耐・堪忍は最上の苦行である。ニルヴァーナは最高のものである、ややもろのブッダは説きたまう。他人を害する人、悩ます人は仏弟子ではない。

(口メンソール)

【道の人】は定義でない。 「賢い人」としました。

詰浦叩 G297 (F240, C, O380, OS25)’ G298 (F239, B, O080, OS6) [[@ GS 22 賢い人]]

G297 実に口 (守護神) は心 (自分) の主 (あるじ) であり、帰趣 (よみぐ) である。故に心を整えよ。商人が良い馬を調教するよ
うに。

元詩 實に自己は自分の主 (あるじ) である。自己は自分の帰趣 (よみぐ) である。故に自分をととのえよ。商人が良い馬を調教するよ
うに。

一次 実に魂 (自己) は心 (自分) の主 (あるじ) であり、帰趣 (よみぐ) である。故に魂により心を治めよ。商人が良い馬を調教するよ
うに。

G298 水道をつくる人は水をみちびき、矢をつくる人は矢を矯め、大工は木材を矯める様に、賢者は心を整えよ。

元詩 水道をつくる人は水をみちびき、矢をつくる人は矢を矯め、大工は木材を矯める様に、賢者は自己を整えよ。

一次 水道をつくる人は水をみちびき、矢をつくる人は矢を矯め、大工は木材を矯める様に、賢者は自己を整え、心を治めよ。

(口メンソール)

G297 : 靈魂の関係は、靈が上で魂が下です。心 (自分) の構成の多数である魂は、守護神 (靈) と繋がっているので、心 (自分、意識) を
心から向ければ、心が必要とする様々な回答が得られます。ただし、この過程で心の汚れがひどいと、正しい回答が得られなくなります。

「付録2 「心が治まる」と「心を整える」についての考察」参照。

G298: 「由口を整えよ」の部分を、「心を整えよ」と変更。

詰浦叩 G299 (F241, C, O091, OS7) [[@ GS 22 賢い人]]

G299 賢い人々は努め励みあの執着 この執着から離れ統べる。

片詰 いのるをどうめている人々は努めあげむ。かれらは住居を楽しまない。白鳥が立ち去るよう、かれらはあの家、この家を捨てん。

一次 賢い人々は努めはげむ。かれらは執着を遠ざける。彼らは、あの執着、この執着を捨てる。

(口メンソール)

G300 中村氏により、住居=執着であるという注釈がなされています。私は、出家礼賛は、人を正しい方向には導かないと考えてしますので、
ストレートに住居や家を執着と置き換え、文章を整えます。また、正しい教えの中には、「捨てる」という概念は入らないという考え方につ
いて、詩文を直しています。その結果、元詩とは似ても似つかない詩に書き換わりました。

詰浦叩 G300 (F242, A, O076, OS6) [[@ GS 22 賢い人]]

G301 悪い友と交わるな。卑しい人と交わるな。善い友と交われ。尊い人と交われ。
元詩 賢者は、よいにこても、執着を離れ統べるので、楽しみを欲してしゃべりとは無し。しゃべりに遭 (あ) にこても、賢
者は心の慎みを忘れず動かさないとはない。

詰浦叩 G301 (F243, A, O078, OS6) [[@ GS 22 賢い人]]

詰浦叩 G302 (F244, B, O083, OS6) [[@ GS 22 賢い人]]

G302 賢者は、よいにこても、執着を離れ統べるので、楽しみを欲してしゃべりとは無し。しゃべりに遭 (あ) にこても、賢
者は心の慎みを忘れず動かさないとはない。

元詩、一次 高尚な人々は、よいにこても、執着するところが無い。快樂を欲してしゃべりが無い。しゃべりに遭 (あ) にこても、賢者は動
かさない。

「動かす色がない」を「心を慎み動かさない」に置き換えました。

(口メンソール)
「動かす色がない」を「心を慎み動かさない」に置き換えました。

詰浦叩 G303 (F245, B, O081, OS6) [[@ GS 22 賢い人]]

元詩 大地のように逆らういとなく、門のしまりのように慎み深く、（深い）湖は汚れた泥がないように、—そのような境地にある人には、も

はや生死の世は絶たれている。

（口メンソール）

・大地と門の比喩が不明ですから、以下の視点で書き換えます。

・大地は、生きとし生けるものすべてに恩恵を与えていても、いつも静かで自分を主張するといふことがありませんので、慎しみ深いのは大地と考えます。ただ、火山爆発や地震などは稀ですので、例外事項とします。

・門は閉めたり開けたりすることで、人の出入りを監視しますので、正しい分別を持つといふとを比喩していると考えます。

・湖は、心のたとえと考えます。

詩番印 G314 (F256, B, O085, OS6) [[@ GS 22 賢い人]]

G314 人々は多いが、涅槃（やむらじよる解脱）に達する人々は少ない。他の（多くの）人々は輪廻転生をやまよつてゐる。

元詩 人々は多いが、彼岸（かなたのきし）に達する人々は少ない。他の（多くの）人々はこなたの岸の上でやまよつてゐる。

一次 人々は多いが、安らぎ（解脱）に達する人々は少ない。他の（多くの）人々は輪廻転生をやまよつてゐる。

（口メンソール）

彼岸は「涅槃（やむらじよる解脱）」に書き換えました。

詩番印 G315 (F257, C, O092+093, OS7) [[@ GS 22 賢い人]]

G315 心の汚れが消え失せ解脱するとは、空を表現していの世の実相を認識するといふのである。いの解脱者たちの行く手は広大で測りがたい。—空飛ぶ鳥の行く手が測り難いように。

元詩 O092：財を蓄えることなく、食べ物についてその本性を知り、その人々の解脱の境地は空にして無相であるならば、かれらの行く路（足跡）は知り難い。—空飛ぶ鳥の迹の知り難いように。

O093：その人の汚れは消え失せ、食べ物をむさぼらず、その人の解脱の境地は空にして無相であるならば、かれの足跡は知り難い。—空飛ぶ鳥の迹の知り難いように。

一次 心の汚れが消え失せ解脱することは、空を表現していの世の実相を認識することでもある。いの解脱者たちの行く路（足跡）は知り難い。

—空飛ぶ鳥の迹の知りがたいように。

（口メンソール）

自身が「明らかな智慧」を持つていたら、もはや詩文の前半の部分を注意する必要がありませんので、この部分は「明らかな智慧あるものに従う」と置き換えます。

（口メンソール）

（道にかなつた）行いあり、明かな知慧ある者と真理にしたがつておれ。

元詩 自分のためにも、他人のためにも、子を望んではならぬ。財をも國をも望んではならぬ。

邪なしかたによって自己の繁栄を願うてはならぬ。

（道にかなつた）行いあり、明かな知慧があり、真理にしたがつておれ。

詩番印 G307 (F249, A, O186, OS14) [[@ GS 22 賢い人]]

G307 たとえ貨幣の雨を降らすとも、愚者の妄執が満足されることはない。「愚かな楽しみは短くして後は苦となる。」と知るのが賢い人である。

元詩 たとえ貨幣の雨を降らすとも、欲望の満足されることはない。「快楽の味は短くて苦痛である」としるのが賢者である。

一次 たとえ貨幣の雨を降らすとも、欲望の満足されることはない。「快楽の味は短くて苦痛である」と知るのが賢い人である。

（口メンソール）

快楽と、う言葉はネガティブなイメージの強いことはですので、「楽しみ」と置き換えた。「欲望」は、本書では同じ意味とした「妄執」に置き換えます（付録5（2）参照）。

お釈迦様は、楽しみや快樂を味わい、それに正しく対処するのがこの世の中の醍醐味だと教えてくださつてるので、楽しみや快樂が一概に悪い物とは考えてらつしやらないと思います。これに遭遇した時の対処の仕方によつて賢愚が決定することを説いてくださつているのです。

詩番印 G308 (F250, A, O087, OS6) [[@ GS 22 賢い人]]

G308 賢者は、悪いことがらを行わず、善いことがらを行え。愚者には楽しみ難い孤独（ひとりご）のうちに、賢者は喜びを見出すであろう。

元詩 賢者は、悪いことがらを捨てて、善いことがらを行え。家から出て、家の無い生活に入り、楽しみ難いことではあるが、孤独（ひとりい）のうちに、喜びを求めよ。

一次 賢者は、悪い」とがらを捨てて、善い」とがらを行ふ。楽しみ難い」とではあるが、孤独（ひとり）のうちにも、喜びを求めるよ。

(口メノト)

出家の勧めを弱める文章にしました。また、積極的な「求め」は妄執につながるので、常に危険をはらみます。賢くなつてくれれば、自ずと静寂や孤独のなかに大切なものを見出すであらうと考えますので、」の考えに従い詩を書きしました。

詩番印 G309 (F251, B, O182, OS14) , G310 (F252, B, O193, OS14) [[@ GS 22 賢い人]]

G309 人は、身体が死んでも、魂は存在したままである。

人の身を受けた」とは、稀で貴重ゆえ、無駄にしてはならない。

もうもろのみ仏の出現したもつゝとも正しい教えを聞く機会も稀である。

人間の身を受けた」とは難しい。死すべき人々に寿命があるのも難しい。正しい教えを聞くのも難しい。もろもろのみ仏の出現したもつゝともか難しい。

一次 人間の身を受け、人生修行することは貴重で、無駄にしてはならない。

死ぬ運命にあると言われる人間は、実は、身体が死んでも、魂は連続的に存在する。

ただ、もろもろのみ仏の出現したもつゝとも正しい教えを聞く機会も稀である。

G310 尊い人（＝み仏）は得がたい。その人はじにでも生れるのではない。思慮深い人（＝み仏）の生れるところは、光り輝くであらう。

尊い人（＝ブツダ）は得がたい。かれはじにでも生れるのではない。思慮深い人（＝ブツダ）の生れる家は、幸福に栄える。

一次 尊い人（＝ブツダ）は得がたい。かれはじにでも生れるのではない。思慮深い人（＝ブツダ）の生れる家は、光り輝く。

(口メノト)

G309：魂のみの生活の方が圧倒的に分量が多く、人間として身を受けて生まれてくる」とは非常に稀だと言われています。また、靈は同類同士が集まると言われており、異なる性質を持つ存在同士の交流はほとんどないとも、一二三神示で示されています。したがって、身体を離れた後の生活は似た物同士が集まるので、比較的おだやかでスムーズですが、自分に足りない考え方や性質に触れる機会がありません。しかし、この世はさまざまな性質を持つ魂が人間の身体に入つて活動するので、自分に足りない考え方や性質に気づきやすいのです。さまざまな靈格や靈質と交流できる場がこの世であり、成長のチャンスであると言つことです。したがつて、人間の身を受けているのは貴重で無駄にしてはいけないということを表す詩文にしました。

「死すべき人々に寿命があるのも難しい。」は、死ぬと言われている人間も、死によつて、無に帰る「」ことが声高に言われますが、お釈迦様の立場では、これは虚偽であると主張なさつてらつしやるので、この点も正しく伝わるように書き換えてみました。

G310：「幸福に栄え」とは、中村氏の注釈によると「光り輝く」という意味だそうです。「み仏」が「」出現なもん単位として「家」だとか心許ないので「といふ」としました。

この詩はお釈迦様の默示録のような感じがしますので、未来形に書き換えました。

詩番印 G311 (F253, C, O086, OS6) , G312 (F254, C, O079+O082, OS6) [[@ GS 22 賢い人]]

G311 真理が正しく説かれたときに、真理にしだがう人々は、渡りがたい輪廻転生を超えて、涅槃（やぶらによる解脱）にいたる

やあらへ。

元詩 真理が正しく説かれたときに、真理にしたがう人々は、渡りがたい死の領域を超えて、彼岸（かなたのきし）にいたるであろう。

一次 真理が正しく説かれたときに、真理にしたがう人々は、渡りがたい輪廻転生を超えて、安らぎにいたるであろう。

G312 真理を喜ぶ賢い人は、真理を聞き、正しく生活を送り心穏やかに暮らす。その人の心は、深い澄んだ湖のように穏（おだ）やかで清らかになる。

元詩 O079：真理を喜ぶ人は、心きよらかに澄んで、安らかに臥す。聖者の説きたまうた真理を、賢者はつねに楽しむ。

O082：深い湖が、澄んで、清らかであるようだ、賢者は真理を聞いて、いろいろ清らかである。

一次 真理を喜ぶ賢い人は、真理を聞き、正しく生活を送り安らかに臥す。その人の心は、深い澄んだ湖のように静かで清らかになる。

(口メノト)

G311：「渡りがたい死の領域」を「輪廻転生」と置き換えます。

G312：似ている「詩を一つにして、構成順序を整えました。真理を説くのは、み仏か真人（＝聖者）です。

「誰か」を「穏やか」に書き換えます。

詩番印 G313 (F255, C, O095, OS7) [[@ GS 22 賢い人]]

G313 大地のよつには慎み深く、整つた門のように分別を保ち、汚れた泥がない深い湖のように心が清らかな、そのような境地にいる人には、やはや生死の世は絶たれている。

精神の安定統一と明らかな知慧とがそなわっている人は安らぎに帰す。

(コメンント)

心を整え 治まり 禅定により精神を統一し「空」(眞理)を見定めて智慧を得るというのが、順序だと考えますので、「明らかな知慧の無い人には精神の安定統一が無い。」という部分は順序が逆転しているので削除しました。

在家中でも、真人の段階にいる人には、禅定が必要であることを教えています。

正しい神様と真理を捉える作業が禅定で、これには「正しい念」つまり「精神の安定統一」を必要とし、これにより智慧を得ます。一時、知慧を得たからといって、安定統一と知慧を得る事を心がけることは必要だと思いますが、これが詩の最後の部分で歌われています。すでに述べましたが、念(正しい念) 定(禅定)、慧は不可分です(付録3 四諦と仏道 参照)

詩番印 G322 (F309, C, O391, OS26) [[@ GS 23 真人]]

G322 身にも、言葉にも、心にも、悪い事を為さず、(いの) 三つについて常に慎んでいる人、—その人を吾は真人と呼ぶ。

元詩 身にも、いとばにも、心にも、悪い事を為さず、三つのいのについてつつしんでいる人、—かれをわれは【バラモン】と呼ぶ。

一次 身にも、言葉にも、心にも、悪い事を為さず、(いの) 三つのいのについて慎んでいる人、—その人を我は修行僧と呼ぶ。

(コメント)
OS26 バラモンの章から移動。これは、慎みの完成を歌っているので、修行僧の詩から真人の詩に変えました。

詩番印 G323 (F341, B, O408, OS26) [[@ GS 23 真人]]

G323 粗野ならず、いとがらをはつきりと伝える眞実のことばを発し、いとばによつて何人の心を害する意のない人、—その人を吾は真人と呼ぶ。

元詩 粗野ならず、いとがらをはつきりと伝える眞実のことばを発し、いとばによつて何人の感情をも害する」とのない人、—かれをわれは【バラモン】と呼ぶ。

一次 粗野ならず、ことがらをはつきりと伝える眞実のことばを発し、いとばによつて何人の心を害する意のない人、—その人を我はバラモンと呼ぶ。

(コメント)

地獄→惡いところ バラモン→真人としました。

(コメント)

付録7 参照

無相などと「何もかも無いと同じ」というイメージを持つてしまい、非常に危険です。

解脱は、持続的に空を体現して、この世の実相と色相を区別することに他なりません。これに従つて、詩を書き換えました。

そして、空の体現と「食べ物を貪らず」や「食べ物の本性を知る」は同等のはずがありません。従つて、この2句は削除します。

また、この教えは、在家と出家の両者に与えられているので、財は結果として溜まつてしまふことまで禁じえません。突き詰めて言つてしまえば、「財を蓄えること=悪」と言う関係は間違いで、悪魔のトラップです。従つて、これに関する句も削除します。

結果として、兩詩はほとんど同様な詩句になるので、合体させます。

「行く跡(足跡)」を、未来的な意味合いを出すため「行く手」に置き換えました。

詩番印 G316 (F258, C, O096, OS7) [[@ GS 22 賢い人]]

G316 空の体現によって解脱して、やすらかに帰した人—そのような人の心は穏(おだ)やかである。いとばも穏(おだ)やかである。行いも穏(おだ)やかである。

元詩 正しい智慧によつて解脱して、やすらかに帰した人—そのような人の心は静かである。いとばも静かである。行いも静かである。

一次 無相の体現によつて解脱して、やすらかに帰した人—そのような人の心は静かである。いとばも静かである。行いも静かである。

(コメント)

いの世の中の実相が認識できる(空の体現)により、涅槃(悟りによる解脱)し、智慧が湧くの順番であろうと考えています。また、空の体現は心の汚れがある程度以下に無くなることによつてなされると考えています(付録7「悟りと空」参照)。

GS 23 節 真人

第一に、「吾」は神のお告げという意味が大元の意味です。一人称に吾を使つた場合、本・正守護神優位の本人を指していると考えられます。一方、「我」は自己主張ばかりする自分、つまり副守護神的自分です。自分が使う一人称に「われ」が来た場合、「吾」か「我」のどちらを使う方が無難か、考えて「吾」をあてました。眞理のいとばで出てくる「われ」はお釈迦様の師匠様の本守護神様が自身の一人称として使われている場合が多いと考えています。

第一に、基本的に、バラモンを贊美する詩はブツダの贊美詩とします。

また、中村氏は、真人の章の注釈のトップで、真人とは、「尊敬されるべき人」、「挙まれるべき人」、「尊敬供養を受けるべき人」と書かれています。真人とブツダ（み仏）の境界は、付録4（1）分類方法の後半で議論しましたので、参照ください。

今回は、真人とブツダ（み仏）の境界を厳密にしたことにより、基本的に真人の贊美詩はなくなりました。

詠诵印 G317 (F269, B, O098, OS7)、G318 (F270, B, O099, OS7) [[@ GS 23 真人]]

G317 村にせよ、荒れ地にせよ、低地にせよ、平地にせよ、真人の住む土地は楽しい。

元詩 村にせよ、林にせよ、低地にせよ、平地にせよ、聖者の住む土地は楽しい。

G318 真人は人のいない荒れ地でも楽しい。世人の楽しまないところにおいて、愛執なき真人は楽しむであろう。かれらは快樂を求めるからである。

元詩 人のいない林は楽しい。世人の楽しまないところにおいて、愛著なき人々は楽しむであろう。かれらは快樂を求めるからである。

第一次 真人は人のいない荒れ地でも楽しい。世人の楽しまないところにおいて、執着なき真人は楽しむであろう。かれらは快樂を求めるからである。

(口メノム)

G317：「聖者」を「真人」と書き換えておきます。

G318：愛著→執着→愛執（本書）と書き換えをしてしました。

全体：中村氏の注釈によると、インドには、日本で考える「林」というものが存在しないようで（本当かな？ いきなりジャングルになってしまふとかそういう話なのでしょうか？）、「い」でいう「林」は、「荒れた空き地」くらいの意味だそうです。ですから、「林」を「荒れ地」と書き換えます。

詠诵印 G319 (F338, C, O404, OS26) [[@ GS 23 真人]]

G319 在家者・出家者のいづれとも束縛の糸を作らず、住居に「だわらす」に修行し、愛欲の少ない人、—その人を吾は真人と呼ぶ。

元詩 在家者・出家者のいづれとも交らず、住家がなくて遍歴し、欲の少ない人、—かれをわれは「バラモン」と呼ぶ。

第一次 在家者・出家者のいづれとも不要に交らず、住居に「だわらす」に修行し、欲の少ない人、—その人を我はバラモンと呼ぶ。

(口メノム)

「在家者・出家者のいづれとも交ふべや」では、この世に生きている意味が半減しますので、「在家者・出家者のいづれとも束縛の糸を作らべず」としました。
「欲」→「愛欲」としました。

詠诵印 G320 (F271, C, O090, OS7) [[@ GS 23 真人]]

G320 (い)の世(や) 正しく生きて 涅槃(悟り)による解脱 に入った真人は、束縛の糸をのがれ 要いや悩みは存在しない。

元詩 すでに（人生の）旅路を終え、憂いをはなれ、あらゆる「ことがら」にくつろいで、あらゆる束縛の糸をのがれた人には、悩みは存在しない。

第一次 あらゆる束縛の糸をのがれ真人は、憂いや悩みは存在せず、生きていながら人生の苦を終える。

(口メノム)

詩の構成が正しくないため理解に苦しむ詩になつていましたので、言葉はそのまま利用して並び替えて書き換えました。この際、荻原雲来氏訳の法句経を参考にしました。

九〇 経べき途を已に過ぎ、憂を除き、一切に於て解脱し、一切の縛を斷てる人には苦惱あることなし。
真人やブツダでも、この世に存在するのであれば、人生の旅は終わっていないのです。人生の旅が終わっていない以上、なすべきことがあるはずです。

第一次 明らかな知慧の無い人には精神の安定統一が無い。

詠诵印 G321 (F272, B, O372, OS25) [[@ GS 23 真人]]

G321 精神の安定統一していない人には明らかな知慧が無い。

精神の安定統一と明らかな知慧とがそなわっている人は涅槃（悟りによる解脱）に入る。

元詩 明らかな知慧の無い人には精神の安定統一が無い。精神の安定統一していない人には明らかな知慧が無い。精神の安定統一と明らかな知慧とがそなわっている人こそ、すでにニルヴァーナの近くにいる。

第一次 明らかな知慧の無い人には精神の安定統一が無い。

精神の安定統一していない人には明らかな知慧が無い。

果報を受ける。

O357：田畠は雑草によつて害われ、この世は人々は怒りによつて害われる。これ故に怒りを離れた人々に供養して与えるならば、大いなる

O358：田畠は雑草によつて害われ、この世は人々は迷惑によつて害われる。それ故に迷惑を離れた人々に供養して与えるならば、大いなる

O359：田畠は雑草によつて害われ、この世は人々は欲求によつて害われる。それ故に欲求を離れた人々に供養して与えるならば、大いなる

果報を受ける。

一次　いの世の人々は、執着、怒り、誤った見解（迷惑）、疑惑、慢心によつて害われる。

怒り、執着、誤った見解、疑惑、慢心ともども断ち切り、さらに、無明を滅ぼした真人、—その人を我はブンダと呼ぶ。

(口メンソレ)

中村氏の注釈によると、

紐＝怒り、革帯＝愛執、網＝誤った見解、手綱＝潜んでいる煩惱、門＝無明

ですが、G159詩では「手綱＝怒り」となっています。「潜んでいる煩惱」とは見えにくい特徴があるので、綱ではなく紐（ひも）で「疑惑、慢心」と考えています。網＝誤った見解のままで行けば、本書では革帯＝愛欲（十愛執）と捉えます。また、「怒り」事態には正邪が混合しますので、「憎悪」を使用します。したがって、当方は、紐＝疑惑、慢心（潜んでいる煩惱）、革帯＝愛欲、網＝誤った見解、手綱＝憎悪、門＝無明と解釈します。比喩を用いるとわからぬので、これらの比喩は使用せず、具体的に記述します。

つまり、O356～O359をまとめて、「この世の人々は、憎悪、誤った見解、愛欲・愛執、疑惑、慢心、無明によつて害われる。」としました。なお、悪的執着の妄執のもとが愛執で、愛執のもとが愛欲なので、六汚れの「執着」の部分を「愛欲・愛執」としました。以上で、六汚れが揃いました。

詩番印　G333 (F276+F346+F344, C, O386+O386+O400, OS26) [[@ GS 23 真人]]

G333 慎みと禅定を完成させ、常になすべしとなし、汚れと汚れによる身体形成の絆を消滅させ、涅槃（悟りによる解脱）に達した真人を最後の身体に達したと詔す。その人を吾はブッダと呼ぶ。

元詩　O386 (F276, F346)：静かに思い、塵垢（チリケガレ）なく、おちついて、為すべきことをなしつげ、煩惱を去り、最高の目的を達した

人、—かれをわれは【バラモン】と呼ぶ。

O400 (F344)：怒むことなく、へつしみあり、戒律を奉じ、欲を増すことなく、身をとのえ、最後の身体に達した人、—かれをわれは【バラモン】と呼ぶ。

詩番印　G324 (F329, A, O399, OS26) [[@ GS 23 真人]]

G324 罪がないのに罵られ、なぐられ、拘禁されるのを堪え忍び、忍耐の力あり、心の猛き人、—その人を吾は真人と呼ぶ。

元詩　罪がないのに罵られ、なぐられ、拘禁されるのを堪え忍び、忍耐の力あり、心の猛き人、—かれをわれは【バラモン】と呼ぶ。

一次　罪がないのに罵られ、なぐられ、拘禁されるのを堪え忍び、忍耐の力あり、心の猛き人、—その人をわれはバラモンと呼ぶ。

(口メンソレ)

「かれを」→「やのん」、「われ」→「吾」、「バラモン」→「真人」とします。

詩番印　G325 (F327, C, O406, OS26) [[@ GS 23 真人]]

G325 敵意ある者との間にあつて敵意なく、暴力を用いる者との間にあつて心おだやかに、妄執する者との間にあつて妄執しない人、—執しない人、—その人を吾は真人と呼ぶ。

元詩　敵意ある者との間にあつて敵意なく、暴力を用いる者との間にあつて心おだやかに、執著する者との間にあつて執著しない人、—その人を我は【バラモン】と呼ぶ。

一次　敵意ある者との間にあつて敵意なく、暴力を用いる者との間にあつて心おだやかに、執著する者との間にあつて執著しない人、—その人を我はバラモンと呼ぶ。

(口メンソレ)

「暴力を用いる者との間にあつて心おだやかに」という表現に戻しました。

「執著」→「妄執」、「我」→「吾」、「バラモン」→「真人」としました。

G097～099 詩の3詩は、この詩とよく似た形式の詩です。

詩番印　G326 (F339, C, O405, OS26)’ G327(F340, A, O409, OS26) [[@ GS 23 真人]]

G326 強くあるいは弱い生きものに対しても暴力を加えるいわなく、無益な殺生を行ふいわも、行わせるいわもない人、—その人を吾は真人と呼ぶ。

元詩　強くあるいは弱い生きものに対して暴力を加えるいわなく、殺さずまた殺させぬいわのない人、—かれをわれは【バラモン】と呼ぶ。

一次　強くあるいは弱い生きものに対して暴力を加えるいわなく、無益な殺生を行ふいわも、行わせるいわもない人、—その人を我はバラモン

ム呼ぶ。

G327 ノの世において、長からうと短からうと、微細であろうとも粗大であろうとも、淨からうとも不淨であろうとも、すべて与えられていない物を取らない人、—その人を吾は真人と呼ぶ。

元詩、一次 ノの世において、長からうと短からうと、微細であろうとも粗大であろうとも、淨からうとも不淨であろうとも、すべて与えられない物を取らない人、—かれをわれはバラモンと呼ぶ。

(口メノト)

G327：暴力は、不当な武力と定義しました。全く、「生き物を殺さず殺せぬ」とのない」なんて無理ですから、無益にという言葉を付けておきます。

「かれをわれは【バラモン】→「その人を吾は真人」

詠番町 G328 (F325, C, O367, OS25) [[@ GS 23 修行僧]]

G328 名称とがたちに「わがもの」という想いが全く存在しない、何ものも無いからとて憂える」との無い人は、真人と呼ばれる。

元詩 名称とがたちについて「わがもの」という想いが全く存在しないで、何ものも無いからとて憂える」との無い人、—かれこそ【修行僧】と呼ばれる。

一次 名称とがたちについて「わがもの」という想いが全く存在しない、何ものも無いからとて憂える」との無い修行僧は、【バラモン】ムハバ

れる。

(口メノト)

ノの詩は真人のこととを語った詩ですか、「修行僧」→「真人」として書き換えます。

詠番町 G329 (F259, B, O089, OS6) [[@ GS 23 真人]]

G329 八正道により、心を正しくおさめ、妄執なく貪りを捨てたのを喜び、煩惱を滅ぼし尽くして輝く人は、現世において全く束縛から解きほ

ノ) われてノ。

一次 八正道により、心を正しくおさめ、執着なく貪りを捨てるのを喜び、煩惱を滅ぼし尽くして輝く人は、現世において全く束縛から解きほ

ノ) われてノ。

(口メノト)

「覚りのよすがに」→「八正道により」、執着→「妄執」に書き換えました。

詠番町 G330 (F273, C, O352, OS24) , **G331** (F274, C, O351, OS24) [[@ GS 23 真人]]

G330 愛欲を離れ、妄執なく、諸の語義に通じ諸の文章とその脈絡を知るならば、その人は最後の身体をたもつものであり、「大いなる知慧ある人」と呼ばれる。

元詩 愛欲を離れ、執著なく、諸の語義に通じ諸の文章とその脈絡を知るならば、その人は最後の身体をたもつものであり、「大いなる知慧ある人」と呼ばれる。

一次 執着をなくし欲望の激流を離れ、諸の語義に通じ諸の文章とその脈絡を知るならば、「大いなる知慧ある人」と呼ばれる。

G331 愛欲をなくし、汚れを滅ぼしつくした真人は、さとりの究極に達した人で、生存の矢を断ち切ったとなる。

元詩 もとりの究極に達し、恐れる」と無く、無欲で、わざらの無い人は、生存の矢を断ち切った。これが最後の身体である。

一次 執着をなくし、さらに、汚れを滅ぼしつくした真人は、さとりの究極に達した人で、生存の矢を断ち切ったとなる。

(口メノト)

OS24 愛執から移動しました。

O274：付録5で定義した言葉に置き換えました。み仏に近い真人の状態の特徴の一つが、「生存の矢を断ち切る」だと思っています。

詩番町 G332 (F277, A, O399+O356~359, OS26+OS24) [[@ GS 23 真人]]

G332 ノの世の人々は、憎悪、誤った見解、愛欲・愛執、疑惑、慢心、無明によって害われる。

元詩 憎悪、誤った見解、愛欲・愛執、疑惑、慢心を消滅させ、さらに、無明を滅ぼした真人—その人を吾はブッダと呼ぶ。

O398：紐と革帶と網などを、手網ともども断ち切り、門をノギヤ開(カンヌキ)を滅ぼして、めざめた人、—かれをわれは【バラモン】と呼ぶ。

O356：田畑は雑草によつて害われ、ノの世は人々は愛欲によつて害われる。それ故に愛欲を離れた人々に供養して与えるならば、大いなる

一次 すべての束縛を断ち切り、恐れる」となく、執着を超越して、といわれる」との無い人、—その人を我はブッダと呼ぶ。

G340 ノの障害・険道・輪廻（サマヨイ）・迷妄を超えて、渡り終わって彼岸に達し、禪定・熟考し、興奮する」となく、疑惑な
く、妄執する」となくして、心穏やかな人、—その人を吾はブッダと呼ぶ。

元詩 ノの障害・険道・輪廻（サマヨイ）・迷妄を超えて、渡り終わって彼岸に達し、瞑想し、興奮する」となく、疑惑なく、執著する」となくして、心安らかな人、—かれを吾は【バラモン】と呼ぶ。

一次 ノの障害・険道・輪廻（サマヨイ）・迷妄を超えて、渡り終わって彼岸に達し、瞑想・熟考し、興奮する」となく、疑惑なく、執着する」となくして、心安らかな人、—その人を我はブッダと呼ぶ。

(口メノム)

OS26 バラモンの章から移動しました。

「かれをわれは【バラモン】」を「その人を吾はブッダ」と変更しました。

G338：「最後の目的を達した人」を「禪定を完成させ涅槃（悟りによる解脱）に入りし人」と書き換えました。

G339：「断ち切り」→「放たれ」としました。

G340：「瞑想」→「禪定」、「執着」→「妄執」としました。

詔勅 **G341** (F347, A, O353, OS24) [[@ GS 24 ブッダ]]

G341 我はすべてに打ち勝ち、やぐてを知り、あらゆる」とがらに闇して汚されていない。すべてを捨てて、愛欲は尽きたので、ノハルは解脱している。みずからやつたのであって、誰を(師と)呼ばうか。(「その我とは何ぞや、釈迦よ、答へよ。」)

元詩 われはすべてに打ち勝ち、すべてを知り、あらゆる」とがらに闇して汚されていない。すべてを捨てて、愛欲は尽きたので、ノハルは解脱している。みずからやつたのであって、誰を(師と)呼ばうか。

一次 我は全てに打ち勝ち、全てを知り、あらゆる」とがらに闇して汚されていない。全ての執着を捨てて、汚れが尽き、心は解脱している。
山川河川のあつたのであって、誰を(師と)呼ばうか。

(口メノム)

OS24 愛執から移動。

最初にノの詩文を反語用法「～であるうか? (いや、～でない。)」で書かれていると捉えていました。しかし、今となつてはお釈迦様の中の「我」が発した詩に対しても()内が本守護神様が正守護神に対して問い合わせてお答えになつてゐるのではないかと考えています。

一 次 F276：慎みを完成させ、塵汚れ（チリケガレ）なく、常に為すべき」とをなし、解脱に達した真人、—その人を我はブッダと呼ぶ。

F346：怠い静かで、塵垢（チリケガレ）なく、常に為すべき」とをなし、最高の目的である解脱に達した人、—かれをわれはブッダと呼ぶ。

F344：慎みと瞑想を完成させ、汚れを消滅させて最後の身体に達したバラモン、—その人をわれはブッダと呼ぶ。

(口メノム)

「再考 真理のノハル ver. 1」やざ F276' F346 詩は、元詩がじかにもO386 詩や、それぞれFS20真人とFS24 バラモンに配置してあります。当方の単純ノハル。O400 (F344) 詩も合わせても回シルを唱えていると考えられるので、一つの詩にまとめ、真人の節に配置します。

「かれをわれは」→「その人を吾は」に変更しました。

詔勅 **G334** (F345, C, O385, OS26) [[@ GS 23 真人]]

G334 彼岸（カナタノキシ）もなく、此岸（コナタノキシ）もなく、恐れもなく、束縛もない真人、—その人を吾はブッダと呼ぶ。

元詩 彼岸（カナタノキシ）もなく、此岸（コナタノキシ）もなく、彼岸・此岸なるものもなく、恐れもなく、束縛もない人、—かれをわれはバラモンと呼ぶ。

一次 彼岸（カナタノキシ）もなく、此岸（コナタノキシ）もなく、恐れもなく、束縛もないバラモン、—その人をわれはブッダと呼ぶ。

(口メノム)

「かれをわれは」→「汝の人を吾は」に変更しました。

詔勅 **G335** (F261, B, O097, OS7) [[@ GS 23 真人]]

G335 作られたもの—既存の信仰や神を軽信する」となく、作られざるもの—法を知り、生死の絆を断ち、(善惡をなすに)よしなく、欲求を捨て去つた人 もののかを信ずることなく、作られざるもの(ニルヴァーナ)を知り、生死の絆を断ち、(善惡をなすに)よしなく、欲求を捨て去つた人 一かれこそ実に最上の人である。

一次 作られたもの—既存の信仰や神を軽信する」となく、作られざるもの—法を知り、生死の絆が絶たれ、善惡の計らい、もろもろの欲求 から離れた人、彼こそ実に最上の人、真人である。

(口メノム)

「作られたるもの」には、神々や人々が作ったものではなく、この世の元から厳然と存在しているもので、誰も変更できない法（真理）の事と考えられます。

「何ものかを信ずる」となく」は、次の「作られたもの」と対応した句ですから、「何ものか=作られたもの」となるでしょう。これらは作られたものですから、既存の宗教、信仰や教え、教育、つまり「色」の産物ということになります。これらへの軽信を警戒せよといふ教えでしょ。

「欲求」→「情欲」へしました。

「人一かれいそ実に最上の人である」を「真人一その人を吾はブッダと呼ぶ。」へしました。

詩韻叩 G336 (F275, A, O421+348, OS26+24) [[@ GS 23 真人]]

G336 現在、過去、未来の全ての汚れを精算せよ。

その様な人を生存の彼岸に達したという。

その様な人は覚醒していて、もはや汚れによる生れと老いとを受ける」とが無いであろう。

そして、現在、過去、未来の全てのものを認識するであろう。

— その真人を吾はブッダと呼ぶ。

一次 現在、過去、未来の全ての汚れを離れよ。

その様な人を生存の彼岸に達した人は、あらゆる」とがらについて心が解脱する」とだと思つので、「解脱していく」と置き換へ

ます。

「所有しない」という言葉が、真理の」とばにはよく出でますが、お釈迦様は、正当な所有を禁じるような妙な教えをしたはずはありません。

「生存の彼岸に達する」は、「付録3 (3) 仏道の目標」を参照ください。

— その真人を吾はブッダと呼ぶ。

(口メノム)

O348 も O421 は、構造が似ており、合わせて一つにした方が、理解しやすくなると考えます。

「前、後、中間」という比喩表現を、「現在、過去、未来」と直接表現に置き換えます。

「あらゆる」とが、心が解脱するのではなく、その人が解脱する」とだと思つので、「解脱していく」と置き換へ

ます。

「所有しない」という言葉が、真理の」とばにはよく出でますが、お釈迦様は、正当な所有を禁じるような妙な教えをしたはずはありません。

「生存の彼岸に達する」は、「付録3 (3) 仏道の目標」を参照ください。

GS 24 節 ブッダ

詩韻叩 G337 (F350, A, O387, OS26) [[@ GS 24 ブッダ]]

G337 太陽は昼にかがやき、月は夜に照し、武士は鎧を着てかがやき、真人は禪定に専念してかがやく。しかしブッダはつねに威力もて昼夜に輝く。

元詩 一次 太陽は昼にかがやき、月は夜に照し、武士は鎧を着てかがやき、バラモンは瞑想に専念してかがやく。しかしブッダはつねに威力もて昼夜に輝く。

(口メノム)

「バラモンは瞑想」を「真人は禪定」へ変更しました。

詩韻叩 G338 (F351, C, O403, OS26) ' **G339** (F352, C, O397, OS26)' **G340** (F353, C, O414, OS26) [[@ GS 24 ブッダ]]

G338 明らかな知慧が深く、聰明で、種々の道に通達し、禅定を完成させ涅槃（悟りによる解脱）に入らし人、— その人を吾はブッダと呼ぶ。

元詩 明らかな知慧が深くて、聰明で、種々の道に通達し、最後の目的を達した人、— その人を吾はブッダと呼ぶ。

G339 すべての束縛から放たれ、恐れる」となく、執着を超越して、どうわれぬとの無い人、— その人を吾はブッダと呼ぶ。

元詩 すべての束縛を断ち切り、恐れる」となく、執著を超越して、どうわれぬとの無い人、— かれを吾は【バラモン】と呼ぶ。

開示し。G350：「歡樂の生活の尽きた人」を削除

詩番印 G351 (F354, C, O417, OS26)’ G352 (F355, C, O418, OS26)’ G353 (F356, C, O419, OS26)’ G354 (F357, C, O420, OS26)’ G355 (F358, C, O422, OS26)’ G356 (F359, C, O423, OS26) [[@ GS 24 ブッダ]]

G351 人間の絆を越え、天界の絆を越え、すべての絆を越えた人、—その人を吾はブッダと呼ぶ。

元詰 人間の絆を捨て、天界の絆を越え、すべての絆をはなれた人、—かれをわれは【バラモン】と呼ぶ。

一次 人間の絆を越え、天界の絆を越え、すべての絆を越えた人、—その人を吾はブッダと呼ぶ。

G352 【快樂】と【不快】にとらわれる」となく、清らかに涼しく、苦楽にうち勝った英雄、—その人を吾はブッダと呼ぶ。

元詰 【快樂】と【不快】とを捨て、清らかに涼しく、とらわれる」となく、全世界にうち勝った英雄、—かれをわれは【バラモン】と呼ぶ。

一次 【快樂】にとらわれる」となく、清らかに涼しく、全世界にうち勝った英雄、—その人を吾はブッダと呼ぶ。

G353 生きとし生ける者の生死をすべて知り、執著なく、よく生きし人、覚った人、—その人を吾はブッダと呼ぶ。

元詰 生きとし生ける者の生死をすべて知り、執著なく、よく生きし人、覚った人、—その人を吾はブッダと呼ぶ。

一次 生きとし生ける者の生死をすべて知り、執著なく、良く生きし人、覚った人、—その人を吾はブッダと呼ぶ。

G354 神々も天の伎楽神（ガンダルヴァ）たちも人間もその行方を知り得ない人、煩惱の汚れを滅ぼしつくした人、—その人を吾はブッダと呼ぶ。

元詰 神々も天の伎楽神（ガンダルヴァ）たちも人間もその行方を知り得ない人、煩惱の汚れを滅ぼしつくした人、—かれをわれは【バラモン】と呼ぶ。

一次 神々も天の伎楽神（ガンダルヴァ）たちも人間もその行方を知り得ない人、煩惱の汚れを滅ぼしつくした人、—その人を吾はブッダと呼ぶ。

G355 牡牛のように雄々しく、気高く、英雄・勝利者・汚れの無い人・解脱者—その人を吾はブッダと呼ぶ。

元詰 牡牛のように雄々しく、気高く、英雄・大仙人・勝利者・欲望の無い人・沐浴者・覚った人（ブッダ）—かれをわれは【バラモン】と呼ぶ。

一次 牡牛のように雄々しく、気高く、英雄・勝利者・汚れの無い人・解脱者—その人を吾はブッダと呼ぶ。

まず、この詩は全体的に傲慢な感じがします。

一度、真理を教示してくれた人を頼ることはだめでも師として敬愛の念を持つことが徳や誠というものです。

次に、色々な関係や出来事から悟るのであって、それを鑑みたときに「みずから悟る」という言葉は出てきません。

最後に、お釈迦様の教えは和を大切にする教えで、「勝敗を議論する」とを完全に否定する教えです。

これに対して、指導なさる本守護神様が問い合わせで気つかせようとなさっています。さて、お釈迦様はどうにお答えになつたのでしょうか？ これが、皆様にとっても最終試験なのかも知れません。

ここまで書いてきて、当方は最終的な師は「法（真理）」であるのではないか？ と思うようになりました。

「自燈明 法燈明」の言葉の捉え方なのですが、「おのぞと（自然にそいに）ある灯（あか）りが、法の灯りですよ。誰の近くにも自然とあるんですよ。」という意味であって、「自分を拠り所にしなさい。」つまり、「法=自分」という強烈に傲慢な意味になりかねない捉え方

は、全く平和を説うことなどできないと思い至るのです。

以下に当方がお釈迦様だったと思ひ、返歌を書き記しました。塗様も自身でお考えください。

G343 の返歌 吾は、全ての愛欲を消滅させ、汚れが尽き、涅槃（悟りによる解脱）を得た。これからは法を頼りとし生きし生けるものを慈しみ生きてこい。

詩番印 G342 (F348, C, O179, OS14)’ G343 (F349, A, O180, OS14) [[@ GS 24 ブッダ]]

G342 ブッダの勝利は敗れることがない。この世においては何人も、かれの勝利には達しえない。ブッダの勝利には達しえない。ブッダの境地はひらくて涯しない。足跡をもたないブッダを、いかなる道によつて誘い得るであろうか？

一次 ブッダの勝利は敗れることがない。この世においては何人も、かれの勝利には達しえない。ブッダの境地はひらくて涯しない。足跡をもたないブッダを、いかなる道によつて誘い得るであろうか？

元詰 ブッダの勝利は敗れることがない。この世においては何人も、かれの勝利には達しえない。ブッダの境地はひらくて涯しない。足跡をもたないブッダを、いかなる道によつて誘い得るであろうか？

一次 ブッダの勝利は敗れることがない。この世においては何人も、かれの勝利には達しえない。ブッダの境地はひらくて涯しない。足跡をもたないブッダを、いかなる道によつて誘い得るであろうか？

G343 誘なうために網のようからみつき執着をなす妄執は、ブッダにはないにも存在しない。ブッダの境地は、ひらくて涯しない。足跡をもたないブッダを、いかなる道によつて誘い得るであろうか？

(まあ、答えよ、釈迦よ。)

元詩 誘なうために網のようにならみつき執着をなす妄執は、かれにはないにも存在しない。ブッダの境地は、ひらくて涯しがない。足跡をもたないかれないを、いかなる道によつて誘い得るであろうか？

一次 誘なうために網のようにならみつく執着は、その人にはないにも存在しない。ブッダの境地は、ひらくて涯しがない。足跡をもたないかれる、いかなる道によつて誘い得るであろうか？

(口メソーム)

いの二詩とも「かれ」は男性に対する人称になりますので、全て「ブッダ」に置き換えました。「ブッダ」と言ふとも、法（真理）に従わねばならない存在だと思われ、やはり拵り所は法（真理）となるのではないでしようか？「い」が理解であっているか否かが、み仏と人間の最終的課題のような気がします。以下に当方でお釈迦様たつたらと思、返歌を書き記しました。皆様も自身でお考えください。

G342 の返歌 いの世においてはブッダが最高の存在なのや、いの世で敗れるいはなし。いの世でブッダを誘うのは法

(真理)であり、しかし、ブッダがこの世において邪道にいわなれねいはなし。いの世でハシタをこわなえるのは法（真理）であり、そして、ブッダがいの世で法をおわ。^Q

誌袖叩 G344 (F262, C, O401, OS26), G345 (F263, C, O407, OS26), G346 (F264, C, O412, OS26), G347 (F265, C, O411, OS26), G348 (F266, C, O410, OS26), G349 (F267, C, O402, OS26), G350 (F268, C, O413, OS26) [[@ GS 24 ブッダ]]

G344 蓮葉の上の露のよへど、錐（キリ）の尖（サキ）の芥子のよへど、緒の情欲に汚されない人、— その人を吾はブッダと呼ぶ。

元詩 蓮葉の上の露のよへど、錐（キリ）の尖（サキ）の芥子のよへど、緒の欲情に汚されない人、— かれをわれは【バラモン】と呼ぶ。

一次 蓮葉の上の露のよへど、錐（キリ）の尖（サキ）の芥子のよへど、緒の欲望に汚されない人、— その人を吾はブッダと呼ぶ。

G345 芥子粒が錐（キリ）の尖端から落ちたよへど、愛欲と憎悪と高ぶりと隠し立てとが脱落した人、— その人を吾はブッダと呼ぶ。

元詩 芥子粒が錐（キリ）の尖端から落ちたよへど、愛者と憎悪と高ぶりと隠し立てとが脱落した人、— かれをわれは【バラモン】と呼ぶ。

一次 芥子粒が錐（キリ）の尖端から落ちたよへど、執着と怒りと高ぶりと隠し立てとが脱落した人、— その人を吾は真人と呼ぶ。

G346 いの世の禍福いづれにも執著するいとなく、憂いなく、清らかな人、— その人を吾は真人と呼ぶ。

元詩 いの世の禍福いづれにも執著するいとなく、憂いなく、汚れなく、清らかな人、— かれをわれは【バラモン】と呼ぶ。

一次 いの世の禍福いづれにも執著するいとなく、憂いなく、汚れなく、清らかな人、— かれをわれは【バラモン】と呼ぶ。

元詩 いの世の禍福いづれにも執著するいとなく、憂いなく、汚れなく、清らかな人、— かれをわれは【バラモン】と呼ぶ。

一次 いの世の禍福いづれにも執著するいとなく、憂いなく、汚れなく、清らかな人、— かれをわれは【バラモン】と呼ぶ。

G348 いの世でもあるの世でも、妄執を抱かず、意を慎み、束縛を持たない人、— その人を吾はブッダと呼ぶ。

元詩 現世を望まず、来世をも望まず、欲求がなくて、といわれの無い人、— かれをわれは【バラモン】と呼ぶ。

一次 現世を望まず、来世をも望まず、欲求がなくて、といわれの無い人、— かれをわれは【バラモン】と呼ぶ。

G349 あぢないの世において自分の苦しみの滅びたいとを知り、重荷をおぬし、といわれの無い人、— その人を吾はブッダと呼ぶ。

元詩 すでにいの世において自分の苦しみの滅びたとを知り、重荷をおぬし、といわれの無い人、— かれをわれは【バラモン】と呼ぶ。

G350 暈りのない月のように、清く、澄み、濁りがなくなつた人、— その人を吾はブッダと呼ぶ。

元詩 暈りのない月のように、清く、澄み、濁りがなく、歎樂の生活の尽きた人、— かれをわれは【バラモン】と呼ぶ。

一次 暈りのない月のように、清く、澄み、濁りがなくなつた人、— かれをわれは【バラモン】と呼ぶ。

(口メソーム)
いわば、比喩を用ひながら対象を賛美する賛美詩です。
「かれをわれは【バラモン】」→「その人を吾はブッダ」&書物換えていまや。
G344: 情欲→欲望→情欲
G345: 愛著→執着→愛欲、憎惡→怒り→憎惡
G346: 「執著することなく、憂いなく、汚れなく、清らかな人」→「妄執するいとなく、憂いなく、清らかな人」
G347: 「さとりおわって」を削除
G348: 立花俊道氏訳の法句經を参考にしました。410此の世にも彼の世にも、欲望あるなく、意樂なく、繫縛を離れたる、我は之を婆羅

一靈四魂についての説明は、個性認識学（<https://4soul.jp/ichireishikon/>）さんからの引用をわせていただきます。

私は、四つの魂とそれを統御する一つの靈から成り立っています。四つとは、荒魂、和魂、幸魂、奇魂であり、一靈は直靈（直毘）という神様の名前がついています。荒魂の働きは「勇」で前進する力、和魂の働きは「親」で調和する力、幸魂の働きは「愛」で愛し育てる力、奇魂の働きは智で真理を探求する力です。…

補足すると、靈界物語では、直靈（なおい）は直日（なおい）と書かれています。
私は、以前は一靈四魂を荒唐無稽かなと感じたので、この記事でも参考引用はしませんでしたが、時間が経った現在では、経験として素晴らしい概念（事実！？）だと思い至り、本書で取り入れることとしました。

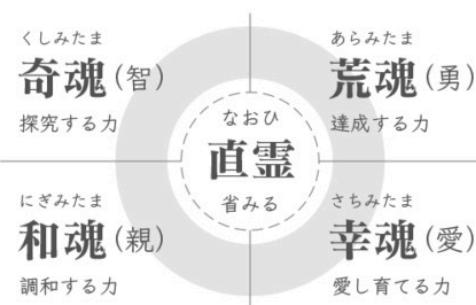
2-2 守護神

前回は、本守護神様十正副守護神様については、資料に載せた「一一三神示冬の卷第1帖」を参考にしていました。その後、靈界物語を読み初め、「人間の靈的システム」について、もう少しあらましを掘り始めましたので、守護神様についても、新たな情報を附加して書き改めました。

まず、本守護神様と正守護神様と副守護神様について、参考にした靈界物語の記述を下記に列挙します。

- ・直日の御靈は本守護神である。
(靈界物語 第6巻 第6篇 百舌鳥の囁 第36章 三五教より)
- ・本守護神と正守護神と副守護神は、自分が宿っている人間を見ることがない。
なぜならば、それらの知覚世界は精靈界であり、この世の中は見れなくなっている。
(靈界物語 第47巻 第3篇 天国巡覧 第12章 天界行より)
- ・人間の本体である精靈である三つの守護神は人間の体の中に入っていて、相共に居ることは少しも知らない。

日本古来の心の考え方 『一靈四魂』



直靈が4つの魂を統括し、省みることで人格が発達する。

図2 一靈四魂

- G356 前世の生涯を知り、また天上と地獄とを見、生存を滅ぼしつくすに至つて、直觀智を完成した聖者、完成すべきことをするべて完成した人、—その人を吾はブッダと呼ぶ。
- 元詩 前世の生涯を知り、また天上と地獄とを見、生存を滅ぼしつくすに至つて、直觀智を完成した聖者、完成すべきことをするべて完成した人、—かれをわれは「バラモン」と呼ぶ。
- 一次 前世の生涯を知り、また天上と地獄とを見、生存を滅ぼしつくすに至つて、直觀智を完成した聖者、完成すべきことをするべて完成した人、—その人を我はブッダと呼ぶ。

(コメント)

共通 「かれをわれは「バラモン」と呼ぶ。」を「その人を吾はブッダと呼ぶ。」と書き換えます。

G351：「捨て」、「越え」、「離れ」と表現を変える意味がよくわかりませんので、全て「越える」とします。

G352：詩中の「とらわれる」対象がわかりませんので、「快樂と不快とにらわれない」と、対象を明記して、文章を整えました。「全世界にうち勝つ」ではなく、「苦樂に打ち勝つ」としました。

G353：「よく行きし人」の意味がわかりませんので、「よく生きし人」とします。

G355：大仙人、沐浴者を削除。欲望のない人→汚れない人、さとった人（ブッダ）→解脱者と書き換えました。

第4部 付録

付録1 魂と脳と守護霊 最終版—リプレイス

1節 はじめに

一〇一〇年九月二十九日記す。

いは、<https://newbuddhawords.blogspot.com/2018/11/blog-post.html>に載せた記事のリプレイス版であり、同時に再考「真理のことば」ver.1の付録1のリプレイス版です。この記事は過去の内容も今は含んでいますので、初見の方は過去の記事を参照する必要はありません。

本書では、心について大幅な変更をしました。

前回の定義 (1) .. 心||顕在意識+潜在意識

を新定義²とし、もう一方の

魂の定義 (1) .. 魂(=自己)=心(=自分)+DNA1+DNA2

は撤回し、「靈四魂を取り入れて新定義(1)を構築しました(後述)」。変更の概要は、魂は心を構成するものとし、前回の「魂は心より上に位置する」という解釈をしましたが、本書では、魂が心を構成する、つまり両者は対等の存在になったことです。この変更により、脳機能を多少拡張しましたが、全体的に変更点は少なく、話がすっきりと流れ読みやすくなりました。

二〇一九年二月十九日記す。

私がマシューさんに、「人間の魂と身体、また、守護霊と言われる方との関係をはつきりとさせてみてはどうですか?自分と自分の先祖のことについても、あなたは先祖と自分を切り離して考えているところがありますが、それは甚大な誤解なのですよ。」と言われて、2017年6月19日現在すでに一年以上が経っています。私自身も、自分と先祖、身体を持たないバックアップしている存在との関係には強い興味を持つていました。そこで、二つの命題

- 人間の魂と心とは何か?
- 人間の身体と心の繋がりはあるのか、否、あるのは確実ですが、どういう関係なのか?

を立てました。壮大な命題であると同時に、現在の人間の科学では、残念ながら、証明は不可能です。したがって、この記事も科学的バックアップは受けられないでしょう。でも、腑に落ちる説というものを、私の審神者を使つた上で、情報を集め、考えをまとめてみたいと思つた次第です。なせならば、今後生きていく私たちが有意義な人生を送るための情報になると確信したからです。さらに、重大な病気で苦しんでいる方々にとつても有益ではないかと考えたのです。

でも、半年くらい思索を続けた2017年9月あたりに、「とても大変な課題に手を出してしまった。」と、かなり後悔した時期がありました。審神者を行い、ネットで色々調べても、誰も答えが出せないのを良い事に、似て非なるような説が飛び交う世界が広がっているではありませんか。悪魔の広めている情報を拾い集めながら正しいものを考へるという作業は、審神者を使う私にとっては、神経に与えるダメージがとても強いのです。「なかつたことに。」なんて思つたこともありますが、マシューさんはきっとアメリカ上空でこのネットを見ていてると思うと…。「まだ宿題、終わつてないよ」つて、お声が聞こえる私でした。

しかし、当時、並行して「真理のことば」の読み直しを始めました。その時に、達成するためには、変じ改めるべし、いろいろな情報(山)を重ね合わせて、正しいもの(お釈迦様の教えとマシューさんからの宿題の解)との出会いをする時期なのだというご託宣が降りました。

「真理のことば」を変じ改めるためには、どうしても、マシューさんからの宿題の解が必要であることに気づき、これらが別立てで存在しているのではなく、同じ源から発生している事を理解しました。上記の命題の解を考えるためにあたつて、情報を細かく調べて吟味し、熟考しますが、核は審神者の情報になりました。

2節 人間の靈的システム

2-1 一靈四魂

心とは、魂が凝(こ)っているものという意味から来ているそうです。そして魂は、「鬼の云うことが聞けるもの」で、こいで「云う」は、「言う」と異なり、単なる伝聞を、また、「鬼」とは、「隠れた存在」を意味するのだそうです。実は、神道ではオニは神様でもあり邪鬼でもあって、われわれが思い浮かべる邪鬼と同時に正反対の善神的な存在も指すようです。つまり、魂とは、神様の御託宣もしくは邪鬼(悪魔)のささやきを私たちに届けてくれる存在と言うことです。

魂が凝っている心という捉え方は、神道の一靈四魂という教えに非常に似ています(図2参照)。私は江戸時代後期の比較的新しい教えだと思っていましたが、日本書紀の大國主尊と少彦名尊の物語にも出てくる古来からの日本の叡智とされているようですが。

次に、肉体本体を作り出すDNAについて考えます。資料の一三三神示では「人間の肉体は想念の最外部、最底部をなすものではあるから肉体的動きの以前に於て靈的動きが必ずあるのであるぞ」と記されています。体はDNAによって、設計されています。」これは先祖から受け継いだものが多いでしょう。

また、DNAは体质を決めるDNAと、働きが全くわからないDNAがあることがわかつています。前者は数パーセントしかないのですから、働きがわからないDNAの多さにびっくりします。」これは2-4で記した脳細胞の構成と似ています。」

- DNA1：三次元の肉体を設計する（体の丈夫さ、運動神経、頭の良し悪しなど）

- DNA2：いまだに役割が特定できていないもの

に分類しましよう。私は、資料の一三三神示の情報から、神様や先祖様からの指令やその人の元来の性格や考え方の癖などは、DNA2に情報があるのではないかと考えています。したがつて、DNA2は、常に心と情報をやり取りしていて、実は心の記憶装置（ハードディスク）として働いているのではないかと考えています。ただ、もちろん顕在意識とのやりとりではなく、顕在意識には現れないと考えています。

一方、DNA1も身体の作り方を記憶しているので、「ちゃんと身体設計用の記憶装置と捉えることができます。」ちゃんと顕在意識が認識する」とはしないでしよう。いずれにしても、DNAは心身が必要とする情報を格納する役割があると考えられます。

3節 人間システムの維持

3-1 情報伝達

身体の各器官が何らかの情報を受けた時、その器官から脳に送られた情報は脳で翻訳され心に伝達されます。その対応策は心で各魂や守護神により会議決定され、その情報を脳に返送し、脳が翻訳して身体の隅々に働きを命じて、私たちの生活が成り立っています。脳は、顕在意識としても意識されない潜在情報も情報処理をしているので、想像以上に沢山の情報処理をしているようです。

例えば、体調不良を認識しないまま、完治するなどと言つ」とは日常茶飯事ですから、」ののような場合は、潜在意識のみで脳を通して身体の各器官に対応策が送られている結果でしよう。

身体の器官・末端の細胞が受信する情報は、外界の音や映像などの五感情報だけではなく、靈的な働きかけの情報もあるようです。その一例としては、外部靈の認知でしょう。これらは、人によりますが、身体のどこかで受け取り、その情報は潜在的に脳を

- 本守護神は天靈、正守護神は善靈、副守護神は惡靈である。
(靈界物語 第47巻 第3篇 天国巡覧 第12章 天界行より)
- 副守護神は人間の記憶・想念の中にある悪しき事物の間に潜入する。
(靈界物語 第47巻 第3篇 天国巡覧 第12章 天界行より)
- 正守護神は善き事物の間に侵入する。
(靈界物語 第47巻 第3篇 天国巡覧 第12章 天界行より)
- 守護神たちは、人間の記憶や想念を自分たちのものだとしんじている。
(靈界物語 第47巻 第3篇 天国巡覧 第12章 天界行より)
- 欲は四魂の働きの遂行から生じる。

(3) より、守護神と言われるものは精靈と言われる存在で、実はその宿主である人間を認知しておらず、心で共有されている記憶や想念を認識しているようです。一三三神示では本守護神様も正守護神様も、実は、それぞれ神界と靈界の自分であると説かれています。このことから、「真理の」とば」「己」と呼ばれるものは、本守護神様（ハイヤーセルフ）と正守護神様（セルフ）だと考えています。

2.3 心

人間の心を作っているのは、ベースとして一靈四魂であるという説を前章で記しました。ただ2-5で後述しますが、本守護神様は、少し離れて心や人間本体を見守っている様に私は感じています。心には正守護神様と副守護神様が(5)や(6)のように潜伏なさっています。つまり、心は

- 心＝（一靈）四魂十正守護神様十副守護神様（新定義1）

となっています。すると考えられるのです（図3参照）。

そして、四魂が持つている記憶や想念（欲も含む）を、心でみんなが共有するというシステムのようです。そして、四魂こそが体现された三次元の自分に最も近いのだろうと思います。今、人が問題に直面したと心が判断した時に、凝り固まつた存在（魂or精靈）たちが自分のことのように親身になつて解決するためのアドバイスをします。その時、一番権限があるのは、理想的には正守護神で、このような時には、善意に根差した常識的な判断がなされます。しかし、ここで副守護神が権限を持つてしまうと、とにかく心から割り出される解決策や対応が悪となつて現れます。

正守護神様が上手に働いている良いスパイアルでは、四魂には滋養が行き渡り、心に新たな善を植え付けることができます。このことを「心を整える」と表しているのでしょうか。これを推し進めることにより、セルフ（自己）である本守護神様や正守護神様が守られ、その力の発動が容易になり人間から真人（神人）となれるのでしょうか。

本守護神様は、正守護神様が靈界から一段上に上がった神界へ移行できるように指導していらっしゃると同時に、副守護神様が悪魔的振る舞いを悔い改めるように指導していらっしゃるのでしょう。正守護神様が神界に近づいた時に、その人は真人となり、完全に神界に入ってしまえばブッダ（自覚めた人）になるのではないのでしょうか。四魂に直接的に働きかけるのは正副守護神様方でしよう。

反対に悪いスパイアルは四魂を壊していく力があります。その行き着く先は、心が悪だらけになり四魂が劣化し、副守護神の言いなり、つまり人間が悪魔の容れ物となります。本守護神様は、だいぶ位が高いので悪に引きずり込まれることはない様ですが、酷い場合は正守護神様も道連れにして悪魔にしてしまいます。

2-4 心臓と脳

脳と心臓についての自分の考察のきっかけは、「資料4 人型図上の指によるエネルギー測定の試行」で、この考察から

- ・脳の働きは、心で割り出した対応方法を三次元に焼き直し身体の各器官に命令し、また、外界の情報を心が理解できるように翻訳する装置で、コンピューターで言えばCPUにあたる部分
- ・心は心臓にいると主張する資料2は妥当

だと私は考えています。

ここで、脳を通して心からの情報が認識されうるもの（顕在）意識と言えば、（顕在）意識は主に脳にあると言つて良いと思います。また、意識として現れない心（凝った魂..文献1のアートマン）を潜在意識とすれば、心は顕在意識と潜在意識からなると考えても良いと思います。つまり、

心＝顕在意識＋潜在意識（新定義2）

です。（新定義2）は、（新定義1）を否定するものではなく、心の見方を変えて定義を変えただけのことです。顕在意識が潜在意識で、脳の上に出てきたものですが、はつきりと線を引いて分けることは難しいでしょう。（新定義2）に関しては「資料3 中村元氏の心と意に関する記述」も参照してください。

ただし、脳は必ずしも顕在意識的な状況のみではなく、潜在意識から発せられる情報の翻訳も行っているようです。不随意筋など記します。

本文中の「心」については、考察した上で「意」に置き換えた部分がありますが、「意」は顕在意識のこととしました（後述の資料3を参照ください）。というのも、「心」より「意」の方が、人間にとつては制御しやすいと判断したからです。

2-5 丹田

本守護神様の直日（なおい）様は、正守護神様や副守護神様が心の中にいらっしゃるのとは異なり、少し離れたところから心全体を見てらっしゃるようです。そして、場所としては下つ腹の丹田あたりから心を観察していらっしゃるようで、私の予想としては、三次元の人間本体の状況もよく見てらっしゃると思います。したがって、下つ腹に意識を集中して、自分の心や行動を省みることにより、直日様からのアドバイスが自分の内部から湧き上がり、伝わるようです。ですから、禪定（瞑想）を行う時に、丹田に意識を集中するのは、禅定のいろはなのでしょう。

また、本守護神様はとても力のある善神様なので状況の改善が図られることもありますが、それが奇跡的には見えないのが特徴だと、一二三神示では記されています。また、本守護神様は、平常運転時にはご発動なさることではなく、何か危機的な状況や非常に重要な局面でご発動なさるようです。

実は、本当に重要なことは資料2で記されたハート（心臓）に聞くのも有効ですが、心臓部分を落ち着けて（すなわち心を落ち着けて）反省しながら、下つ腹に意識を集中して考えることが有意義だと思います。また、脳（器官）と心臓（心）の連絡は、物理的に神経細胞が介しているようですが、下つ腹と心臓の間は、両端が靈なのでテレパシーのような別的情報伝達手法がメインではないかと思っています。

「はじめに」で述べた2つの命題の結論は、

- ・「人間の魂と心とは何か?」

→人間の心は魂が寄り集まつたもの

↓心=一靈四魂+正守護神+副守護神（新定義1）

↓心=頸在意識+潛在意識（新定義2）

- ・「人間の身体と心の繋がりはあるのか、否、あるのは確実ですが、どういう関係なのか？」

→図3に守護神と魂とDNAと外部靈の情報伝達としてまとめました。

です。

皆様、お付き合いいただきありがとうございました。マショーセン、長い間、見守りいただき、ありがとうございました。2020/10/1
(合掌)

資料1 一二三神示 第30卷冬の巻第一帖

宇宙は靈の靈と物質とからなつてゐるぞ。人間も又同様であるぞ。宇宙にあるものは皆人間であり。人間にあるものは皆宇宙にあるぞ。人間は小宇宙と申して、神のヒナガタと申してあらう。人間には物質界を感知するためには五官器があるぞ。靈界を感知するために超五官器あるぞ。神界は五官と超五官と和して知り得るのであるぞ。この点誤るなよ。靈的自分を正守護神と申し、神的自分を本守護神と申すぞ。幽界的自分が副守護神ぢや。本守護神は大神の歡喜であるぞ。神と靈は一つであつて、幽と現、合せて三ぞ。この三は三にして一、一にして二、二にして三であるぞ。故に肉体のみの自分もなければ靈だけの自分もない。神界から真直ぐに感應する想念を正流と申す。幽界を経て又幽界より来る想念を外流と申すぞ。人間の肉体は想念の最外部、最底部をなすものであるから肉体的動きの以前に於て靈的動きが必ずあるのであるぞ。故に人間の肉体は靈のいれものと申してあるのぞ。

(...) 人間は靈界より動かされるが、又人間自体よりもし出した靈波は反射的に靈界に反影するのであるぞ。人間の心の凸凹によつて、一は神界に、一は幽界に反影するのであるぞ。靈界は人間の心の影が生み出したものと申してあるがな。

通して心に伝わることが多いようです。ただし、人間は、基本的にこれらを頸在的に認知する能力も備えているようです。何だか、ドキドキするとか、虫の知らせとかが、その例です。そして、この感度の強弱はやはり個人差があり、感度の良い人は靈感のある人で、さらに、いろいろな情報を得られる人たちが靈能者なのでしょう。一二三神示では、この五感を、超五感と記しています。この超五感により惡靈が副守護神と共鳴して、その人を破壊したりもします。話は変わりますが、精神障害には、

1 身体の脳が物理的に誤動作、故障する場合

2 副守護神や外部惡靈により、心に歪みが生じ誤動作する場合

の通りがあるのでないかと思います。どちらも、もちろん靈的な作用がありますが、下記のような特徴があるのでないかと考えてています。

1 死に至るために生じる場合も多い

2 心が正しく治つておらず、正守護神や四魂が苦しんでいるサインを脳に出している場合です。これを改善すれば治る可能性が高いといふことは、重要なことでしよう。しかし、脳から出るものは、心の有様を超えることができない、心脳という関係があるのであります。そして、心の状態は、四魂と守護神様方の中で、その時もつとも影響力のある守護神様によって決定されます。そして、その候補としては、正守護神様か副守護神様ですが、そのどちらを自分の主人にするのかを決めるのが四魂でしょう。正守護神様の(ご)主人様は本守護神様ですが、副守護神様の(ご)主人様はよその惡魔です。

3-2 心と身体とDNAの連携

どんな（論理的な）思考も、心で為され、思考を司っているのは、主に心臓部分であるうということは、私にとっては驚愕の事実です。なぜならば、日常的に使われる「頭を使う」という表現を疑つたことはなく、思考を行うのは頭だと信じきていたからです。もちろん、三次元的な現れをするために、脳が担当している仕事量はものすごく多く、やはりその性能が良い、つまり頭が良いということは、重要なことでしよう。しかし、脳から出るものは、心の有様を超えることができない、心脳という関係があるのであります。そして、心の状態は、四魂と守護神様方の中で、その時もつとも影響力のある守護神様によって決定されます。そして、その候補としては、正守護神様か副守護神様ですが、そのどちらを自分の主人にするのかを決めるのが四魂でしょう。正守護神様の(ご)主人様は本守護神様ですが、副守護神様の(ご)主人様はよその惡魔です。

一般的に、脳は心を制御できないのですが、外部と心との通路も脳ですから、心に作用するための一一番有意義な器官は脳ということになります。

脳に対する悪い作用は、心が正守護神様の下で正しく治り、正しい行いや精進を行っている場合に起こります。脳から心には正常な情報が多く送られ、脳にも心から正常な情報が送られますので、心も脳も壊されにくくなります。その結果、その人は、安全に靈性の向上を目指せます。この場合、後述する悪魔による脳に向けられた致命的な妨害工作は、本守護神様のご発動により阻止されます。

逆に脳に対する悪い作用は、心を封印する、もしくは、破壊するための攻撃で、悪党のプロパガンダによる洗脳、劣化した教育、あからさまな不当行為などが代表例です。これにより、頑在意識から悪い思考やネガティブな念いを侵入させて思考回路を壊したり乱したりして、潜在意識の書き換えをやら行なってしまうのです。このような事態に陥った時は、考えがスムーズに流れにくくなります。その原因是、正守護神様と副守護神様の対立があるからで、心を落ち着けて自省し下つ腹に意識を集中させて考えてみてください。それでも上手くいかないときは、一度棚上げにして放置するのが有効です。他にも、様々な薬物や電磁波により身体の末端の器官から脳へ異常信号を送る事や、DNAを損傷させることで脳に異常な情報を送る事などによって、心（頑在意識）を攻撃する方法もあります。

脳はDNAを記憶装置として管理していますが、脳がDNAの書き換えもできる機能を持つていて、私は思っています。例えば、常に正精進を行い鍛錬した場合には、本守護神様や正守護神様の許可のもとに、心が脳にDNAの書き換えを命じ、それに沿って脳がDNAの書き換えを行なうというものです。ですから、スポーツなども鍛錬すれば、体が覚えるというのは、DNAにその情報が蓄積された、つまりDNAに書き換えが施されたと考えられます。一二三神示によると、この変化は本人の努力に見合ったペースで行われるようで、結果的には奇跡的だったのでしょうかが、あからさまな奇跡には見えないのが特徴だそうです。そして、もちろん頑在意識では認識できない作業です。

反対に、副守護神を通して、脳がDNAを書き換えてしまうこともあります。この場合は、稀に奇跡的な飛躍に見えることがありますが、最終的には連続した劣化が主になります。

3.3 靈と魂

教父の一人であるテルトウリアヌスは、「肉」を「魂のからだ」と呼び、魂を「靈の入れ物」と呼びました。彼は、「魂は靈と体の中間に位置する」とし、「靈と体が直接交流する」と是不可能である。魂が仲介することによって、両者ははじめて交流することができる。」としました。<http://sugano.us/sei/rei-0.htm>

私の考えは、一靈四魂を取り入れ、魂が4つ集まって心という場を創生し、そこに正守護神様と副守護神様が納まってくれたり、心という場が完成するとしました。したがって、靈に仕えるすなわち入れ物となっている魂の集合体が心であって、心の入れ物になっているのが身体という認識です。

靈界物語には、四魂も全部揃っている人間は少なく、普通レベルの人間は2つくらいだと記述されています。4つ揃っていると、なかなか靈格の高い立派な御人だそうです。つまり靈格的に「靈=魂」という相対的な関係を満たし主従関係が結ばれている精靈たちを区別するために使われる言葉で、個別に見た場合には、両者とも精靈と読んで区別する」とは困難であろうと推察します。

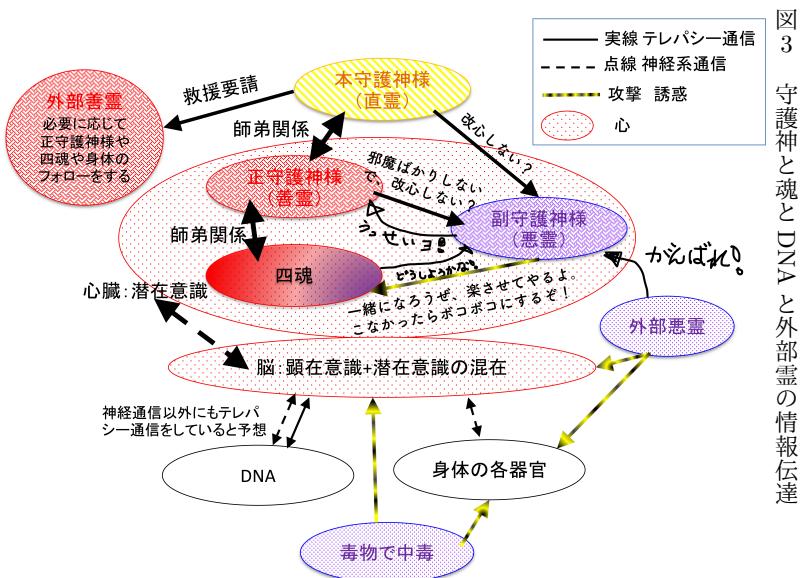


図3 守護神と魂とDNAと外部靈の情報伝達

付録2 「心を整える」と「心が治まる」と「心を慎（つひし）む」についての考察

「心を整える」と「心が治まる」

「心を治めるのは誰なのか?」、心が自治をするのでしょうか？　まずは、これを考えます。いっては、治められる心とは顕在意識と潜在意識の複合体です（付録1参照）。¹

「付録1「心」において、心の構造を議論し、心の主体は四魂で、強い発言権を有するのが正副守護神様であると考えました。このことから、心を治めるのは正守護神様か副守護神様であり、治められる対象の中心は四魂で、どちらの守護神様を統治者として選ぶかは四魂が決めるという形式ではないかと考えてみます。

前回は、魂と記述したものが、今回では四魂なのですが、基本的に四魂は自治（＝整える）をしていると考えています。この自治に必要な情報を与えてくれるのが、守護神様なのです。よって、正守護神様・本守護神様の流れを統治者として選んだ四魂は、統治者から有益な情報が流れ込み、魂にも良いエネルギーが運ばれます。他方、副守護神様を統治者に選んだ際には、「ことごとく悪意のある情報と四魂が有していたエネルギーが搾取されていきます。したがって、心を鎮めるとは、四魂が正しい守護神様を選択し、心に鎮座していただく事だと考えます。ちなみに、四魂に近い次元に位置しているのが、副守護神様であり、こちらの声のほうが正守護神様の声より大きく聞こえると、一二三神示では記されています。

もし、不幸にも、副守護神様の情報をもとに心が動いて暴走した時には、その結果や外部の人の反応から、自分がまずかつたという情報が脳（顕在意識）から送られてきます。この脳からの情報（外部情報）に関して、真理（天則、正しい教え、正しい学）やさらにDNAなど身体に蓄積された情報に照らし合わせて、心で熟考・反省します。この心で熟考（反省）がうまくいくためには、自分は誤ったことをしたという立場に立ち、きちんと考え方反省するという心構えで行うと、驚くほどたくさん情報が正守護神様から流れてきて、心が正しく治つてくるのです。心に滋養が行き渡るということは、この正しい情報とエネルギーが心に流れてくれる事だと思います。つまり四魂が正しい教えを護つていくようになることが、心を護ることだと考えています。そして、正しい教えを護るために、副守護神様の情報を制していくことが必要です。このような行為が、心を制するだと考えます。

また、正か副のどちらの守護神様の情報を判断に困る場合は、解決策を保留すべきです。時間を置くことによって、副守護神様

¹ 以前は、「顕在意識と潜在意識を分けて、治められる部分の中心が顕在意識であると議論したのですが、付録1のリプレースに伴い改めました。

² 前回は、「心を治める」のは魂だし、「心を治める」を「心を鎮め、護り、制する」と定義しました。しかし、付録1のリプレースで「心の上位に位置するのが魂である」という前提から、「心を構成するのが魂たち」と改めましたので、「心を治めるのは守護神様である」と変更しました。これに伴い、詩F004の大変更は行わず削除としました。

(…)

故に、人間の生活は靈的生活、言の生活であるぞ。肉体に食ふことあれば靈にもあり、言を食べているのが靈ぞ。靈は言ぞ。この点が最も大切なことじやから、くどう申しておくぞ
死んでも物質界とつながりなくならん。生きてゐる時も靈界とは切れんつながりあること、とくと会得せよ。そなた達は神をまつるにも、祖先まつるにも物質のめあてつくるであろうがな。それはまだまだ未熟な事ぞ。

(…)

更に祖先は過去の自分であり、子孫は新しき自分、未来の自分であるぞ。兄弟姉妹は最も近き横の自分であるぞ。人類は横の自分、動、植、鉱物は更にその外の自分であるぞ。切りはなすこと出来ん。
自分のみの自分はないぞ。縱には神とのつながり切れんぞ。限りなき靈とのつながり切れんぞ。故に、神は自分であるぞ。一切都是自分であるぞ。一切がよろこびであるぞ。
靈界に於ける自分は、殊に先祖との交流、交渉深いぞ。よって、自分の肉体は自分のものでないぞ。先祖靈と交渉深いぞ。神はもとより一切の交渉があるのであるぞ。その祖先靈は神界に属するものと幽界に属するものとあるぞ。中間に属するものもあるぞ。神界に属するものは、正流を通じ、幽界に属するものは外流を通じて自分に反応してくるぞ。正流に属する祖先は正守護神の一柱であり、外流に加はるものは、副守護神の一柱と現はれてくるのであるぞ。外流の中には、動植物 灵も交つてくることがあるぞ。それは己の心の中にその靈と通ずるものあるためぞ。
一切が自分であるためぞ。常に一切を浄化せなならんぞ。靈は常に体を求める、体は靈を求めて御座るからぞ。靈体一致が喜びの根本であるぞ。一つの肉体に無数の靈が感應し得るのぞ。それは靈なるが故にであるぞ。靈には靈の靈が感應する。又高度の靈は無限に分靈するのであるぞ。

(…)

人間は現界、靈界共に住んで居り、その調和をはからねばならん。自分は自分一人でなく、タテにもヨコにも無限につながつてゐるのであるから、その調和をはからねばならん。それが人間の使命の最も大切なことであるぞ。

調和乱すが悪ぞ。人間のみならず、總て偏してならん。靈に偏してもならん。靈も五、体も五と申してあらう。ぢやが主は靈であり体は従ぞ。神は主であり、人間は従であるぞ。五と五と同じであると申してあらう。差別則平等と申してあらう。取り違ひ禁物ぞ。

資料2 心臓についての参考文献

資料4に示しましたが、心臓は特異ですから、心臓には何があるのかなど調べたところ、二つの文献がありました。

一つ目は、「真理のこころ OS03 章心 O37」の詩の中村氏による注釈に、「胸の奥の洞窟」（略）古ウパニシャド以来、アートマン（心）は心臓の内にある空虚に住すと考へられていた。それを受けて「心」と記述があつたのです。2つ目は、マシュー君のメッセージを掲載してらっしゃる森田玄さんのブログ（<http://moritagen.blogspot.jp>）2017/5/4の記事の一部が参考になりますので、ご紹介します。

「心（ハート）に聞きなさい」と昔からあらゆる文化で言われていますが、ではどうしたら聞こえるのか、その方法が具体的に示されたことはありません。英語ではハート（心）と心臓は同じ言葉（Heart）ですが、日本語は心と心臓は別です。でも、どうして昔の人は「心の臓器」と呼んだのでしょうか？過去20年間の心臓神経学の発達によって、心臓には「心臓脳」と呼ばれる脳と同じ神経節ネットワークがあること、心臓と脳が常にコミュニケーションしていること、そして心臓から脳に送られる情報量は脳から心臓に送られるものより100倍以上も多いなどが発見されています。単なる血液の循環ポンプだと思われていた心臓が、脳と全身の機能だけでなく、人間の感情、認知、行動、反応、能力に決定的な影響を与えていることが科学的に実証されています。

資料3 中村元氏の心と意に関する記述

「真理のことば」第3章「心」では、訳者の中村元氏が注釈で、漢訳版で「心意品」と記されている題名を「心」と意訳し、別の箇所でも漢訳では「意」と表記されている部分を「心」と意訳しています。「意」というと認識できる意識（顕在意識）を中国では表すのでしょう。「意」を心の音と漢字の成り立ち通りに捉えてたら、音がある心、つまり気づきやすい心となり、顕在意識であるのがわかります。一方、当時の中国人訳出者は心を潜在意識と捉えたのだと思います。ですから、題名は「心意品」となっているのでしょうか。

日本人は、古来より心を顕在意識と潜在部分の集合体と捉えていたのでしょう。「心意」と書かれるより、「やまと言葉」の「心」を使いたかった、中村氏の訳出も、日本人としては賛同できます。しかし、漢訳の厳密な表記は、心という概念がわかるだけの感覚を失った現代人にとって大切で、心の正しい状況を端的に言い表していると称賛せずにいられません。

資料4 人型図上の指によるエネルギー測定の試行

今回の題目に取り掛かる前に、白い紙に人型を書いて、目をつぶって人型の上を自分の指で撫でていく試行を行いました。どうして、そんな事をしたのかと言えば、指先に意識を集中すると何かを感じ取ることができるのかなと言う、疑問からです。ですから、このテキストのためにこの試行を行なったわけではありません。しかし、私の指は、違いを感じました。ちょっとした振動が伝わってくる場所があつたのです。3回の試行ともほぼ同じ結果をえました。

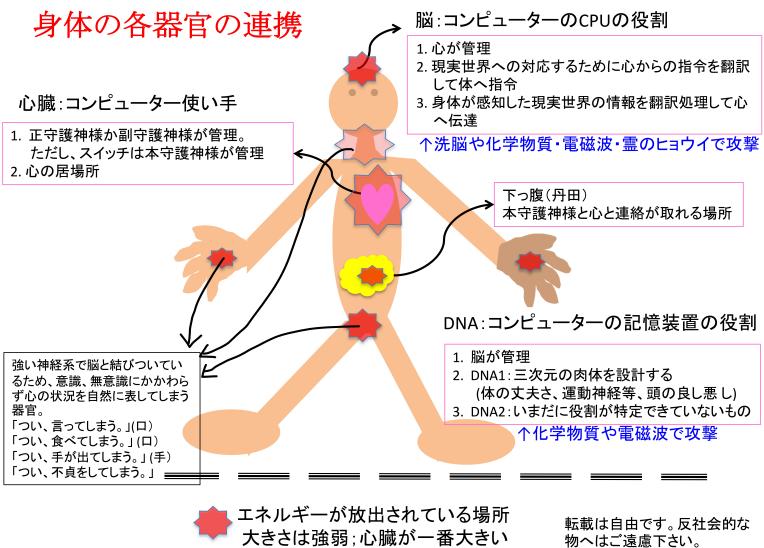
- ・心臓部は全く疑う余地がないほど、強く振動を伝えてきました。
- ・喉部が次に強い振動を伝えてきました。
- ・頭とお腹は同じくらいの振動ですが、心臓と喉に比べるとだいぶ小さくなりました。

- ・手と股間は同じくらいですが、弱かったです。
- ・足は、振動を感じませんでした。

くなりました。

図4に人型図上の指によるエネルギー測定の試行の結果を書き込みます。

図4 魂と守護神と身体部位の役割と人型図上の指によるエネルギー測定結果



私が感じた身体から放出されるエネルギーが頭の部分で他の器官よりは多く感じられたのは脳が原因ではないかと思っています。しかし、心臓はさらに一桁以上多いエネルギーです（紙の人型を使って、指で感知してみてください。心臓だけは分かる方も多いと思います。）。これには本当に驚愕しました。頭が一番大きなエネルギーを出していると思っていたので、とても意外でした。それ以外で、強いエネルギーを感じた部分の考察は図3に記しました。

最後に、「二三神示では、心臓のみではなく肺を合わせた「心肺による呼吸と脈打ち」が人間にとつて大切だと説いていることを付記して終わりとします。

(2) 仏道

仏道は、四諦の中の一つで、人を正しく解脱させるための方針です。その中で最も優れているものが「八正道」だと真理のこじばのGS6 G055詩で語られています。古来からインドにはヴェーダにより、おもがまな教えがあり、「八正道」の他にも、有名なものとして、「恆りのよすが」、「五根」があります。

それぞれを(2)紹介していきましょう。

【1】八正道は8ステップで構成され、それぞれが、

(1) 正見：正しいものの見方、考え方を示す教えに沿って、自分や世の中を観察する。悟りのよすがの拝法や五根の信に対応する。

(2) 正思惟：正見に基づいた正しい意識を持つ。

(3) 正語：正見に基づいた正しい言葉を使う。

(4) 正業：正見に基づいた正しい行いを持つ。

(5) 正命：正見に基づき、道徳に反する職業や仕事はせず、正当なりわいを持つて生活を営む。

(6) 正精進：正見に基づいた正しい努力をする。

(7) 正念：以上の6道の実践し、今の心の状態を正しくする。つまり、精神の安定統一をする。

(8) 正定：正念により整った心で、正しい神様と法（真理）を心で定める（＝禪定）。これにより智慧を得る。

【2】悟りのよすがは、次の7ステップで構成されます。

(1) 拝法：教えの中から真実なるものを選び取り偽りのものを捨てる」と

(2) 精進：一心に努力すること

(3) 喜：眞実の教えを実行する喜びに住すこと

(4) 輕安（きょうあん）：心身を軽やかに快適にする」と

からの情報が減幅する効果があります。

ここで、自己（セルフ）は正守護神様、ハイヤーセルフは本守護神様で、四魂が3次元的に現れる自分に最も近い部分という前提で、上記の話から「心を整える」とは、

1. 主語は「(四) 魂」であると考える。

2. 「整える」が指すところは、

(1) 魂が心に正守護神様を鎮めぬ。（「心をしづめる」と「正守護神様に鎮座して頂く」の掛け言葉）

(2) 魂が正しい教えを護る。（「心をまもる」と「決まり事（真理）をまもる」の掛け言葉）

(3) 魂が副守護神様からの命令を制する。

としました。

実は、心という場は、本、正守護神様が治めるという形で守られるのと同時に、四魂も整える（自治）という行為によって心を守る働きをしていると考えられるのです。一方、副守護神様は心を守る体をして心を破壊する働きを有するのです。そして副守護神様を選んだ四魂は、心を守るために副守護神様の命に従いますが、自らが心を壊しているという自覚がないのが特徴ではないかと思います。

以上を鑑みると、「守護神様は心を治める」のですが、より、理想的なパターンでは「心が（正しく）治まる」という表現が的確だと思う次第です。

心を慎む

この語句に関しては、G168～G170詩に説かれています。中村氏の注釈では、「護身悪行（身を慎む）」「護口悪行（口を慎む）」「護意悪行（意を慎む）」の三つの人と表した詩だそうです。当方としては、「心を慎む」とは、「身、口、意を慎む」ことだと考えています。心で己をつみこむ（守る）という解釈をしています。つまり、心を慎む行為は、心（四魂）が己（本、正守護神様方）を守る行為であると解釈を換言できます。

付録3 仏道

(1) 四諦

四諦（したい）とは、お釈迦様が禪定により得た知慧で構築された概念だと言われています。³

四諦とは、字を見れば明らかなように、四つの真理（諦）から成り、それらは、

（一）苦しみの原因（苦諦）

（二）苦しみの現れ（集諦）

（三）苦しみの消滅の原因（滅諦）

（四）苦しみを消滅させる方法（道諦：仏道）

と命名され、今日の私たちが知るところとなっています。

この世が悪に支配されている時期に、まつとうな人間が生きるには、「悪い」ともあれば、「いいこともあるさ！」と言った甘い状況ではなく、苦の連続になるからその苦の因果をしっかりとと考え身を処すことを教えてくださつていると私は考えています。

では、ブログ「四諦（四聖諦、苦集滅道）」「仏教の基礎知識（2）」

（http://way-to-buddha.blogspot.com/2011/05/blog-post_21.html）さんを引用しながら、一つずつ、もう少し詳しく書いていきましょう（引用部分はカッコで表します）。

1. 苦諦

「苦諦とは、人生が苦であるということ」である。

苦とは、人生の真相、現実であり、ブッダの人生観の根本である。そして、これこそ人間の生存自身のもつ必然的な姿である。「」

四苦とは、次のものである。

（1）生（生きること）

さらに四苦八苦という場合には、次のものを付け加える。

- （2）老（老いること）
- （3）病（病気になること）
- （4）死（死ぬこと）
- （5）愛別離苦（愛する対象と別れねばならない苦）
- （6）怨憎会苦（憎む対象に出会わなければならぬ苦）
- （7）求不得苦（求めても得られない苦）
- （8）五陰盛苦（人間の生存自身を示す苦、五陰を集めたものすべてが苦）

2. 集諦

「集諦とは、さまざまの悪因を集めた」とによつて、苦が現れたものであるということである。「集」とは招き集めることで、苦を招き集めるものが、煩惱（「付録4 欲と煩惱」参照）であるといふのである。」

3. 滅諦

「滅諦とは、苦のなくなつた状態のことである。苦の滅という状態が存在する」とあり、苦のなくなつた状態とは、ニルヴァーナの境地であり、一切の煩惱から解放された境地であり、解脱といえる。」

ただし、解脱は、この世の中では考えられないパワーを得られる状態で、善による解脱と惡による解脱と両者が存在すると私は考えていています。仏魔仏教に従うと、惡による解脱をしてしまい、正しい仏道を修めると善による解脱が得られると考えています。最も優れている（人を正しく解脱させる）仏道が「八正道」であるとお釈迦様が宣言なさっています。

4. 道諦

「道諦とは、苦を滅した状態（ニルヴァーナ）を獲得する方法のことである。つまり、ニルヴァーナへと到る実践的な修行体系を指している。これが仏道と呼ばれるもの、すなわちお釈迦様が体得した解脱への道である。」

この部分がまさに仏道で、「八正道」や、「悟りのよすが」、「五根」がこの部分の教えです！ さらに、GS 6 G055 詩で、この中で最も優れている（人を正しく解脱させる）仏道が「八正道」であるとお釈迦様が宣言なさっています。

以下に、上述の補足を記します。

インドの身分制度のカースト制は、社会的立場分類法の一つになるでしょう。

お釈迦様は、しばしば「サモン」と呼ばれてらっしゃるのは、ヴェーダを批判した修行者だったからだと合点が行きます。

また、インドではバラモンは、今も昔も、血筋によりバラモンなのですが、血筋は重要なファクターだとしても、せめて分類(a)も使って、「真人になつていい」との条件も必要だという当然の結論に至ります。本来は、バラモンは出家者(僧)で真人であることが理想だと思います。

お釈迦様は、昔の正しいバラモンが存在したことを、「ブッダの言葉 第二小なる章7バラモンに相應しい」とでお話になつてある記述があります。しかし、「はじめに」で記したように、バラモンとは、「それぞれの教え」であるヒンズー(バラモン)教の中で規定されるものですから、普遍性を高めた全人類のための教えを目指す本書の「真理のことば」では、バラモンを修行僧に繰り込んだのは既述の通りです。

「真人」と「賢い人」の境は、禅定が明瞭にできて対応したことがあるか否かで幅があると考えています。

そして、「真人」が、より靈格的に進化した「み仏(ブッダ)」の境界は、以前は、超人的であるか、悪いカルマが残つてゐるか否かで議論しましたが、あまりに幼稚な議論でしたので、ここで再び考へることにしました。

まず確認すべき点としては、「み仏(ブッダ)」は、「バラモン」の延長上ではなく、「真人」の延長線上に位置すると考えます。当方は空を認識できたとしても一時的な現象で留まるのですが、もしそのハイテンションな状態が必要な時は常に行えるとしたらと考えました。一時に空を体現した人が空を体現したことのない人とでは、世の中の見え方が大幅に異なるように、一時に空を体現する(解脱する)人と必要な時には禅定により体現できる人では、それ以上の差が存在するのではないか? という結論に達しました。

つまり、前バージョンで記した通り 真人とブッダ(み仏)の境界は、

ブッダ 煩惱(心の汚れ、執着、無知など)、悪いカルマまで完全に消滅させた人
真人 煩惱(心の汚れ、執着、無知など)をほぼ消滅させた人

ではあるのですが、「解脱状態つまり空を体現(解脱)」している状態が持続的で、いつでも智慧を得ることができるのがみ仏で、必要な時に禅定により智慧を得ることができるのが真人」

という、み仏(ブッダ)と真人の境界を付け加えるべきだと考えて います(参考 G337詩)。出家の生活を送つたほうがブッダへの到達が速くなると感じていますが、ブッダになるには、出家が絶対条件ではないようです。

- (5) 捨.. 対象への捉われを捨てる」と
- (6) 定.. 心を集中して乱さなこと
- (7) 念.. おも(念)いを平らかにすること

【3】五根は、決まり文句として、悟りを得るための5つの力と言われています。「この5つのステップとは、

- (1) 信.. 正しいものを信じるということなので、正見や詐法と同じです。
- (2) 精進.. 八正道で言えば、正思惟、正語、正業、正命、正精進の部分です。悟りのよすがで言えば、喜、軽安、捨の部分です。
- (3) 念.. 八正道や悟りのよすがの念と同じ
- (4) 定.. 五根の定と慧は八正道や悟りのよすがの定の部分です。
- (5) 慧.. これは八正道や悟りのよすがの定(禅定)の一部で、高次の存在から知慧が授かる」とです。

皆様、お釈迦様が、仏道では、八正道が一番優れているとおっしゃった理由がわかった方もいらっしゃるでしょうでしょうし、そうでない方もいらっしゃると思います。八正道では正しく〇〇という風に、正しいという言葉を大切にしているのです。他の教えも悪くはないと思いますが、具体的に記されていて、人間に一番理解しやすいのが八正道のかもしれない、最近では感じています。これら三つの教えを図5の表にまとめましたので参照してください。

人は皆、一番初めに四諦の真実を受け入れて仏道に入るのが理想ですが、そんな人なかなかいません

図5 八正道と他2道のステップ対応表

名称	悟りのよすが 悟りを得るための頼り になる指針	八正道 人が正しい生き方をするための8つの実践法	五根 悟りを得るための5つの力
自分が愚かだと知る。			
詐法(正しい教えを選択する)	正見(正しく世の中を見る)	信(正しい教えを信じる。キリスト教で言えば、信仰宣言: クレドの部分)	
精進	正語(正しく言葉を使う) 正業(正しい仕事をする) 正命(正しい仕事に従事する) 正精進(正しい精進をする)	精進	
喜(真実の教えを実行する喜びに住むこと。精進を行うための指針の1つ。) 軽安(心身を軽やかに快適にする。精進を行うための指針の1つ。) 捨(対象へのこだわりを捨てること。精進を行うための指針の1つ。)	正思惟(正しく物事を意識(脳)と無意識(心)で考える。正念を行うための指針の1つ。)		
念(正しい念を保つこと) 定(意識を自分の命に集中させて心を乱さない。)	正念(正しい念を保つこと) 定(意識を自分の命に集中させて心を乱さない。)	念(正しい念を保つこと) 定(意識を自分の命に集中させて心を乱さない。)	慧
	悟りの領域		

せん。では、どうしたら仏教を知らないところから仏道に近づいていけるのかというのが、私の重大な関心事でした。色々と経験して考えた結果、苦難に直面した時に、その解決の糸口を、多くの人がこれまでに習得した道徳と知識に求めるのだと思います。もちろん、直接的情報源は、インターネットやTVかもしませんが。しかし、正しい道を求めるとかなりは、やはり身について道徳と知識になるのではないかと思うに至りました。そして、まずは「自分は愚かである。」と認識した上で他の中の自分を知り、解決策を探るという道程が最も効率的ではないかと感じています。

最後のまとめですが、正しい神様と真理を捉える作業が確定で、これには「正しい念」つまり「精神の安定統一」を必要とし、これにより智慧を得ます（本書では空の体現とも表現します。）この作業を繰り返し行うことにより、涅槃（悟りによる解脱）に持続的に入ることができます。つまり真人からみ仏（ブツダ）へと進化できるのでしょう。

(3) 仏道の目標

真人とブツダ（み仏）の境界については、いまだに自分が到達した領域ではないのでよくわかりませんが、GS23 真人を書くにあたり、「仏道の最高の目的」が何であるのか？について考えなくてはならなくなりました。この仏教の目的は、「輪廻転生から離れること」、「解脱すること」がよく言われます。しかし、この辺りは過程であって目的と言つて良いか、悩ましいところでした。

G335 と G333 詩は、「生存の彼岸に達する」は、「汚れによる身体形成の糸」がなくなることによって「最後の身体になる。」と考えて書き換えて行なっています。裏を返すと、身体形成の糸が止まなければ必ず体が作られて転生するという捉え方です。しかし、当方はカルマはなくとも必要があつて転生する人々も多くいらっしゃると感じています。

このことから、仏道の最終目的是「輪廻転生のサイクルからの完全脱却ではない。」と当方は考えます。ここは、従来から仏教で語られたことと大きく異なる立場です。また、仏道の最高の目的を終了したら、そこでおしまいなのか、非常に哲学的な疑問が湧いてしまうのです。そこではたと、「これが仏教の虫なる害虫なんだ。」と思い至りました。

実は、仏道の完成（最終目的）は次のステージへの入り口に立つことであつて、終わりではないというのが、当方の現在の認識となっています。ただし、その次のステージがどんなものかは、まだはつきりと掴めないです。

付録4 人間の分類

(1) 分類方法

ここでは、仏道における人の分類について考察を進めます。当方が読んだ仏教の文献では、この点に関する細かく明記したものに出会えませんでした。したがつて、本書で独自に分類を構築しました。

分類が一種類だけでは精度を上げられないでの、以下の3つの分類を構築しました。⁴ それが、

- (a) 精神性（靈格）分類法
 - (b) 実践分類法、
 - (c) 社会的立場分類法
- です。この分類によつて、「第3節さまざまの人」の全詩が一通り分類可能となりました。

真理のことばの節名や詩中で使われている、「愚かな人」と「賢い人」と「真人」、「道を実践する人」、「仏弟子」、「出家者」、「在家者」、「バラモン」、「修行僧」、「サモン」と、分類 (a) ～ (c) の対応を、下記に示します。

- (a) 精神性（靈格）分類法 「愚かな人－賢い人－真人」
 - (b) 実践分類法 「道を実践する人－道を実践しない人」
 - (c) 社会的立場分類法 「出家者（「修行僧」）－在家者」
- 出家者 金銭の授受が生じる経済活動には直接に参加せず、本人の行つたことに対する報酬ではなく、在家者からの捧げもの（お供物）や先祖から引き継いだものなどで生活する形態の人たち。本書では、これを「修行僧」と呼びます。参考までに、以下に、インドにおける出家者の代表的な名称を記します。
- ・バラモン 出家者の中で、最高の立場に付けられた役職的名称
 - ・修行僧 平（ひら）の出家者
 - ・サモン ヴエータ以外の修行僧のことを呼んだという説が最も有力で、お釈迦様は「サモン」と呼ばれていた可能
- 在家者 経済活動に参加し、生業により生活する人たち

⁴ 実全バージョンでは四種類に分けましたが、本書では一つ減らしました。

④ 六汚れ

三毒の解説だと、分類が少し大雑把で、説明がしづらいと感じ、しかし多く分類する（108の煩惱、十煩惱 etc.）「」れどあればかぶつてる?」となってしまい、余計に説が分からなくなります。
結果、浄土宗の根本煩惱の教えを基に、当方は根本煩惱の再考を行ない、「六汚れ」と命名し、下記に示します。

愛欲・欲しいと思う行為を愛する心→（2）欲と執着参照。

憎悪・怒りと妬み。度を超えた不当な怒りのことです。

慢・奢ること

悪見・悪い教えや考え方を持ち、信じるゝこと

疑惑・真理を疑うこと

無明・⑤ 無明 参照

「怒」と「欲」に関しては全く悪とは考えません。正当な怒りは良しとしたいので、「怒」を使用せず「憎悪」を使用しました。ただ、正当な怒りであっても、それらに支配されずに意を離し制する必要があると当方は考えます。「欲」も同様に考えます。
他方、慢、悪見、疑惑、無明については、一貫して影（悪）と捉えます。図7に六汚れと隨煩惱をまとめましたので参考してください。

⑤ 無明

前回の説明に付け足すことが増えました。前回の説明の要約は以下の通りです。

「無明とは、人間が根本的に持っている無知のことである。人生における人間の苦しみは、すべてこの無明から始まる」とをブッダは、瞑想の中から発見した。人は、その無明というものを取り払うことで、心安らかに生きていくれる。」

(http://www.st.rim.or.jp/~success/munyou_ye.html サンより)

無明(avija)という言葉は、お釈迦様が初めて使われたのかどうか? はわかりませんが、このようなものが存在するとは、私も最近は切に感じています。慢、悪見、疑惑がなくなってくると、この無明の存在がどうやら感じられて、これが何であるのか理解できるようになってくるものだと思います。以下にあえて、説明を試みます。

ただし、靈格が上がるにつれ、出家に準じた立場や生活が自然と整つてくるように見受けられます。

お釈迦様は、日々の生活を正しく過ごすことが最も大切だと主張され、「怠らずに励む→努め励む→学び努力する」という具体的な言葉の上に具体的なアドバイスを添えて、在家の人達に教えを述べられたと私は考えています。

在家か出家に関わらず、正しい真理に従つて、正しい道で生きている人たちを総称して「道を実践する人」としたのですが、「道を実践しない人」との分かれ目は、愚かな人と賢い人のあたりだと考えています。愚かな人と賢い人の境は、詩G228で示されたように、自分が愚かであると認識することとなっています。お釈迦様は、賢愚の境界を非常にはつきりと宣言していることを確認してください。

（2）仏弟子

「仏弟子」は、分類というより、靈格の向上を目指すべき存在でまだ真人には到達していない者は、本人の希望とはかわらず、全てが仏弟子になると、今回の考察で考え方を改めました。ですから、人間であろうが、宇宙人（？）であろうが、妖怪（？）と言われる存在であろうが、みな仏弟子に自然にカテゴライズされていると考えます。本書の真理のことばは、普遍性を持つようについて考察していますので、これがさまざまな地域の教えでは別の言葉で表現されることがあります。ただし、その教えには、正しいお釈迦様の教え（中核は、「怠らずに励む→努め励む→学び努力する」ように生活を送り、四諦の真実や、八正道などと矛盾しない教えでなくではない）ことでしょう。

（3）修行者

社会的立場の分類において、出家者と在家者を分けました。在家、出家問わず、すべての存在は靈性の向上を目的として生きているので、全ての存在は修行者と言えます。

お釈迦様は、当時のインドのヒンズー教の衰退を指摘しました。經典であるヴェーダも、出家者への教えがほとんどだったことでしょう。しかし、多勢は在家の人たちです。また、本当の教えが必要だったのも特權を有さない在家の方々だったことは明らかです。ですから、お釈迦様が説いた仏道は、在家への教えが多かったとは思います。既存の「真理のことば」では、バラモンと修行僧を中心の經典になっているので、こここの部分がなかなか伝わらないのです。

では、お釈迦様は修行者をどのように捉えてらしたのでしょ
うか？この部分を考えてみましょ。修行者について参考にな
る記述が、「ブツダのことば第一 蛇の章」で以
下のように、述べられています。

師（ブツダ）は答えた、「チユンダよ。四種の修行者があり、
第五の者はありません。面と向かって問われたのだから、そ
れらをあなたに明かしましょ。—「道による勝者」と「道
を説く者」と「道において生活する者」と及び「道を汚す者」
とです。」

この教えは、出家、在家を問わない真理の追求分類方法の「(b)
実践分類方」を軸に説かれていると考えています。

この4種類に対応するカテゴリーは、

「道による勝者」 → 「ブツダ」

「道を説く者」 → 「真人」以上 の靈格

「道において生活する者」 → 「賢い人」以上の靈格、もしく

「道を実践しない人」は「道を実践する人」

となると、当方は考えて います。

この書き出したリストを眺め「真理のことば」を読むと、お
釈迦様は、「道において生活する者」を主眼に置かれて、教
えを説かれたのでしょうか、「道を説く者」や「愚かな者」への
教えも多々あります。これは、ヴェーダやバラモンの衰退を鑑みて修行僧への教えが必要と思われたり、愚かな者の救済誓願が必
要だと思われたのかもしれません。これらのことから、仏道の教えは、お釈迦様がさまざまな精神性（靈格）の者に対して与えた
教えだと考えられます。

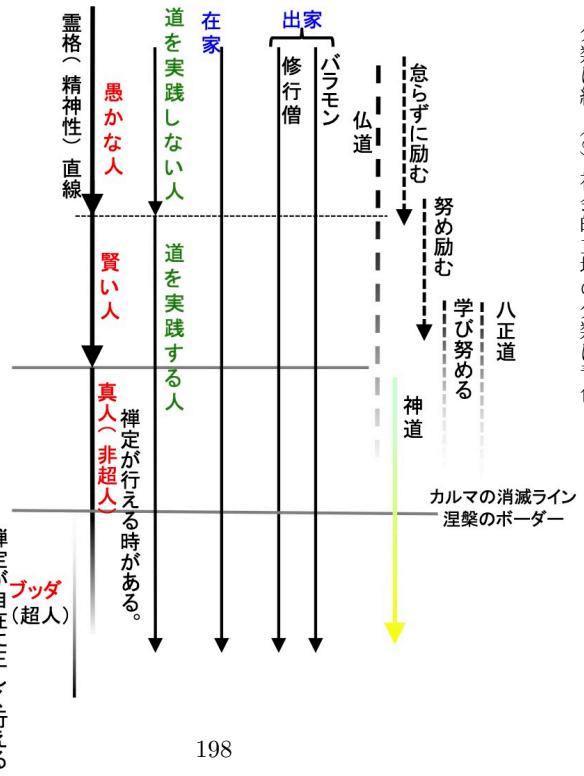


図 6 靈格（精神性）直線.. (a) 精神性の分類は赤、(b) 真理の追求の
分類は緑、(c) 社会的立場の分類は青色

付録5 心の汚れ

(1) 汚れと煩惱

① 煩惱 煩惱とは、漢字の原意は、心と頭（惱のへんとつくり）の特に頭を焼く（害する）ものです。つまり、煩惱は心と脳を
害するものですが特に脳を中心には分布し害を及ぼすもの（火）と言ったところです。仏教では、煩惱は、身心を乱し悩ませ智慧を
妨げる心の働きとされ、三毒、浄土宗の根本煩惱（6分類）、十毒、108の煩惱などで説明されています。要するに仏教では煩惱
は心の汚れだと考えられています。そして、根本的な煩惱と、これらの煩惱が原因で表に現れる隨煩惱があるとされています。

三毒の3分類の煩惱は、
② 三毒 根本煩惱を3つに分類するものが、三毒と呼ばれる教えで、これは入門編だと思います。ブログでは、「お釈迦様もこの
3分類で、仏道を説かれたのだと思います。」と記しましたが、ヴェーダが発達していった当時のインドですから、もう少し細かい分
類を知った上で、教えを説かれる相手によって、3分類や6分類を使い分けられたのではないかと考えるに至りました。

三毒の3分類の煩惱は、

貪（どん）.. 欲望への執着
瞋（じん）.. 怒り
痴（ち）.. 無知（含無明）、慢心、疑惑、悪見

とされています。

③ 根本煩惱（6分類） 根本となる煩惱を貪・瞋・慢・無明・見・疑の六つであるとする教えです。これは、三毒のうちの痴の部
分を慢・無明・見・疑に分けたものです。これは、多すぎず少なすぎず、当を得ていて素晴らしいです。分類項目のそれぞれは、

慢.. 自らを高く評し他を軽視する自己中心的感情
無明.. 正しい道理にくらく真実を知る知見が具わっていないこと
見.. 仏教以外の誤った見解を信じること

疑.. 仏教の眞理である四諦・縁起・業報等に対する疑念を持つこと

の財欲、名譽欲、承認欲には程よく執着することが必要だと思います。ですから、本書では、「執着（執着全般で善惡混合）」≠「妄執（悪的執着）」＝「執著（悪的執着）」と考えます。

他方、欲というのも、この三次元の世界に既に設定されていて、全てが悪ではないのです。しかし悪的執着の「妄執」が求め欲が悪的欲の「情欲」で、人として生まれたからには、「妄執」を消滅させることができないのです。このためには、「愛欲」と「愛執」という心の作用（心の汚れ）を制し「妄執」をなくしていくなくてはなりません。言い換えると、欲への執着から離れた位置で執着を制し統べながら生きる事が人間にとつて重要な努めになるのだと考えています。

今、快樂が得られる欲があるとしましよう。これを愛する心が愛欲で、この愛欲が強くなればこれを得ようとしますので執着が出てきます。この対象物（欲）の放つ快樂が素晴らしいければこれを得ようとする執着すら愛するようになります。このためには、「愛欲」と「愛執」という表點で執着から妄執へと変化します。この順番から、「妄執」の根源は「愛執」「愛執」の根源は六汚れの「愛欲」と言えます。お釈迦様は、この世の中には激流が存在して、その激流と一緒に流れている無常のものに恋い焦がれて、精一杯追いかけるのが人間の心であるとしています（G199～G202詩参照）。この激流に引っ張られる要因が、妄執でこれは主に顕在意識の中に分布します。実際には、妄執によって激流（欲）と一緒に流れているだけなのですが、その求めているものは、激流の中なので、なかなか掴めません。しかし、自分では激流の中で一生懸命追い求めていた氣になっているのです。図9に、この世の中に設定されている欲（激流）とそれに流される心のイメージ（心を牽引しているベクトルが妄執であり意欲の悪い部分です。）を描きます。

ちなみに、人間が恋い焦がれて追い求める「激流と一緒に流れている無常のもの」は、流れによって形作られたもので、実体のないもの、すなわち「色」であると認識するべきであるというのが情欲（悪的欲）です。一方、「著は草を集めて焼く」という意味で漢字が成り立っていますので、火で暗示されるものが執著や妄執です。

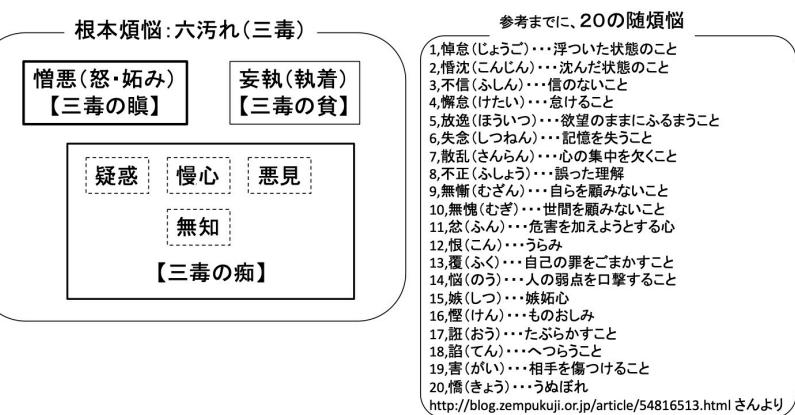
では、欲をなぜ激流とたどるのでしょうか？ この欲といふものは、理科学でいう場のようなもので、すでにこの三次元の世の中に設定されているのでしょう。これは、人間の力でなくすことなどできないものです。ですから、「欲をなくせ。」という表現は、本書の定義では、「情欲への妄執をなくせ。」とするべきです。どの欲の流れに流されるかは、その心の執着する癖によります。食欲に弱い人もいれば、名譽欲に弱い人もいるっていうのが、現実です。

「真理のことば」において、流れで例えられるのが情欲（悪的欲）です。一方、「著は草を集めて焼く」という意味で漢字が成り立っていますので、火で暗示されるものが執著や妄執です。

⁶ 以前は「空」と書いてしまって間違えていました。詳しくは付録7を参照ください。

この無明は、他の5つの分類項目が悪い方向に働くと増幅され、反対にこの5項目の悪い作用を増幅させる元にもなると考えています。また、無明は隨煩惱の働きによつても増すようです。正精進によつて、努力して自力で六汚れは減らすことはできるのですが、最後にわずかに無明が残ると言われ、私は、この最後の無明は上位の存在（本守護神様）によつて取り扱われ、み仏（ブッダ）や真人となるのではないか、これにより上位の存在とも直接つながるので自分が何をなすべきか直接の指導ご鞭撻が受けられるために非常に高い能力を發揮することが可能になるのでは？と考えています。しかし、この無明が取れてしまふと、荒波や激流だらけのこの世の中で与えられた絶大な力を正しく発揮できる強靭な心が必要で、それに耐えうる強さを心が持つていなければ、その力が悪に転じてその人の全てを打ち砕いてしまいます。ですから、その心が安全に処理できる力が大きくなりあるリミットを超えているか否かが、無明を取り外す基準だと考えています。無明を、外してもらえるように正精進するのが私たち人間の務め課題ですが、まだこの世の中では絶大なパワーを有して修行できない普通の心には保護バリアとしての役割もあると感じ、無明が、最大の汚れであると同時に、この世を渡るためのその人の保護バリアであるという二面性を持つと考えています。

現在、当方は無明は副守護神様つまり悪魔の自分（先祖）ではないかと考えています。副守護神様も私たち同様に私たちの生で修行をなさり気づきを得て進化をなさつてらっしゃり、副守護神様が持つ悪魔性を減らすには、私たちの日々の生き方が非常に重要になる、でもやはり自分なので最後まで残ってしまう悪になるのではないかと考えています。無明以外の六汚れ（五つの汚れ）は、無明（副守護神様）を潤す物などと考へています。それらが多い時には、心が無明の副守護神様を感じることがで、その人自身になつてしまふのでしょうか。



④ 六汚れと隨煩惱の連携 何らかの欲に妄執（執著）があり一次節(2)欲と執着参照一、それが満たされない時には、憎悪や憂いや恐れ（悪見）が起こります。憎悪や憂いや恐れが増えれば、ますます執着が激しくなり、ますます憎悪や憂いが増えます。また、慢心があり、自分の慢心を満たす執著を持てば、前述の執着が得られない

図7 六汚れ、三毒、20の隨煩惱

時と同様な」とが起ります。

両者とも、真理（本当の教え）を聞いて疑わなければ、（妄執を産む情）欲と慢と悪見と憎惡と悪見の対処が行えますが、疑つてしまえば、これらの負のスパイラルを止めるることはできなくなります。怒は強くなれば、表に現れる隨煩惱をたくさん誘発させ、結果として理性を失わせる働きがあります。慢、悪見、疑惑は外からこのように、六汚れ（煩惱）と隨煩惱は連携しており、それぞれがそれぞれを誘発し、それにより生産された汚れが、その種類に応じて、根本的な各六汚れに分配されるのです。

以上では悪循環パターンを述べましたが、次は好循環パターンをご紹介しましょう。

自分が、生きていく中で苦しくなったり辛くなることがあります。ここで、反省して、正しく世の中や自分を見つめようと努力することが、実は八正道の起点の正見となります。そして八正道（釈法）の教えを信じ実践することによって、いきなり六汚れを減らすのは難しいので、まずは手始めに隨煩惱を減らす努力をするのです。隨煩惱の発現を抑えることによつて、六汚れが減少し自分に取つて良い行動が判別できそれを実行できるのです。これらの繰り返しが、好循環パターンです。

④ 三界の五上分結と五下分結 この部分は、中村氏の注釈の書き下しと、http://way-to-buddha.blogspot.jp/2011/05/blog-post_1655.htmlさんの内容で構成しました。このサイトはとてもよく書いてあると思いますので、ぜひ立ち寄つて、「一読ください」。

三界ですが、欲界、色界、無色界と呼ばれる3つの世界のこととを指します（図8参照）。最下層が欲界、その上が欲界、さらにその上が無色界となっていますが、この三界に属している状態は、ニルバーナ（涅槃）＝安らぎ、や解脱状態ではないとされています。三界の五上分結と五下分結は、GS 19 修行僧 G257 詩に出てきます。

五下分結は、魂を欲界に結びつける5つの煩惱ですが、一心に内包される煩惱なか？一捨てるものだとG257詩に示されています。

五上分結は、魂を上界（色界と無色界）に結びつける5つの煩惱ですが、一心に内包される煩惱なか？一捨てるものだとG257詩に示されています。

これら10個の煩惱の個別の意味を図8に示し、各煩惱に対応すると当方が考える六汚れも記しました。この対応は、無理のないものになつたと思います。

(2) 欲と執着

真理のことばには、諸所に「欲」、「情欲」、「愛欲」、「執着」、「妄執」、「愛執」という言葉が登場します。まずは、これらの意味を考えましょう。⁵

欲 人間が欲しいと望むもの：善惡の区別をつけない欲の全て

情欲 「青い心の欲」となりますから、「これは未熟な心が欲しがるもの」という漢字の成り立ち通りに捉えます。これは、欲の具体的な種類ではないことに注意してください。

愛欲 欲を愛する事（貪欲は欲を貪ることなので、愛欲とほぼ同じ意味）

執着 欲の対象を追い求める事…善惡の区別をつけない執着の全て

妄執 道理を逸した執着（欲望、渴望とも言える。）また、仏教用語の執著（しゅうちやく）は執着の悪いものを表しているようです。

愛執 執着を愛する事

としました。

仏教では代表的な欲として、五欲（食欲、財欲、色欲、名譽欲、睡眠欲）が提唱されています。しかし、当方の経験では五欲では足りず、「人から愛されたい、認めてもらいたい」という「承認欲」が入るべきだと考えていました（以前はこれを【愛欲】としました）。五欲に承認欲が加わり六欲になります。この六つの欲を生存上必要な順に並べると、

【食欲＝睡眠欲】承認欲】色欲】財欲】名譽欲】 → 六欲

になると、私は考えています。以上を六欲と命名します（ただし、並び順は人によりある程度前後すると思います）。

現状の仏教では、これらの言葉の定義がなされていないので、欲と執着に関して思考ループを作つてしまつという事態を招いています。

しかし欲も執着も全てが悪いわけでもなく、生存を支える生存欲（睡眠欲、食欲、色欲）・社会的にスムーズに生きしていくため

⁵ ver. 1 で当方は、「愛欲と情欲は同一とし、愛欲とは、他者からの愛情（愛欲）や人気を求める欲」としましたが、本書では全面撤回となりました。

なりません。この原因をはつきりさせる目的は、発端となつた事や経緯で過失であれ故意であれ、どの当事者に非があつたのかをはつきりさせる必要があるのです。そして、ここまで来て、ようやく話し合いによつて非がある当事者に改善を促します。」ここまで段階で、この非のある当事者に武力を一方的に使うと暴力と認定されます。

しかし、正当な話し合いをしたにも関わらず、その当事者が改善を行わなければ、武力を用いて滅ぼす、もしくは、制圧する事を暴力と定義することは不当な定義です。

正当な話し合いだったかどうかを認定するのが、大変ですが、これは多少でも関わった人たちが、自分の利害に関係なくとも、各自で、なるべく正しく判断するように心がけなければなりません。というのも、自分が、何時、このような事態に落ちるかわかりません。世の中は、そのような相互保証で成り立つてゐるのです。もし、この時に、みんなが知らん顔をしたら、不当行為が勝つてしまふのです。そして、世の中が悪魔の支配になつていくのです。「他人のことに関わると、厄介な上に、自分が変な勢力から攻撃されるから嫌だ」という人々の姿勢が世の中を圧巻した、ここ30年で、散々、味わつた悪夢です。

以上から、本書では、暴力を「不法 不正当な方法による物理的強制力の使用」という意味で使用します。実は武力行使にいたる前の話し合いで、不当な主張をする者たちに撤回させ説得することが理想であることはお分かりいただけますか？そしてこれが人類に与えられた唯一の戦い手法なのです。というのも人類の武力では、その不当な主張を繰り返す悪魔どもには太刀打ちができないからです。正しい教えとその実践と智慧が、人類に与えられている武器なのです。

付録7 さとりと空

(1) さとりと解脱と涅槃

「悟り」、「解脱」、「涅槃」について、浄土宗大辞典WEB版(深謝)から抜粋させていただいたものを次に記します。

悟り(さとり) 真理に目覚めること、あるいは(真理に)目覚めることで無明がなくなった状態。

解脱(げだつ) 苦から解き放たれ脱すること、一切の煩惱や束縛から離れて精神的な自由を得ること。

涅槃(ねはん) 苦しみが消滅した状態。仏道修行者の目標すべき到達点である。また涅槃は、煩惱の火が滅した状態、あるいは煩惱という薪たきぎが智慧の火によって焼き尽くされた状態に喩えられる。

(「ヒーブレイク）仏道のキーナンバー

GS19 修行僧 G257 詩では、キーナンバーは5です。しかし、G257詩の「五上分結と五下分結」は、図8で記した通り、心の汚れに相当するものを10個書き出しており、六汚れの重複で考えて良いと思います。

また、五根「信、精進、念、定、慧」(付録3参照)は、精進の範囲が広すぎますので、精進を「行動」と「思考」で分けて、六根道にすべきだと思う次第です。

他にも般若心経での一節「眼耳鼻舌身意」、「色声香味触法(=意)」をそれぞれ六根と六境と言います(六根と五根改め六根道は、少しややこしいです)。さらに、六道輪廻、六神通があります。さらに前述の六欲です。

以上から、仏道のキーナンバーは6ではないかと思うに至りました。

(「ヒーブレイク）三界についての感想

この世の中、大体の人が「色界」で生きていると思います。ですから無闇やたらと欲に任せた事件が起きてなく、起こつたら一大事件になるのです。欲界の部分が多い存在もいるけれど、それはもはや人間に分類してはならず、そういう存在が凶惡事件やテロを起こすのでしよう。

当方としては、「欲界」と「色界」には異存はないのですが、「色界」と「無色界」については、少し感想を述べたいと思います。この二つですが、「色界」で色と空を正しく認識せずに、誤った認識をした場合に到達するのが「無色界」ではないかと思うのです。ですから、「無色界」は悪魔による解脱であつて、涅槃(悟りによる解脱)ではないと思われます。ある程度立派になつて良い線まで行つても途中からとち狂う人たちは、まさにこの辺りで真理(空)を誤認した人たちではないかと思う次第です。これは、当方の主觀ですので、感想文程度に記しました。

ある問題が起るるとき、私は、この問題を解決するために、この問題の原因をまず調べなくては次に、正当な武力行使に至るまでの道筋を、私なりに考えたいと思います。

であると説明されています。

(二) の政治学的および社会学的意味における暴力の概念には、単に法的考察によって定義される不当不法な力の行使をいうのではなく、いわゆる革命集団による国家秩序の暴力的転覆（武装蜂起）や暴力團による腕力などの行使から、国家が合法的かつ正当的に所有する軍隊や警察のいわゆる実力行使までも内包されるのが普通である。

(二) の法学的見地の暴力は、法によって許容されない力の行使をいう。したがって軍隊や警察の実力行使は、それが法に依拠しているかぎり、正当化され暴力とは呼称されない。また正当防衛のような場合、個人による実力の行使であっても、それは法の許容内と考えられ、暴力とは呼称されない。

(三) 政治学的には、物理的強制力の行使一般をいう。
 (2) 法学的には、不当ないし不法な方法による物理的強制力の使用をいう。

私が平和で安全な場所で生まれ育ったので、本書に取り組んだことを機に、初めて暴力という言葉を熟考しました。私の生き立ちからは、ただ自分の欲得のために、人の命や土地を暴力によつて奪う人なんてこの世にはいないと信じていました。近くにそういう人間がいなかつたので、そう思つてしまふのも、仕方ないのでしょう。

ただ、今から考えれば、「あのハラスメントは暴力の部類だな！」と思つたりもしますが、私は武力行使が伴つたものを暴力と考

えていたので、暴力という言葉 자체の認識が曖昧でした。そこで暴力という言葉を調べてみました。

ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典の解説 (<https://kotobank.jp/word/暴力-132521>)によると、暴力とは、

付録6 武力と暴力

三界

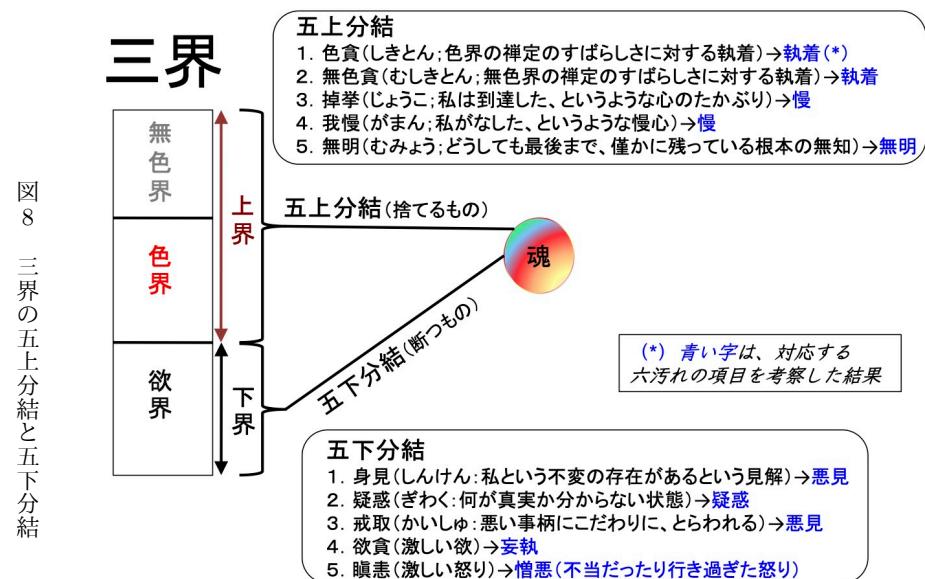


図8 三界の五上分結と五下分結

図9 欲望（激流）とそれに流される心のイメージ



この世の中に設定されている欲望をイメージ化

①色によって欲望の種類を分けています。私は、食欲、財欲、色欲、承認欲、名誉欲、睡眠欲が六欲であると考えています。この図では、4本の流れしか書いていませんが、心がこれらの流れに乗つて流される様子を表しました。流れに乗つて、心が悪魔の領域に近づくと、悪魔たちにトラップされやすくなるイメージがあります。

②ニルヴァーナに正しく近づいている心もあります。心の丸が潜在意識でベクトルが顕在意識というイメージです。

第二点 一般若心経は、音を大切に編まれた詩で、読み上げるだけで功德があると言われている点です。私が聞き及んだ限りでは、この音 자체に魔除けとしての役割があるとのことです。したがって、漢訳なさった玄奘三蔵法師様も細心の注意をお払いになつて、漢字をあてられたことだと思います。

仏弟子等（人間等）に対する神々様の愛情あふれるおはからいを感じる次第です。

般若心経について、以下の点について考慮し、当方が考えた切れ目に沿つて、全文・読み方・意訳を記しました。

三行目 五蘊については、「一般に「人間を成り立たせている五つの要素。色（しき）（＝肉体）・受（＝感覚）・想（＝想像）・行（ぎょう）（＝心の作用）・識（＝意識）」」（Oxford Languagesさんより）となっています。

しかし、当方では、色（しき）は肉体とは捉えず、いわゆる気の流れと捉えます。般若心経の十行目の「受想行識」は「想念、行い、知識を受け」と訳しました。この解釈に基づけば、色（しき）（＝肉体）：の「＝」関係は成立しません。ここで「蘊」と言う字について、考察します。人間が囚われている状態を表す「囚」がお皿の上に乗っています。これは囚われた人間（心がおさまっていない普通の人々）と食糧を糸のように寄り合わせようとしている邪な（くさい）ものが「蘊」という字の意味だと感じています。実際に人間を食べるとかそう言う意味ではなく、俗に言う「食い物にする」とか「カモにする」という意味でお皿の上に乗せる表現をしているのでしょうか。

したがって、本書では、五蘊とは人間をとらえ縛り付けている五つの要素で、いずれも色を感受する身体・五感・想念・行い（掛け言葉で業）・意識であると再定義します。

五感 前述の五感は、一般に、視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚とされています。

十行目 行（修行）と業（カルマ）が掛け言葉になつていています。

十九、二十一行 「眼」は「限」がかけ言葉となつてているようですので、双方の場合の意味を記しました。「眼」は、一二三・神示（日月神示）に出てくる艮（うしとら）金神様の目であり「靈能力」と考えました。

十九、二十行 この世は「色」が作る相にがあったかも真理のよう横行し、人々を惑わしている訳ですが、「色」を最も認識するのが、五感の中でも「視覚」です。したがって、視覚（目）の情報により惑わされやすいから、聴覚（耳）・嗅覚（鼻）・味覚（舌）・触覚（肌）・意識（額；前頭葉）からの研ぎ澄まされた情報を大切にするべきだと主張していると考えました。

まず、人間についてよく言われている、「私は人間様だ、すごいだろ！」と「所詮、人間、汝の愚を知れ！」は、私は極論に感じ好ましいと思いません。しかし、「上には上がいる。」という謙虚な自覚があることは、悟りを得るために強い武器になると思します。「上には上がいる」という標語的表現は、私も師から教わったのですが、確かに忘れがちなポイントだと強く反省した覚えがあります。この姿勢を持たなければ、悟りを得る情報が自分に流れ込んでこない、否、流れ込んできても気づかないことになるでしょう。

悟りが得られると、執着していた事物（心の汚れとも言えます。付録5参照）から離れる精神力が得られます。それにより、新しい悪い想念やカルマを獲得せず、既存のそれらの精算だけが進み、最終的にはこれらを一切持たない自分へとなります。付録4の人間の分類において、真人は悟りが得られた以上のレベルの人間で、御仏（ブツダ）は悪いカルマを一切持たない存在で、神道的には神人、キリスト教的には無原罪の存在と表現しているようです。さらに、神人、御仏との差を取る（なので「さとり」というと、師から伺つことがあります。）ために人間の行うべき日々の行為を、お釈迦様は私たちに知らせてくださつたと考えています。仏道とは、悟りによる解脱で人間が涅槃へと進み真人や神人（仏）へと進化するための教えで、人間に与えられた非常に大切な教えだと考えています。

(2) 空相色

「空（くう）」は抽象的で難しい概念だと思います。ネットでは、「分別のない世界を一切空」という曖昧な説明が多いのが現状です。浄土宗大辞典WEB版さんでは、「空」について詳しい解説がありますので抜粋すると、
「すべての事物が因縁によって生起していることを意味する縁起を説くが、この因縁によって生起しているということは、一切都是心経により説かれる主要な教えであると言え、「空」が、そのようなはかない対象を土台に発生したとは考えにくいと思い至ります（深謝）。

この伝統仏教による空の解釈は、諸行無常を因縁として登場したと推察しています。しかし、「空」は仏道では次章で紹介する般若心経により説かれる主要な教えであると言え、「空」が、そのようなはかない対象を土台に発生したとは考えにくいと思い至りました。「空」を読み解くことは、仏道において避けて通れないキーポイントだと思いますので、以下に、当方による漢字の成り立ちをヒントに、当方の体験も交えて「空」の議論を展開します。

「空」という漢字は、穴かんむりと工からなります。工は巧みなものという意味がありますが、上下の横棒（一）は、それぞれ上

の世界と下の世界を表し、結ぶ縦棒（—）により連絡されている世界を表していて、これにより巧みな物を表すようになったのでしょうか。巧みな物の中で穴のようなものを「空」と呼んだのでしょうか。つまり、私たちが上を見上げた時に見える空（そら）は、巧みな物の一部である地球に通っている穴という意味から「そら」に「空」があてられたのだと思います。ちなみに、地上にいる人間にとっては、空は広大で穴なんかじゃないので、創造神様が上から見た状況を表してらっしゃるのでしょうか。

議論を戻すと、「本来、空という字の意味は虚しいとか空っぽという意味ではなく、全てを貫く穴という意味なのです。全てを貫く穴とは不変なもの、つまり創造主（神様）がお創りになつた真理であると解釈することもできるのです。実は私たちが暮らすこの世の物質的な事物ですら、真理で作られていると考えています。科学は限定的ではあり、まだまだ未熟ですが、この世の中の物質的現象を不変的に説明する真理（法または法則）を探求する学問です。つまり、私の捉えた「空」は真理です。

「空」の対局をなす「色」ですが、これはこの真理（巧みな穴の空）を、覆い隠しているもので、いわゆる氣とも表現できる（エネルギーでも良いのでしょうか。）媒質の流れ（エネルギー流みたいなもの）ではないかと考えています。なお、この「空」は、穴なのでこのような氣や気の流れは存在していないようで、次章に載せた般若心経の十七行目でも、「それゆえ、空の中には色がないのである。」と書いてあります。

「相」という漢字は、目で見る木（氣）と書きます。枝葉が張り巡らされた大きな木とその背景を含めた部分を母相（マトリックス）と見立てた時、このマトリックスは「空」と「色」の部分から成っていると捉えます。そして、それぞれの部分を、空相と色相と表現します。

このマトリックスを見て、真理部分の「空相」を認識するのが人間の務めです。しかし、次節に記した般若心経では、十行目の「受想行識」で記されている通り、各個人の想念と行いと知識により、「色」が「空」にもなるし、「空」が「色」にもなると十行目の「亦復如是」で教えてくださっています。この意図を受けている行が、六行（九行）の「色不異空 空不異色 色即是空 空即是色」だと思います。

「色」は、人間の意図でなくすことができない、人間にとつては既存のものと考えて差し支えないと考えています。ただし、「色」は人間の意図によつて流れ方が変わら、良い意図は良い流れ（色）を作り、悪い意図は悪い流れ（色）を作ります。一度形成された色は、善惡の性質を問わず、時間と共に姿を変え、場所により異なつてしまします。一方、空は時間や場所には左右されません。つまり、仏教で言う諸行無常とは、「色」の持つ特性であつて、「空」の持つ特性は真逆の絶対不变であると考えられます。

木であれば、木漏れ日をたよりに「空」を見い出すことは可能ですが、この世のマトリックスから空相を見分けるためには、人間は、自分の思い込みや先入観（色眼鏡）を外して、与えられた感覚全てを使い、マトリックスを観測するよう努めなくてはならないでしよう。各個人の想念と行いと知識により、「色」が「空」にもなるし、「空」が「色」にもなるので、心の汚れを取り払つて相、すなわち真理を認識する事だと考えています。

本来、禪定は真理を探求するために行うものですから、空を体現するために行うものでしょう。「禪定のためには心を空っぽにする」という説明は正しくなく、「心の汚れを取り払つて、丹田に集中して、熟考する。」というのが正しいアドバイスだと思います。もちろん、思考などが上手くいかないときに立ち止まって頭や心を休憩することは非常に重要ですが、心をからっぽにするのではなく、邪念を捨てることが必要なのです。また、無相は「相を無くしてください。」となりますので、空相（実相、真理）までなきものにしてしまう呪文になりかねませんので、今後は、「無色相」という言い方などの工夫が必要かもしれないです。

(3) 般若心経

仏道の「空の概念」は、「空」という漢字が、「全てを貫く穴」と、かなり真逆の「からっぽ」の意味があることから、議論が混乱してしまつたのだと思います。これは、悪魔崇拜のトラップが入り込んだ結果でしよう。般若心経に登場なさるのは、觀音様とサーリップタ尊者様です。これをお釈迦様は必死でお唱えしながら仏道をお広めになられたのだと、私は推察しております。あらかじめ、般若心経が悪魔に侵されにくくするために、また侵された時を想定なさつて、お作りになられたと思われます。以下に、このように考える理由を二つ記します。

第一点 私たちが目に見る般若心経は漢文なのですが、とにかく意味を捉えるのが難しいことです。かけ言葉もあるようで、返り点など打てる状況にないのです。さらに短いですから、本体への改ざんは至難の技です。原文から受け取る情報は、読んだ人によって異なり幅が広くなると思います。よつて、いい加減な解説を權威づけたり、文章の切れ目を変えたりして般若心経の眞理を覆い隠しているようです。

(三十六行) 是大明呪 (悟りのための真言であり)
（三十七行）是無上呪 (この上なき真言であり)

(三十八行) 是無等等呪 (比較するものがない真言なのである。)
（三十九行）能除一切苦 (これこそが、あらゆる苦しみを除き)

(四十行) 真実不虚。 (真実そのものであつて虚妄ではないのである、と。)
（四十一行）故説般若波羅蜜多呪 (そこで最後に、大いなる教えの真言を述べよう。)
こせつはんにやはらみつたしゅ

(四十二行) 即説呪曰 (すなわち次のような真言である。)
しんじつぶこ

(四十三行) 竭帝竭帝波羅竭帝 波羅僧竭帝 菩提。 (往き往きて、涅槃に到り、さらに涅槃に入りしが、悟りである。)
ぎやていぎやていはらぎやてい はらそうぎやてい ぼうじ

(四十四行) 僧莎訶 般若心経。 (めでたし、大いなる教えの般若心経。)

そわか はんにやしんぎょう
そくせつしゅわつ

「諸行無常とは、「色」の持つ特性であつて、「空」の持つ特性は真逆の絶対不变であると考えられます。」と（2）で述べましたが。
つまり、人の思考や行為で作られたエネルギーにより色（気）が流れ、さまざま現象や事物を作り出していると考えているの
です。これらの現象や事物は、常に氣の流れの影響を受けるので、不变であるはずはありません。これを諸行無常と捉えました。

三十二行 大いなる教え（般若心経）の真理（空）を得たことから、悟りを得て涅槃へ到達するという道筋が示されています。
この順序はとても大切だと思います。日頃の「努め励み」と「慎み」に気を付けて生活を送るうちに、（実は）真理は与えら
れるのでしきうが、正しい道筋である場合自分で、「与えられたのか？」それとも「自分で気づいたのか？」を判別がで
きないというのが、大方の正直な感想ではないかと思います。

*1、*2 「垂」「圭」漢字はパソコンで出力できる字となりました。写経等で使用されている文字は下記の通りです。
呪 この字は、「真言」（真の言葉）という意味で、感覚的には「呪（のろ）い」とは逆です。

垂 → 垂

圭 → 玖

般若心経
(三蔵法師玄奘訳) <http://structure.cande.iwate-u.ac.jp/religion/heannya.htm> もご参考 (深謝)

(一行) 観自在菩薩 (觀音菩薩様が)

(二行) 行深般若波羅蜜多時 (深遠な知恵を完成するための実践（熟考）されていいる時、)

(三行) 照見五蘊皆空 (人間を囚え縛り付ける五つの要素【=五蘊】と全ての空（真理）を熟考して)

(四行) 度一切苦厄。 (すべての苦しみを渡る)とができた。)
どいつさいくやく

(五行) 舍利子、 (舍利子よ、)

しゃりし

(六行) 色不異空 (色は空とは異らず、)
しきふいくう

(七行) 空不異色 (空は色とは異らず、)
くうふいしき

(八行) 色即是空 (色は空でもあり、)
しきそくぜくう

(九行) 空即是色　（空は色でもあり、[実際はそんな出鱈目な]ことはないのであるが、】）

くうそくぜしき
(十行) 受想行（業）識　（各自の】想念、修行（カルマ）、知識を受け、）

じゅそうぎょうしき
(十一行) 亦復如是。　（色は空に、空は色に帰せられると【誤】認識してしまう。）

やくぶによぜ

(十二行) 舍利子、　（舍利子よ、）

しゃりし

(十三行) 是諸法空相、　（諸々の真理（法）は空相であり、）

ぜしょほうくうそう

(十四行) 不生不滅　（【空相は】もともと、生じたり滅んだりするものでもなく、）

ふしおうふめつ

(十五行) 不垢不淨　（よごれていものでも、淨らかなものでもなく、）

ふくふじょう

(十六行) 不增不減　（増えることもなく、減ることもないのである。）

ふぞうふげん

(十七行) 是故空中無色。　（なぜならば、空は色ではない部分であるからだ。）

ぜこくうちゅうむしき

(十八行) 無受想行識　（各自の想念、行い、知識を受けなければ、）

むじゅそうぎょうしき

(十九行) 無限（眼）耳鼻舌身意（創造主の良金神の目【靈能】が無くとも、耳と鼻と舌と肌と意識が限り無く【研ぎ澄まされ】）

むげんにびぜつしんに

(二十行) 無色声香味触法　（色のない聴覚・嗅覚・味覚・触覚・法を理解する。）

むしきしそうこうみそくぼう

(二十一行) 無限（眼）界　乃至無意識界。　（創造主の良金神の目【靈能】が無くとも、「限」限界がなくなり、意識界とは異なる世界へと至ることができる。）

むげんかいないしむいしきかい

(二十二行) 無無明　亦無無明尽　（そこに到れば、無明もないで、無明が尽きるといふこともなく）

むむみょう　やくむむみょうじん

(二十三行) 乃至無老死　亦無老死尽　（老と死がなくなるので、老と死が尽きることもなく）

ないしむろうし　やくむろうしじん

(二十四行) 無苦集滅道　（苦しみを集めることも、真理を滅ぼすことも無くなるので、）

むくしゅうめつどう

(二十五行) 無知亦無得　（【真理】を知ることもなければ、得ることもなく）

むちやくむとく

(二十六行) 以無所得故。（したがって、【真理】を与えられる、ともない。）

いむしょとく

(二十七行) 菩提薩垂　依般若波羅蜜多　（悟りを求めている人々は、大いなる教えに依拠し、）（＊1）

ぼだいさつた　えはんにやはらみつた

(二十八行) 故心無圭礙。　（よつて、心に疑いと妨げがない。）（＊2）

こしんむけいげ

(二十九行) 無圭礙故無有恐怖。　（疑いと妨げがなければ、さらに、これにより恐怖が無くなる。）（＊2）

むけいげこむうくふ

(三十行) 遠離一切転倒夢想　究境涅槃。　（一切の逆転した夢想（色）から遠く離れている究極の境地が涅槃である。）

おんりいっさいてんどうむそく　くきようねはん

(三十一行) 三十世諸仏　依般若波羅蜜多　（過去・現在・未来にわたる仏様たちは、大いなる教えに依拠しているので、）

さんぜしょぶつ　えはんにやはらみつた

(三十二行) 故得阿耨多羅三十藐三十菩提。（この上なまき真実を得たので、悟られているのである。）

ことくあのくたらさんみやくさんぽだい

(三十三行) 故知　（したがつて次のように知るがよい。）

(三十四行) 般若波羅蜜多　（大いなる教えこそが）

はんにやはらみつた

(三五行) 是大神呪　（偉大な真言であり）

を厭(いと)い離れ、身を修めて、死ぬ時の到来を願っている人、——かれは（自己）を制した人）である。とおっしゃっています。「血口を制した人」→「心を整えた人」（付録2参照）とします。ここでは、真人とましよう。真人になつたあかつきには、死を恐れるべしろか、「死ぬ時の到来を願っている人」になるとおっしゃっています。新人でも、死ぬのを恐れる人もいれば死の到来を願つてゐる人もいるといふお釈迦様の教えと整合が取れません。

「暴力に怯え」そして「死をおそれて」ばかりいたのでは、悪魔のやりたい放題の世の中になります。あちらは、私たちに武力と暴力の境目をぼやかして全面禁止し、正当な智慧の武力の行使さえ抑えて、自分たちは暴力し放題なのです。暴力を禁する教えは、同時に正当な武力や戦いまでをも禁ずる行き過ぎにつなげてきていますので、要注意です。

詩O131とO132に関しては、何度も書きますが、お釈迦様は、来世を幸せに過ぎるために仏法を説かれたのではありません。これが諸宗教の諸悪の根源・オネダリ信仰なのです。

以上より、これら4詩は、全くと言つて良いほど、整合が取れず、書き直しのレベルではなく、悪魔による改ざんと判定したので、一度は書き直しましたが、削除します。

O137 + O140

手むかう」となく罪咎の無い人々に害を加えるならば、次に挙げる十種の場合のうちのどれかに速やかに出会いであろう、(1)激しい痛み、(2)老衰、(3)身体の傷害、(4)重い病い、(5)乱心、(6)国王からの災い、(7)恐ろしい告げ口、(8)親族の滅亡と、(9)財産の損失と、(10)その人の家を火が焼く。

この愚かな者は、身やぶれてのちに、地獄に生まれる。

(口メハム)

GS13 惣 G156 詩とほぼ同じ内容です。

詩番号の付き方が不明です。

やいにこの詩に挙げられている10個の災いの根拠が不明なことや、「地獄に生まれる」と云つた表現がお釈迦様が使つたとは考えにく

いゝ、などから、この詩は、代替もありますし、削除します。

O145

水道をつくる人は水をみぢびき、矢をつくる人は矢を矯め、大工は木材を矯め、慎しみ深い人々は自己をととのへる。

(口メハム)

GS22 G297 詩とほぼ同じで、慎み深い人が、賢い人と変わつてゐるだけですので、当詩は削除します。

どうして暴力の章にあるのか？ 不明です。

以上より、この詩は削除します。

GS13 惣 G156 や、前半部分が同じです。

GS22 G297 詩とほぼ同じで、慎み深い人が、賢い人と変わつてゐるだけですので、当詩は削除します。

(口メハム)

他方「空」は、この世の中もある世も全ての世界を貫く真理であると考えたので絶対不变になるのです。
以上の考え方方に則れば、この世のものは全てが諸行無常なわけではなく、絶対不变である真理（空）も混在していることになるのです。従つて、この世の中は、諸行無常の部分が多いとは思うのですが、全てが諸行無常ではないとなるため、「色により形成された全ての事象は諸行無常である。」ということが結論づけられます。

一切皆苦も同様に、色に属する事象が変化するにつけ、規制事象が変化した事象に合わなくなることに苦を感じる人間の性質を教える詩だと考えます。しかしいつたん絶対不变の「空」を体現した場合、この世のもの全てが苦であると考えることは難しいと思います。つまり、自然も自分の身体も平等に愛おしくなる感覚といいましょうか。したがつて、「真理（空）を体得せねば、色により形成された事象がこの世の全てだと信じ、この世の中は一切皆苦と誤認する。」といふことが結論づけられます。

諸法非我については、まず「我」という文字について考えましょう。「我」=手+戈（ほい：武器）で出来ていて、本意はどうやら「武器を手に取ること」らしいのです。しかし一般には「我」の音が近いことから自分という意味を指したと言われています。「我」と同じ意味で「吾」という字がありますが、「吾」は神のお告げというのが本意だったということで、五つの口と書きますから、正守護神様十四魂からの正しい言葉を発する自分と解釈できます。一方、我は武器を取るような乱暴な自分、いつも自己主張ばかりする自分、つまり副守護神様を指していると、私は確信しました。

そこで、一二三神示の言説「我よし」の精神を取り入れて考えてみます。「我よし」こそ「我」であり、さらにその発信源が幽界に住する副守護神様であると考えられます。「諸法非我」とは、諸法つまり諸々の真理には、「自分だけ良ければガチャガチャ自己主張しても、最終的には武器をとっても許容される。」という幽界的な要素は全く存在しないという意味になるのでしょうか。

第5部 削除詩

* OS01 ひと組ずつ

O009 けがれた汚物を除いていないのに、黄褐色の法衣をまとうと欲する人は、自制がなく真実もないのであるから、黄褐色の法衣はふさわしくない。

O010 けがれた汚物を除いて、戒律を守る」といに専念している人は、自制と真実とをそなえているから、黄褐色の法衣をまとうのにふさわしい。

(口メヘント)

法衣を纏う条件ですが、お釈迦様が法衣を規定したのか疑わしいものです。

お釈迦様の説かれた仏法が、仏教という宗教へ誘われた時に、教団が付け足した詩文と、私は認識致しましたので削除としました。

O017 悪いことをなす者は、この世で悔いに悩み、来世でも悔いに悩み、ふたつのところで共に喜ぶ。彼は自分の行為が汚れているのを見て、憂え、悩む。

O016 善いことをした人は、この世で喜び、来世でも喜び、ふたつのところで共に喜ぶ。彼は自分の行為が淨らかなのを見て、喜び、楽しむ。

O018 善いことをなす者は、この世で歓喜し、来世でも歓喜し、ふたつのところで共に歓喜する。「私は善いことをしました。」といつて悔いに悩み、苦難のところ（地獄など）におもむいて（罪のむくいを受けて）やるに悩む。

O018 善いことをなす者は、この世で歓喜し、来世でも歓喜し、ふたつのところで共に歓喜する。「私は善いことをしました。」といつて歓喜し、幸あるところ（天の世界）におもむいて、やるに喜ぶ。

(口メヘント)

お釈迦様は、来世を幸せに過ごすために仏法を説かれたのではありません。これが諸宗教の諸悪の根源・オネダリ信仰なのですよ！お釈迦様は、今が大切、今、心を整え、心が治まる方法、そして神様が創られた、そして神様の一部でもある、法（則）を、塵穢れに満ちた三次元を生きている人間に伝授されに、この世にいらしたのです。法というものは、人間にとつて遠く離れたものではなく、正しく話を聞けば何となくでも理解できるものなのです。なぜなら、人間も法の一部だからです。それに対して、来世とか苦難のところとか、幸あるところという曖昧な言葉で連想される世界は、理解と言うより想像しかできないのです。曖昧な世界の描出、来世へのオネダリ系

の詩句は削除します。

* OS03 はげみ

O036 心は極めて見難く、極めて微妙であり、欲するがままにおもむく。英知ある人は守れかし。
心を守つたならば、安楽をもたらす。

F004：悪魔は、この心の支配を狙う。心を悪魔から守らなければ、安楽は得られない。心を正しく治めれば安楽を得る。

(口メヘント)

(F004, C, O036, OS3) 「極めて見難い」、「極めて微妙」というのは潜在意識部分だと考えましたが、あまりこあやふやなのも、ver.2の再考にあたり削除しました。

* OS06 賢之人

O088 (B080) 賢者は欲樂をして、無一物となり、心の汚れを去つて、おのれを淨めよ。
(口メヘント)

無一物となる必要はないので、詩 자체を削除します。

* OS10 暴力

O129 (B289) すべての者は暴力におびえ、すべての者は死をおそれる。己が身をひきくらべて、殺してはならぬ。殺させではない。
O130 (B290) すべての者は暴力におびえ、すべての（生きもの）にとって生命は愛しい。己が身にひきくらべて、殺してはならぬ。殺させてはならない。

O131 (B291) 生めし生ける者は幸せをもとめどん。もしも暴力によつて生きものを害するならば、その人は自分の幸せをもとめていても、死後には幸せが得られなくなる。

O132 (B292) 生きとし生ける者は幸せをもとめどん。もしも暴力によつて生きものを害しないならば、その人は自分の幸せをもとめていても、死後には幸せが得られる。

(口メヘント)

詩 O129 より O130 に関つては、「すべての者は暴力におびえ」と「すべての者は死をおそれる」が、誤りです。「暴力に怯えぬ」のではなく、「暴力を嫌悪する」なら間違えではないでしょう。

他方、お釈迦様は、「ブッダのいぶせ」の 516 詩にて、「全世界のうちで内面的にも外面的にも諸々の感官を修養し、この世とかの世とい

O294 (「妾愛」という)母と(「われありとい慢心」である)父とを滅ぼし、(永久に存在するという見解と滅びて無くなるという見解といふ)一人の武家の王を滅ぼし、(主觀的機官と客觀的對象とあわせて十二の領域である)國土と(「喜び貪り」という)従臣とを滅ぼして、バラモンは汚れなしに赴く。

O295 (「妾愛」という)母と(「われありとい慢心」である)父とを滅ぼし、(永久に存在するという見解と滅びて無くなるという見解といふ)一人の、學問を誇るバラモン王を滅ぼし、第五には(「疑い」という)虎を滅ぼして、バラモンは汚れなしに赴く。
(口メンソレ)

この二つの詩は、中村氏の注釈が非常に多いのですが、そのすべてがブッダゴーサの注釈を日本語で紹介しているだけです。そして、後代に出来上がる仏教教義を彷彿させる内容です。これら的事から考へても、両詩は、お釈迦様が起因ではなく、ブッダゴーサが起因ではないかと、私は考へています。

両方の詩ともに似たことが書いてあります。残念ながら整合が取れず、さっぱり意味不明です。もし仮に、ブッダゴーサがこの詩を作ったとして、この整合の取れない二つの詩を残したのであれば、なぜ、みすみす、少し考へれば、「頭おかしいじゃない?」とわかる、この二つの詩を並べておいたのでしょうか? この二つの詩の作られた目的が定かではありませんが、私たち一般人にはわからない暗号ではないかと、私は推察します。

ここで、(...)の部分を取つて、文章のスキームを見てみましよう。

「母と父とを滅ぼし、二人の武家の王を滅ぼし、12の國土と従臣とを滅ぼして、バラモンは汚れなしに赴く。」

「母と父とを滅ぼし、二人の学問を誇るバラモン王を滅ぼし、第五には虎を滅ぼして、バラモンは汚れなしに赴く。
何だか、相当おかしな暗号もどきが出てきました。

汚れないバラモンになるには、母と父を滅ぼすことが、第一条件なのでしょう。尊属殺人で、汚れる境地ではあるのですが。この仏魔の試験に合格したバラモンに、仏魔が私たち人間の住む12の領土(12支族の国)と人間を守る武家と学問の王や従臣、そして、神様を表す虎の順で滅亡させる命令を出している、そんな感じの詩です。

ブッダゴーサは仏魔の化身なんですね。それを逐一、記述してくださいる中村元氏です。これは、すごい文献です。お釈迦様が活躍なさった当時は、実はすでに魔がヴェーラに入り込み、バラモンは魔の手先に成り下がっていたのです。この仏魔バラモン達は、その見返りに、優遇され莫大な富を貯めていました。これを示す記述は「ブッダのことば第二小なる章7バラモンにふさわ

* OS12 [皿印]

O159 詩 G014 参照

* OS14 [皿印]

O195 + O196 (B166) すでに虚妄な論議をのりこえ、憂いと苦しみをわたり、何ものも恐れず、安らぎに帰した、拝むにふさわしいそのままの

ような人々、わんわんのブッダまたその弟子たちを供養するならば、この功德はいかなる人でもそれを計ることができる。
(口メンソレ)

ブッダを供養するならまだしもですが、その弟子とまでなると、あやふやになってしまって削除としました。供養に関する教えの詩は、GS7節G074, 075詩で考察し述べられています。

* FS15 楽しみ

O203 飢えは最大の病いであり、形成せられる存在(わが身)は最もひどい苦しみである。」の」とわりがあるがままに知ったならば、ニルヴァーナという最上の楽しみがある。

F105: 飢えは最大の病いであり、形成せられる存在(わが身)は最もひどい苦しみである。「の」とわりがあるがままに知ったならば、ニルヴァーナという最上の楽しみがある」とを知るであろう。
(口メンソレ)

(F105, B, O203, OS15)
本書で再考した結果、「飢えが最大の病」とか「わが身が最もひどい苦しみ」とか書き直しようないので削除しました。

* OS16 愛するもの

O210 愛する人と会うな。愛しない人とも会うな。愛する人に会わなのは苦しい。また愛しない人に会うのも苦しい。

O211 それ故に愛する人をつくるな。愛する人を失うのはわざわいである。愛する人も憎む人もいない人々には、わざらいの絆が存在しない。
(口メンソレ)
「愛する人と会うな」etc. なんて、人間の一存でできるわけないです。

「神になるよう修行せよ」とか、「欲望をなくせ」とか、土台人間では無理な事を言って、頑張らせるのが、悪魔の常套手段です。人間つて真面目ですから、できるはずと思い込んで、それでできないと、自分を責めてしまって、発狂するのです。
・人間である以上、できないものもある

・やきない理由が本当はどうにあるのかを、冷静に考へるゝことが、実は人間の務め

私が、お釈迦様に代わつて僭越ながら勝手に宣言いたします。
この2詩などは、虚偽で、悪しきどりに引っ張られる人たちを増やすので、削除しなくてはなりません。

* OS17 怒つ

O221 怒りを捨てよ。慢心を除き去れ。いかなる束縛をも超越せよ。名称と形態とにだわらず、無一物となつた者は、苦惱に迫われるゝ
じがない。

(口メンソール)

怒りは全てが悪いことではないのです。それに振り回されではありませんが、真実なら全部語らなくてはならないと誤解を生じる詩句

O224 真実を語れ。怒るな。請われたならば、乏しいなかから与えよ。これらの三つの事によつて（死後には天の）神々のもとに至り得るであ
るべ。

(口メンソール)

時と場合によつて、語つて良い真実も、語つてはまずい真実もあるのですが、真実なら全部語らなくてはならないと誤解を生じる詩句

になつてゐます。

怒りを制し、怒るべきゝとは怒らなくてはなりません。

詩中の3つを守つたなら、死後に神々のもとに至り得る保証をお釈迦様がお与えになるとは考えられません。お釈迦様の教えは、死後に神々の元や天国に行くためのものではなく、生きている間に、自分と人類を含めた生類に尽力し、自らが進化するための道筋を示されてゐるのです。

この詩の中で、否定できない部分は、「請われたならば、乏しいなかから与えよ。」ですが、これは分かち合いの教えです。これに関する

詩は別立てに GS5世の中 G053 詩、GS15汚れ G177 詩 にあります。

以上かば、この詩は削除します。

O225 生きものを殺すゝとなく、つねに身をつゝしんでいる聖者は、不死の境地(くに)におもむく。そこに至れば、憂えるゝとがない。

(口メンソール)

肉体は滅んでも、魂はなかなか滅ばないといつのが、お釈迦様の教えです(詩F083、F251など参照)。基本的に、魂は不死なのです。

わらひに、不死の境地が何を意味するのかはつきりしません。

生き物を殺すとは、不当に殺すことはいけないけれど、正当性があれば仕方ないと言わせるおえません。

* OS18 汚れ

O236 だから、自己のようひいふをつくれ。すみやかに努めよ。賢明あれ。汚れをはらい、罪過がなければ、天の尊い処に至るであらう。

(口メンソール)

詩O236とG173(O238)詩も非常に似ていふのですが、O236詩の「天の尊い処に至る」とG173(O238)詩の「汝はもはや生と老いと向上をめざさないであらう」が異なつていています。仏法は、死後の世界をよりよくするために説かれてゐるのではなく、精神性(靈性 or 魂)の向上を目指し、今、自分がどう努力るべきかを説いた教えです。よつて、詩O236の「天の尊い処に至る」という部分は不適当で、詩238では、「汝はもはや生と老いとに近づかないであらう」という部分は、転生からの離脱を説いてるので、よりお釈迦様の教えを忠実に述べています。したがつて、詩236は削除して、詩G173(O238)を残します。

O237 汝の生涯は終りに近づいた。汝は、閻魔王の近くにおもむいた。汝には、みちすがら休らう宿もなく、旅の資糧も存在しない。

(口メンソール)

O237 詩はO235(G172)詩とほぼ同じなので、後代の付け足しと言われてゐるO237詩は削除し、O235(G172)詩を残します。

[参考] 詩O235(F173)

汝はいまや枯葉のようなものである。閻魔王の従卒もまた汝に近づいた。汝はいま死出の門路に立つてゐる。しかし汝には資糧(かて)
やべも存在しない。

* OS19 道を実践する人

O265 (B097) 大きからうとも小さからうとも悪をすべてとどめた人は、もうもろの悪を静め滅ぼしたのであるから、
「道の人」と呼ばれる。

悪にも必要悪があつといふ、道の人という曖昧な表現があることの一例から、書を換えて対応せず、削除としました。

* OS21 様々なこと

「<https://www.youtube.com/watch?v=WkuwXGyE9Ck>」(22 : 57あたりより)に書かれていますが、教えを述べられたお釈迦様に対し、「大富豪であるバラモンたわは、師に言つた」と記述があります。大富豪のバラモンって、笑つちやうよね。普通は読み過でしちゃうけれど、気がくと笑つちやいます。しかも、彼らは自分たちで、お釈迦様に「在俗信者として受け入れてください。」って懇願するんです。自分たちの財を投げ打つ出家なんて真つ平御免なんでしょうね。本当に大爆笑！このバラモンたちは、学問を誇るバラモン王のお釈迦様を滅ぼしに来た、仏魔バラモンなんでしょうね。でも、お釈迦様はその攻撃を智慧により打破されたのだと思います。

* OS25 修行僧

O362 手をつつしみ、足をつつしみ、りんばをつつしみ、最高につつしみ、内心に楽しみ、心を安定統一し、ひとりで居て、満足している、—その人を「修行僧」と呼ぶ。

(口メノム)

G225, G253 話と同じ教えの詩ですが、「内心に楽しみ」とか「ひとりで居て満足していぬ」など、不要な語が多いので、わざわざ書かれ直わざ、削除しました。

謝辞

本書を記すにあたり、たくさんの方々の指導と守護をくださった師匠の方々、特にお釈迦様に、心より感謝申し上げます。

また、当方を支えてくれた家族に大きな負担をかけてしまつたことにお詫び申し上げます。それでも、最後まで続けさせてくれた事に感謝でいっぱいです。 合掌